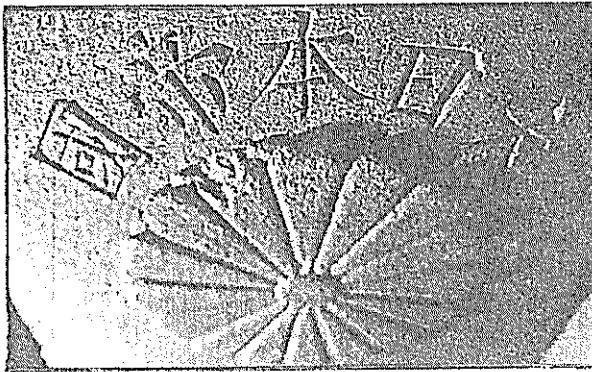


樺太（サハリン）

紀 行

（下は北緯50度線の旧日ソ国境標石）



平成 5 年
7 月 3 1 日～8 月 4 日

寺 前 信 次

「樺太（サハリン）紀行」目次

まえがき	・・・ 1	日本軍の戦闘状況	・・・ 35
間宮林蔵の樺太探検記	・・・ 3	荒貝沢の戦闘	・・・ 36
中国史による極東（含樺太）		熊笹峠の戦闘	・・・ 37
の歴史的経過の概要	・・・ 12	真岡の観光	・・・ 39
ロシアの（株）インツーリスト		野 田	・・・ 42
による樺太の概要	・・・ 14	泊 居	・・・ 44
日本からみた樺太の		久春内	・・・ 46
歴史の概要	・・・ 15	8月2日	・・・ 47
戦後、樺太の朝鮮人は		真 縫	・・・ 47
なぜ残されたか	・・・ 17	白 浦	・・・ 49
終戦時の日本軍の状況	・・・ 18	落 合	・・・ 51
7月30日	・・・ 23	列車の旅は	
稚 内 へ	・・・ 23	終わりに近づく	・・・ 52
7月31日	・・・ 24	豊原市内観光	・・・ 53
稚内～大泊	・・・ 24	8月3日	・・・ 56
大泊～豊原	・・・ 26	大 泊	・・・ 56
豊原の概要	・・・ 27	日露戦争樺太上陸記念碑	・・・ 59
8月1日	・・・ 28	富内湖	・・・ 60
朝の散歩	・・・ 28	豊原市内観光	・・・ 61
ホテル列車の旅	・・・ 29	お別れ晩餐会	・・・ 64
真 岡	・・・ 32	8月4日～5日	・・・ 65
真岡の概要	・・・ 32	帰国の途につく	・・・ 65
ソ連軍上陸時の		あとがき	・・・ 66
悲惨な真岡市街の状況	・・・ 33		

人生とは何ぞやを知る前に早や人生の大半が過ぎ、膝の関節痛を患って悩むこと一年有半を経過した。然し乍ら、譬えどんな人生であれ他人の人生ではなく、自分の人生に生きなければならない。

振り返ってみると我が人生は決して順風ではなく、逆風の中を突っ走ってきたが、誰にでも人生には不幸や挫折がある。しかし不遇に遭遇しても挫けず、或いは失意のうちにダウンするかが、言わば人生の分岐点であろう。

病に苦しむばかりの人生では詰まらず、苦しむも楽しむも一生は一生だと、本年正月にオーストラリア一周18日間の旅に挑戦した。逆境の中に生き長らえた先住民のアボリジニに接した時、病人には回復の楽しみがあり、開き直った気持こそが再起の根源だと意識した。

逆境には発奮させる要素を含み、不幸を治す精神的要素は希望より他にない、とオーストラリア先住民は教示していた。不幸な人ほど喜びを感じると言われる通りで、この感性こそ大事にしたいものである。

去る4月下旬、時には病に打ち克つためにも気分転換が必要だと、愚息は考えてもいなかった小笠原の旅に私を連れ出した。杖をつきながらの父島・母島の旅は、心を楽しく持てば世界は果てしなく広がり、求めなければ何も無いと、人生の航海術を暗示してくれた。

小笠原航路の片道28時間余の退屈な一等船室の中で、愚息は友人が経営する観光業者が樺太観光を募集中で、思い切って参加してはどうかと具申した。

「^{たび}旅心」という通り、脚の悪い者は旅ができないと思えば思うほど、旅をしたいという欲望が強くなる。生きるだけ生きなければならないからであろう。

何の取り柄のない行尸走肉の私にも「能なしの能一つ」というか、旅心という一つだけの財産が与えられている。喜びもの悲しみも生きているからこそ味わえるのだ。懸車の年を過ぎた我が老後は今や一刻千金、牛に引かれて善光寺詣りのように樺太行を決意した。

図らずも「生者必滅会者定離」の通り7月4日、実兄が85歳の天寿を完うして鬼籍に入った。生き身は死に身でいつ死がくるかわからず、「朝に紅顔ありて夕に白骨となる」のが人生だと痛感させられた。

この世は無常で人生は朝露の如しだと考えると、生きているうちが花だと気が焦り、人の一生はその人の心掛け次第で歳月は人を待たず、機会は得難く失い易しと樺太行きを意思を更に固めた。

旧軍時代の札幌歩兵第25連隊（私の出身連隊）は満州から引き揚げたが、その後の消息は全く不明であった。私の中国戦線での刎頸の友・斉藤貞二氏に問合せたところ、同連隊は樺太に転進して終戦を迎え、現在その連隊史は編纂中であつた。

一方、私が中国戦線に出征中の隣の連隊長であつた峯木十一郎大佐は、後日、樺太の第88師団長（中将・28期）に栄進し、歩兵第25連隊はその隷属下となっている。国家を意識した私の前半世の夢は簡単には消えず、不思議にも樺太とは何か細い紐で結ばれていたのである。

昭和20年4月5日、日ソ中立条約を一方的に破棄したソ連は、理不尽にも8月9

日、平和そのものであった樺太に侵入を開始した。粗暴極まるソ連軍によって樺太は忽ち阿鼻叫喚の混乱状態に陥り、終戦の8月15日を過ぎた23日までも、無事の民は蹂躪されたのである。

時の流れと共に忘却の彼方へと消え失せてしまった彼の大战を顧ると、冷酷非情なソ連には怒りで腸が煮えくり返る思いがする。しかし何が起こるか予測はできず天罰^{テウ}顔面、共産主義は崩壊した。冷戦後の樺太が如何に変化したか興味津々であった。

私の軍を含めた樺太に関する知識は幼稚なもので、世界に誇る間宮林蔵のほかは、1938年12月の新協劇団監督の杉本良吉と、女優・岡田嘉子のロマンの越境事件程度しか脳裏に浮かばなかった。

火打石の火は石に戻ることがないように、過ぎ去った歳月は戻らない。しかし勇気と意思で行動を起こす人間には、何かが力を貸してくれると信しながら、人生の試練に打ち克つ思いで樺太行に挑戦したのであった。

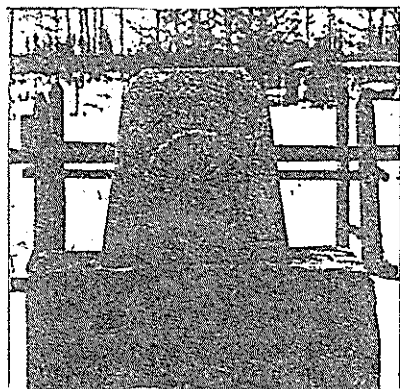
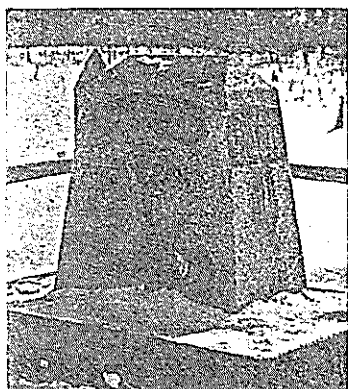
樺太に関する文献は非常に乏しいが、紀行文に入る前に例によって樺太の歴史の概要を記し、樺太を知るうえの知識として下記のように記載した。

先ず日本の誇る間宮林蔵の樺太探検記「東韃靼^{タタール}地方記」の抜粋を記し、次いで「中国史による極東（樺太を含む）の歴史的経過」と、「ロシアの旅行会社インツーストの記事」を掲げ、最後に「朝鮮人はなぜ残留させられたか」及び「終戦時の軍の状況」を記述した。

下は戦前の国境の標識

徳川幕府と帝政ロシアが明治8年に樺太千島交換条約を結び、日本は樺太の領有を放棄した。日露戦争の結果、北緯50度以南が日本領となり、東西135kmの5～10kmおきに16個の境界標識が設けられた。

南面の菊花（右）と、革命後に削除された北面のロシア皇帝の紋章・双頭の鷲（左）。



間宮林蔵の樺太探検記「東韃靼地方紀行」

〔1775～1844（安永4～弘化1）〕

江戸後期の北方探検家で名は倫宗、常陸国筑波郡上平柳村（現筑波郡伊奈町）の農家の子として生まれる。

彼は数学の才が認められて幕府普請役雇、ついで同下役となり、1800年（寛政12）蝦夷地御用雇となって幕吏の村上島之允に従い蝦夷地（北海道）に渡った。このとき蝦夷地で測量中の伊能忠敬について測量学を学んだ。

1803年（享和3）西蝦夷地を測量、1806年（文化3）にエトロフ島に渡り、東端から西端まで入念に測量したが、太平洋岸の地域は翌年春、ロシア軍艦の来襲によって果たさずに終わった。彼は測量できなかった太平洋岸の一部は点線で概要図を描き、エトロフ島全図を作り上げた。

当時の樺太南部は最上徳内らによって調査され、概要は明らかにされていたが、北部は未知であった。幕府にとってはその地域の地勢を知ることが、国防、経済の上で重要視されていた。

西欧では測地術の急速な進歩によって正確な地図の作成が活発に行われていた。それは先ず自国の地図づくりから始まり、関係の深い地や島の地図作成へと及んでいった。

さらに遠洋航海に堪えられる船の出現によって、それらの船で遠く離れた地域との貿易が盛んになると、地球上の各地の正確な海図が必要とされ、地理学者たちは、その求めに応じて測量を行い水深も測って海図をまとめ、航路を設定した。

それと平行して世界各地の大陸、島の地図作成も積極的に進められ、互いに実測された地図の交換も盛んに行われて、世界の地図の全容が明らかにされていった。

貿易船の行き交う航路沿いの地域は、それによって正確な地図が作成されていったが、船の航行することの殆どない地域の地図は余白のままであった。

地理学者たちの努力によって全世界地図の作成が終わっていたが、その地図の中で1ヶ所だけ不明な部分が残されていた。それが樺太北部の地勢であった。憶測図は幾つか作られていたが、それらはまちまちで一定せず、世界の謎の地域とされていた。

樺太については日本、中国、さらに西方諸国の三方面から探検が行われていた。樺太の対岸にある沿海州を東韃靼として領有していた中国（清国）では、海を隔ててサハリンという島があることを知っていた。

その一方では日本が樺太南部を明らかにしていたので、サハリン島と樺太とは別なものと考えられ、樺太が島であるか、それとも東韃靼との地つづきである半島なのか、全く見当がつかなかった。

中国で作られた地図はヨーロッパに伝えられ、フランス王室の地図師ダンヴィルによって地図として纏められていた。それには樺太を半島とし、その西方にサハリン島が描かれていて、それが権威のある地図として扱われていた。

この図はオランダを通じて長崎にもたらされ、林子平が1785年（天明5）に著わした「三国通覧図説」では、樺太を東韃靼の地つづきであると断定した。また老中・松平定信も通詞・本木仁太夫が和訳した「和蘭陀製全世界地図書」によって、樺太は半島であり、これを島らしいと憶測するのは誤りであると書き記した。

これによつて日本の有識者たちは樺太半島説を信じ、さらに北方地域の最高の研究者である近藤重蔵も、その説を全面的に支持したことによって、それを疑う者はいなくなった。

幕府はそれを実地に確認するため1801年（享和1）、小人目付・高橋次太夫、普請役・中村小市郎を樺太に派遣した。彼らは南部を踏査したが北部に入ることはできず、僅かに北部から交易にきた東韃靼の山丹人に、砂上に地図を描かせて北部の地勢を聞いたが、樺太が半島か島かはわからなかった。

近藤重蔵は高橋、中村両名の調査結果を考慮した上で、西欧で定説化されているように、樺太は東韃靼の大陸との地つづきである半島とし、それとは別にサハリンという島があると判断して「辺要分解図考」を著わした。その説も憶測の域を出ず、依然として世界地図の上で唯一の謎の地域とされていた。

西欧の地理学者はこの地域の解明に挑戦した。初に挑んだのはフランス人のドウ・ラ・ペルーズであった。彼は1787年（天明7）、探検船に乗って黄海から日本海に入り、北上して樺太南部に達した。

左に東韃靼（沿海州）の大陸を望み、右に樺太を見る位置にまで進んだ。その間、水深を測っていたが海は浅くなる一方であった。彼は樺太が島であるなら北から潮流が流れてくる筈なのに、その気配もなく、定説の通り樺太は大陸と地つづきの半島だと判断した。

海は浅くなる一方で船を進めることができない。ラ・ペルーズは船を反転させて引返し、宗谷海峡をぬけてカムチャッカへ向かった。

この探検によって彼は中国側が唱えるサハリン島を目にすることができず、サハリン島が樺太と別に存在するという定説をくつがえし、サハリン島は半島である樺太と同じものであると断定し、地図を作成して公表した。

この地図は大きな反響を呼び、蝦夷の北部にあるのは樺太だけで、しかもそれは半島だとされたのである。

ラ・ペルーズの探検の結果を確認するため、イギリス人のブロートンが探検船に乗って調査に乗り出した。船は日本の太平洋岸を北上し、津軽海峡をぬけて樺太の西海岸沿いに北へと進んだ。

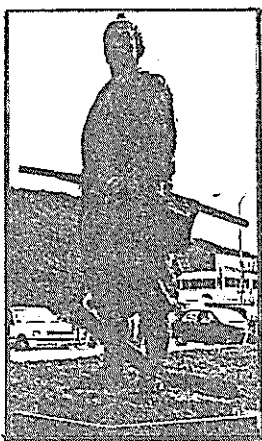
ブロートンはラ・ペルーズが引き返した地点から更に8マイル（12、8km）北上した。北緯51°45'7"の地点であった。その位置で水深を測ると2尋（約3、6m）の浅さで、船を進めれば坐州の危険があった。

周囲を観察すると北の方向に3マイル（4、8km）ほどの奥行きのある湾が認められ、湾内の水は湖面のように静止していた。彼はそれが樺太半島の付け根にある湾だと考え、船を反転させて日本海を南下して香港に戻った。

ブロートンは帰国後の1804年（文化1）、「北部太平洋探検航海記」を発表し、樺太が半島であると明記した。

ラ・ペルーズ、ブロートンの両探検により、サハリンと樺太が同一であるという説は日本にも伝えられ、樺太が半島であることを疑う者はいなくなった。

（上の写真は宗谷岬に立つ間宮林蔵の銅像）



これらの説を最終的に確認しようとしたのは、ロシア人のクルーゼンシュテルンであった。彼は1805年（文化2）、樺太東海の北知床岬から測量しながら北上し、8月8日、遂に樺太最北端の岬に辿り着いた。

彼は岬をまわり西海岸を南下した。そのまま進めば樺太と東韃靼の沿海州大陸との間の海峡を通過し、樺太が島であることを確認できたのだが、水深が浅くなったので船を進めることを中止した。そして反転してカムチャッカへ引き返した。

クルーゼンシュテルンは、やはり樺太は東韃靼大陸を流れるアムール河（黒竜江）河口の南で、大陸と接続している半島という結論を下し、その調査結果を「世界周航記」として発表した。

半島である樺太がどのように東韃靼大陸とつながっているか、その調査を幕府は調査下役元締・松田伝十郎（当時40歳）と間宮林蔵（当時29歳）の両名に命じた。

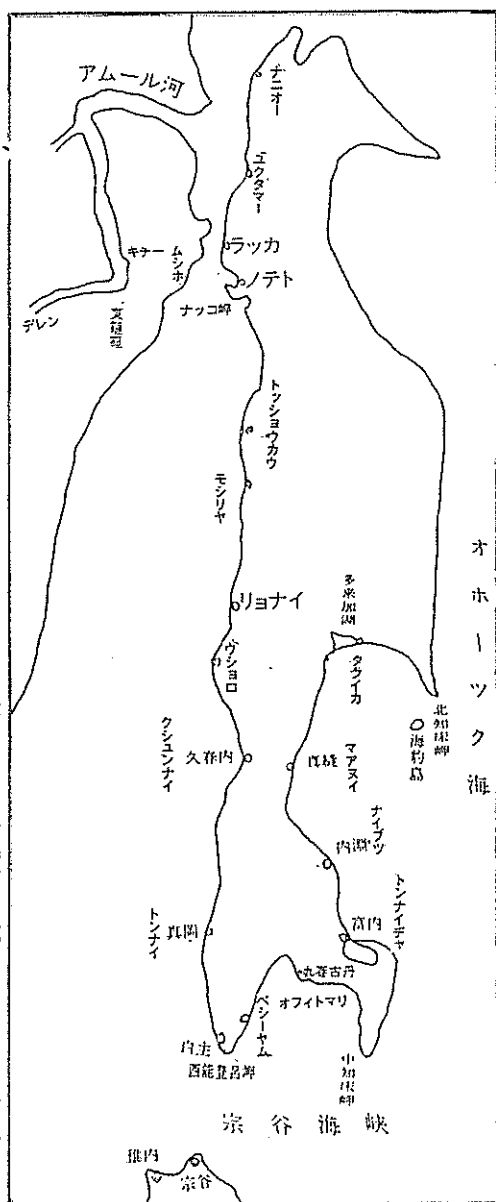
1808年（文化5）4月13日早朝、アイヌの漕ぐ松田と間宮を乗せた図合船は宗谷を出発し、18里（71km）の海を無事に渡り、西能登呂岬近くの自主にその日の夕刻に到着した。自主には支配人や番人、アイヌが詰める会所が設けられていた。

自主で松田は樺太の東西の両海岸に分かれて北上しようと提案し、自らは西海岸を進むと主張した。東海岸に行く林蔵が、若し奥地でそれ以上に進めなくなった場合には、陸地を横断して西海岸に出て、合流してもよいと命じたのである。

自主に到着してから4日後の4月17日、林蔵はアイヌ2人とともにチップ（小舟）に乗って岸を離れた。西能登呂岬をまわってベシーヤムに一泊し、翌日には九春古丹（大泊、現コルサコフ）に到着した。

中知床岬をまわると日数がかかるから、岬の付け根の陸地を横切った。付け根は沼と川が多く舟を引いて行くには好都合で、翌日には大きな湖の富内湖（トンナイチャ）に出て、夕刻には中知床半島を横断した。

5月2日には内淵（ナイブツ）まで北上し、舟はアイヌ村落のある海岸に着くことを繰返し、17日には北知床岬の付け根にある多来加（タライカ）湖畔に辿り着いた。（上図は間宮林蔵が描いた進路図で、地名はアイヌ語や原住民語である）



しかし多来加にくるとアイヌの姿はなく、オロッコ人だけが住んでいた。これで樺太北部の東海岸はオロッコ人の居住地だと判明した。又その標柱には漢字が彫られており、樺太北部は清国（中国）の影響下にあることを知った。

〔オロッコ族はツングース（通古ス）系の一つで樺太北部に住んでいる。ツングースは東シベリアから北満州に分布し、中国史上では女真、満州、清に所属〕

林蔵はさらに東海岸を北上して樺太の最北端をまわり、西海岸に出ることが理想とした。北知床岬をまわる日数を節約するため、半島の最も狭い陸地を横ぎり東海岸に出た。

海を眺めた林蔵はアイヌたちと共に顔をしかめて嘆息した。激浪が押し寄せ、しかも潮の流れが驚くほど速い。チップ（小舟）を海に乗り出すことは危険きわまりなく、樺太の最北端をまわり西海岸に出ることは不可能と判断しなければならなかった。

松田伝十郎の指示のとおりの方が来たことを知った林蔵は、アイヌたちの意見を入れて真縫（マヌイ）から久春内（クシュンナイ）に至る、樺太で最も幅の狭い箇所を横断することに決意した。

海岸沿いに引き返した彼らが真縫に着くことができたのは5月30日であった。6月2日、アイヌは舟を真縫川の上流へと進ませ、或いは舟をかついで山を越え谷を渡り、6月4日に久春内川の岸に着き、夕刻に久春内海岸に辿り着いた。

松田一行はこの地を半月ほど前に舟で通過して北に向かったことを知り、林蔵は苛立った。松田の乗った図合船は8人も乗れるもので、林蔵のチップよりも遥かに大きい。もしも松田が樺太北部の地勢を完全に調査していたら、自分が樺太に来た意味がないと腹立たしい思いであった。

山越えて傷んだチップの修理を終えて2日後に舟を出し、夕刻に岸に上がって野宿することを繰り返した。松田の後を追った林蔵たちがモシリアという海岸に着いた時、松田一行が図合船を残し、チップ（小舟）2隻に乗り換えて北上したことを知った。

林蔵はアイヌを励まししながら北へ舟を進ませ、久春内を出発してから14日目の6月20日夕刻、ノテに近づいた。林蔵の舟の進行方向に2隻のチップが見え、それが松田一行であった。

ノテには所々に家があり、それらはギリヤーク人（アムール河下流と樺太に住むツングースの一つ）の村落で、近くにオロッコ人も住んでいた。

ノテはフランス人のラ・ペルーズと、それに続くイギリス人のプロートン一行も達することが出来なかった所である。松田一行は11日前にノテに到着して休養し、一昨日から再び北に向い、ナッコ岬をまわった所のラッカまで行った。しかし海が浅くて進むことができず、引き返して来たのであった。

林蔵は松田一行の行ったラッカまで行きたいと願い出て、松田と共に2隻のチップに乗ってナッコ岬をまわり、ラッカに辿り着いた。松田はナッコ岬で林蔵を待っているから、これからは林蔵一人で行くようにと申し渡した。

林蔵は少しでも対岸の東韃靼に近づいてみたいと思った。幸いラッカ川の河口から流れている水が沖に向かっていたので、水の筋に舟を入れさせた。しかし舟は海草に遮られてしまった。

彼は清国領の東韃靼の陸影を見つめた。岬がはるかに見え、その近くにアムール河の河口らしい光景が微かに望まれた。北に視線を向けると樺太と東韃靼との間の海は

さらに広がっていて、地つづきになっている様子はなさそうであった。

震え脅えたアイヌは引き返そうと催促し、彼は舟を戻すように命じた。即ち林蔵はこれ以上北へ進むことは不可能で、一応自分の役目は果たしたと思ったのである。

松田と林蔵の二人は無事に調査を終えたことを確認し合い、出発地の白主に引き返すことになった。6月26日、松田と林蔵はノテトを離れて白主に戻り、総距離161里5丁半(約633km)の旅を終えたのである。

然し乍ら林蔵はラッカ沖の海が開けていても、その奥が行きどまりになり、半島になっているかも知れないという不安があった。

白主に戻った林蔵は松田とともに宗谷海峡を渡り、蝦夷地最北端の宗谷に帰って奉行所に報告した。その後林蔵は樺太調査による地図を作成し、再度の樺太奥地への探検を願い出た。

1808年(文化5)7月13日、奉行の許可を得た林蔵は函合船に便乗して再び宗谷を発し、その日のうちに白主に到着した。

16日に舟に便乗して18日にトンナイに着き、6人のアイヌを雇い入れるのに一週間を要した。それは東韃靼から樺太にやってくる山丹人の横暴を恐れるほか、寒気がきびしく食糧や水が乏しいから応募しないのであった。

8月3日、舟はトンナイを出発して海岸沿いを北上した。使用する舟はチップ(小舟)より大きいポロチップで、長さ7間(12、7m)、幅1間(1、8m)の舟は漕ぎ手は6人である。

クシュンナイ(久春内)を過ぎ、海岸で野宿を重ねながら12日後にリョナイ(千緒)に到着。10日後の8月25日に海も穏やかになったからリョナイを出発し、9月3日にトッシュカウ着いた。

この地から北はアイヌは住まず、ギリヤーク人やオロッコ人の居住地帯で山丹人もときどき姿を現わし、そのうえ降雪に見舞われる寒気が予想以上に厳しいため、同行した6人のアイヌは南に帰りたいと動かなくなった。

目的地は遠く、これ以上の北進は無謀であると判断した林蔵は、アイヌの居住区に戻って再起を図るべきだと引返し、9月14日にリョナイに戻った。

引返しはしたが、林蔵は樺太奥地の調査を断念する気にはなれなかった。奉行に申し出て出発したかぎり、どのような危険をおかしても樺太が半島であるか島かを、自分の目で確実に見定めたかったのである。

しかし、いたずらにこの地に留まるよりも、思い切って第一歩からやり直す方が賢明で、時期が悪かったのだとトンナイに引き返し、トンナイで越冬して来春、再び北上しようと決意した。

リョナイの酋長に林蔵は舟や道具類をあずけ、10月24日にリョナイを出発して夜は雪中に穴を掘り、時折アイヌの家を見つけて宿を乞い、悪戦苦闘して氷と雪の連なる54里の道を踏破し、1ヶ月以上もかかり奇蹟的に11月26日、トンナイに辿り着いた。

文化6年(1809)が明けた。林蔵の凍傷も快癒の方向に向い北上する準備に着手したが、問題は同行するアイヌを雇い入れることであった。リョナイから引き返したアイヌを一人づつ訪れて熱心に説き、漸く同行を承諾させた。

林蔵は正月29日、彼らに食糧その他を背負わせてトンナイを出発し、凍結した海

上を北に向かって進んだ。一列になって杖をつきながら歩き、夕刻になると陸岸に上って雪洞をつくり、眠りをとる毎日である。

トンナイを出発してから5日目には、早くも44里(173km)北方のウシヨロに着いた。すると同行のアイヌ6人のうちの5人がトンナイに戻ると言いだした。困った林蔵はウシヨロの酋長を説き伏せて、代わりのアイヌ人5人をこの地で雇い入れることに成功した。

準備がととのい2隻のチップに乗ってウシヨロを出発し、翌日の夕刻には舟を預けておいたリヨナイに着いた。リヨナイの酋長は喜んで歓待し、預けてあったポロチップ(チップより大きい舟)と道具類を海岸まで降ろしてくれた。

翌々日、林蔵は彼らに別れを告げて舟を北に進ませた。風向きのよい日には帆を張り、帆走が不可能な時はアイヌたちが櫂を操った。

野宿をかさねて4月9日、リヨナイから約65里(255km)北のノテトに辿り着くことができた。ノテトは前回の調査の折りに松田と巡り合うことができた地で、そこにはギリヤーク人が60人とアイヌの男女2人が住んでいた。

林蔵はそのまま北に向かおうとしたが、付近では未だ海水が氷におおわれて舟を出すことができず、村に留まって氷のとけるのを待った。

ノテトのギリヤークの酋長は林蔵に好意をよせ、アイヌ語を話せるギリヤーク人の道案内兼通訳を世話してくれた。そして林蔵が乗ってきたアイヌの舟は北の海では碎けてしまい、酋長の持っていた東韃靼大陸の山丹人が航海に使う山丹舟を、一隻提供してくれたのである。

酋長から十分体力をつけるために逗留を奨められていると、氷に閉ざされていたノテトの海に漸く解氷期が訪れた。流水は強風の吹く日には海岸を離れるが、沖に去ったかと思うと海岸線に押し寄せてくる。

1ヶ月近くたって準備も整い5月8日にノテトを出発した。舟は北に進みラツカに着いた。そこは前年の探査で辿り着いた最北端の地である。前年は干潮時であったために沖まで干潟であったが、今日は潮が満ちて無事にラツカを通り過ぎ、北に進むことができた。

林蔵は胸をおどらせて海岸線を見つめ、羅針で方向をはかりながら野帳に絵図を書きとめた。海は次第に狭くなり、対岸の大陸の小さな半島が近くに見えてきた。

風向はよく舟は帆に風をはらんで進んだ。海が少しずつひらけ、大陸を流れる大きな川の河口も見えてきた。それはアムール河の河口に違いなかった。

その夜は海岸で野宿し、翌日の夕刻近くにユクタマーという地に着いた。そこには数戸のギリヤーク人の家が点在していた。ノテトから25里(98km)の位置で、アムール河の河口を正面から眺めることが出来たのである。

樺太が島であることを確かめるには、その最北端を見極めなければならない。北の海はひらけて樺太が大陸と地つづきの半島ではなく、明らかに島にちがいないと思われたが、それを実際に自分の目で確かめたかった。

林蔵はその地でギリヤーク人をさらに一名案内人として雇い入れ、心細くなって脅えているアイヌを励ましながら出発した。舟は北へと進むと右手の陸岸は樺太の最北端に属す地であった。

その日の夕刻、林蔵はナニオーという地に着いた。ギリヤーク人の家が数戸あり、

ギリヤーク人通訳を通じて「このナニオーの北はどのような地勢になっているか」と尋ねた。「荒海だ」という答えが返ってきた。「陸地はないのか」と尋ねると「ない」と答えた。

林蔵は樺太が半島だという説は、確実に誤りであることを確かめるためと思い、「この地の北方で東韃靼大陸と地つづきになっていないだろうか？」とたずねると、「地つづきになっておらず、陸地の果てからは広い海だ」と答えた。

彼はノテトを発ってナニオーまでの27里(110km)に及ぶ海の状態を思い起こした。ノテトを発って暫くの間は潮の流れが南下し、それに逆らうように舟を進めたが、アムール河の河口の沖を過ぎると潮流は北に流れるようになり、舟は流れに乗って進んだ。

アムール河の流れ出た水は二分され、一つは南へ、他は北へと流れている。海流が北へ向かっていることは、北方が半島などで遮られておらず、広い海であるという証拠であった。

彼は潮流から推測して樺太が島であると断定した。役目は終わったが更に一步進めて、樺太の北端を回って東海岸を南下したいとナニオーのギリヤーク人に尋ねた。

彼らは「海は絶えず怒り、波が逆巻いている。舟を出せばたちどころに覆り、砕けて散ってしまう」と脅えるように答えた。

林蔵は小高い丘に登って北方の海を眺めた。広大な海が広がり、ギリヤーク人の言う通り樺太の北端に立っている実感を感じた。海は白波が一面に立って怒濤が荒れ狂っていた。たとえ山丹舟でも荒海を乗り切ることとは不可能だと判断し、失望しながら丘を下りた。

林蔵は陸地を横切って東海岸に出たいと、ナニオーのギリヤーク人に意見を問うた。彼等は首をふり「行き着けると思っていない」と答えた。陸地に行く途中、どんな獣に襲われるかも知れず、山も谷もある陸地の横断は不可能と判断しなければならなかった。

林蔵はナニオーから引き返すことを決意した。ナニオーは樺太の最北端に近い地で、その地に立った彼は樺太が島であることを確認できたことに満足した。

風の日を待ち、ナニオーに着いてから5日後の5月17日に舟を海に押出し、翌日ノテトに帰り着いた。案内人のギリヤーク人と別れ、酋長に経過を報告して山丹舟を貸してくれた御礼を述べた。

林蔵は樺太が島であることを確認し、幕府から命じられた役目は果たしたが、樺太が何の国の影響を強く受けているかを知りたかったのである。

樺太の南部にはアイヌが住み、日本は会所を設けてほぼ支配している形になっている。問題は北部で清国の強い影響下にあるが、領土までには至っていないようだ。又ロシアの影響が及んでいる形跡は無い。林蔵は確かな事情をノテトに留まって確かめたかった。

林蔵は酋長に「樺太について更に知りたいから、この地に留まりたい」と申し出て、承諾を得た。早く南に帰りたいがっている同行のアイヌは、林蔵と共に残ってくれる一人を除いて帰すことにした。

酋長の家裏にある物置小屋に住むことになった林蔵は、アイヌを通じてギリヤーク語を、酋長からは樺太の様々な情報を学び、清国、ロシアに就いての研究にも励んだ。

林蔵は樺太の地名が唐人（中国人）がなまったものらしいことを知り、酋長の話から樺太北部は清国の半ば領土に近いことを確かめることができた。

東韃靼にはデレンという地があり、そこに清国の出張役所が設けられ、ノテの酋長も村の代表として、貢物をささげる習慣があることを知った。

林蔵は東韃靼について執拗に質問した。その地には山丹人以外にギリヤーク人、オロコ人などの多くの種族が混住し、彼等はすべて清国の支配下にあるという。清国の勢力は海を隔てた樺太北部にも及び、村々では定期的にデレンに入貢していた。

酋長は「ロシア人は樺太に来ていない。だから清国とロシアの国境は樺太には無い」両国の国境を知るためには、東韃靼に入って確かめるしか方法がない、と述べた。

幕府はキリスト教の国内に広まるのを恐れて鎖国令を出し、日本人の海外渡航を固く禁止していた時代である。東韃靼の地に入ることは役目の範囲を逸脱し、国法を犯す違反行為になる。

しかし林蔵の東韃靼へ入りたい願望は募るばかりであった。樺太調査を完全なものにするには東韃靼におもむき、その実情を把握する必要がある。特例として許して貰えるのではないかと考えた。

ノテの酋長に、「貢物を東韃靼に持って行く折りには、その従者として随行させてほしい」と林蔵は願い出た。しかし顔の容貌の違う日本人を怪しみ、必ず殺されるからと拒否された。

林蔵は死は覚悟している身で、殺されても悔いはないと再三にわたって懇願した。漸く聞き入れられてから彼は、今迄の樺太調査の原図の整理をなし、樺太北部と大陸とは海を隔てて離れていることを書きとめた。そして若し彼が死んだ時には白主の御会所に届けてくれるよう、最後まで同行してくれたアイヌに手渡した。

6月26日、酋長や林蔵ら8人が乗った山丹舟は岸を離れ、天候に左右されながら7月3日にムシホの地に着いた。そこから山や谷を越え小川を下り、川岸に仮小屋をつくって野宿を繰り返した。

7月7日、アムール河に接したキチー部落に着いた。ここは20戸ほどの山丹人の村で、見られない容貌をした林蔵は殺されそうな暴力や詰問を受けた。彼は決意していた通りに耐え抜き、隠忍に隠忍していた。

漸く7月11日にデレンに到着した。デレンは清国の役人5、6人が夏の2ヶ月ほど出張してきて貢物を受け取り、秋になると帰っていく交易の地であった。

酋長は役人に林蔵を日本人だと伝え、役人は何の用でこの地に来たのかと尋問した。林蔵は舟が難破したと答えようと思ったが、殺されようと事実を口にしようと思ひ直した。

「ロシアの軍艦が日本の領地にきて乱暴を働いている。樺太がロシアに奪われるかと思い、樺太奥地を調査したがその様子はない。それならば東韃靼の地がロシアの領土となっているのかと、気づかってやって来た。しかし清国の支配下にあるので安心してゐる」、と林蔵は申し述べた。

林蔵が漢字を知っていることに役人は好意を抱き、酒肴までもすすめてくれるようになった。そして酋長が貢物の黒の貂の皮を捧げる時にも同行し、清国の出張役所が何のような意味を持っているかを知った。

アムール河（黒竜江）下流地域に中国の勢力が及んだのは、元の時代からであった

という。その地域に住む多くの種族を総称して「山丹人」（または山韃人）と呼ぶが、元は遠征軍を派遣してこれらの種族と激しい戦闘を繰返し、遂に圧伏させたのである。樺太北部にも兵を渡海させて支配下においた。

明の時代に入るとその勢力は衰え、約200年間アムール河流域は、どこの国の支配にも置かれず放置される形になった。

明について清国が興ると、大軍を発してアムール河下流地域に進出した。遠征軍は各種族を降伏させてその地を完全に支配した。

そのころ、ロシアはアムール河方面の領有をくわだて清国と激突した。両国は大兵力を注いで攻防を繰り返して多数の兵士が死んだが、清国軍が優勢でロシア軍は敗退した。

その後、各地で衝突が見られたが、1689年、両国間で結ばれた協定によってアムール河流域を清国の領土と定め、ロシアはこの地域から完全に手を引いた。林蔵がデレンにおもむいた120年前のことである。

清国は海をへだてた樺太北部にも関心をしめし、軍船を派遣してギリヤーク人、オロッコ人、アイヌたちを従属させた。そして村落の酋長に氏族長、郷長の役人名を与え、清国への忠誠を誓わせた。

清国はアムール河流域と樺太北部の各種族に貢物を差し出すことを命じ、種族の者たちはそれに従って貢物を贈る習わしとなった。その貢物を受け取るのがデレンの役所である。

林蔵がロシアと清国の国境は何处かと尋ねると、役人は「国境などある筈がない。ロシアは清国の属国だ」と言った。彼等は大国民だという自負心が極めて強く、態度も鷹揚としていたと記している。

林蔵がデレンの地勢を書き留めると酋長らは交易を終え、デレンに着いた6日後の7月17日朝、山丹舟に獣皮と交換した多くの日用品を積みこみ、アムール河を下り始めた。河幅は4里（16km）もあり舟は濁流の上を滑った。

一行は連日、日が西に傾くと河岸で野宿し、日が昇ると河を下った。幸いに林蔵の希望を入れて帰路は河口から海に出ることになった。

8月2日、河口が近くなって海が見え出し、激浪が河に押し寄せ、舟は上下に激しく揺れ、河口の寂しいギリヤークの地に着いた。

林蔵は小高い地に立って海を眺めた。アムール河から出た水は南の方に3割、北へ7割の割合で注いでいるようであった。視線を伸ばすと樺太の北端が見え、その後方に果てしなく広がる北の海が開けていた。

林蔵はあらためて樺太が離島であり、東韃靼とは海峡をへだてて位置していることを確認した。西欧の地理学者たちは、世界でただ一つの謎の地である樺太を半島だと断定していたが、彼の探検は定説を覆す世界地理学界の大発見であった。

8月3日、舟はアムールの河口を離れて海岸沿いに南に進むと、遙か沖合に樺太の陸影が見えた。8月6日に第1回の調査で松田と共に辿り着いたラッカに着き、翌7日、出発したノテトに無事に到着し、林蔵の樺太見分の旅は終わったのである。

彼は満ち足りた気分であった。世界地図の上で唯一つ不明であった樺太北部の地理が、自分の手で完全に解き明かすことが出来たことに喜びを感じた。清国側の唱える樺太と東韃靼との間にサハリンという島がある説も、根拠のない説だと判明した。

幕府が林蔵に期待したのは、漠然とその存在が知られているアムール河流域の東韃靼と樺太に、ロシアがどの程度進出しているかであった。アムール河流域は完全に清国領で、樺太北部にはロシアの影響は全くみられず、清国の支配にあることが明かにされた。（南樺太は日本の支配下）

林蔵の得た知識は地理学上のみならず、幕府の北方経営に多くの利益を与えたことは確実である。

ノテトに帰り着いた3日後の8月11日に南に向い、トンナイを経て9月15日に白主に到着した。樺太再見分に白主を出発したのは前年の7月17日で、1年2ヶ月ぶりに白主に帰ったのである。

9月28日に白主を離れた林蔵は宗谷に渡り、11月27日に松前の港に着いて奉行所に赴き、報告したのであった。

間宮林蔵の正式な探検記の題名は「東韃靼地方紀行」で、幕府は樺太を「北蝦夷」と改称した。

当時、長崎にいた医官「シーボルト」により、間宮海峡（最狭部は7、3km）の名が世界に紹介されたのである。今まで誰も成し遂げられなかった破天荒の探検紀行は、「不朽の功」と言わなければならない、日本の誇りである。

〔以上の文中の韃靼について補足説明を加えておく〕

北方（現在の蒙古地方）の「エビス」の部落の名でもあり、又、「タタール」

（塔塔児）部族の名でもある。元代は「山丹人」と呼んでいた。

タタールとは中国史によると、唐代～元代始め主に東蒙古にいた蒙古人系部族で、モンゴル部はその支配下にあり、後にこれを倒し、更にモンゴル帝国を建設した。

宋代ではモンゴル部を東韃靼、明代では元朝系モンゴルを韃靼と蔑称した。

西欧では全蒙古人を、更に北方アジア民族をタタールと総称した。

戦後、ソ連は間宮海峡をタタール海峡と改名している。

中国史による極東（含樺太）の歴史的 経過の概要

我々日本人は西欧諸国の東洋侵略の歴史には視野を開いているが、ロシア・ソ連の東洋侵略の歴史には無知であり、中国から見た極東の歴史を考察しなければならない。

1578年から80年にかけて、極東各地にいた韃靼人や蒙古人の内紛によって、その勢力が衰えたのに乗じ、コザックが東方への遠征を企てた。

コザック（カザックともいう）はキルギス（中央アジア）を本拠とするトルコ系の遊牧民で、回教を信奉し、16世紀にはシベリアに侵入した。当時、韃靼王としてシベリアに勢力のあったクチュム汗の軍隊は装備が悪く、コザックの進入を許してしまった。

1649年、コザックの隊長ハバロフスクは黒竜江とウスリー江の合流点まで侵入し、1652年に現在のハバロフスクを建設した。これがハバロフスクの起原である。

ロシアではハバロフスクを探検家として称賛しているが、実際はコザックを利用した極東侵略の第一歩である。

当時、ハバロフスクには中国人や先住民が住み着き、自国領だと信じていた清国は侵略に驚き、ロシア政府に抗議した。

その結果、1689年、バイカル湖付近のネルチンスク（漢名は尼布楚）で「ネルチンスク条約」を結んだ。

右図のようにネルチンスク条約は、黒竜江の北にある山脈を清国とロシアとの国境と定めたものである。しかし清国政府はその地方の地理に無知であり、境界線は非常に曖昧なものであった。

後に实地踏査したところ黒竜江（アムール河）の北には山脈はなく、結局、黒竜江の南にある小興安嶺が、その山脈に該当するとロシアが一方的に主張した。ここにロシアの老獪さが窺える。（上の地図参照）

後日の1858年11月、黒竜江河畔のアイグン（漢名は璦琿、後日の黒河）で「アイグン条約」を締結した。この条約は黒竜江以北をロシア領とし、ウスリー江（上図参照、ハバロフスクから南に流れる河で現在の中・露の国境線）以東を、沿海州（上図参照）を含めて共有地としたものである。

私は戦中には満州及び支那本部に3年半に亘って転戦、戦後も15回に及び中国を訪問し、各地の歴史博物館を見学する機会に恵まれた。そこに展示されていた清朝時代の地図には、沿海州や樺太は明瞭に清国領となっていた。

1856年10月、イギリスやフランスの中国侵略に抗議して、清国の官憲が英国旗をかかげた帆船「アロー号」の中国人船員を逮捕した。するとイギリスは国旗が侮辱されたと直ちに出兵した。これが有名なアロー号事件である。

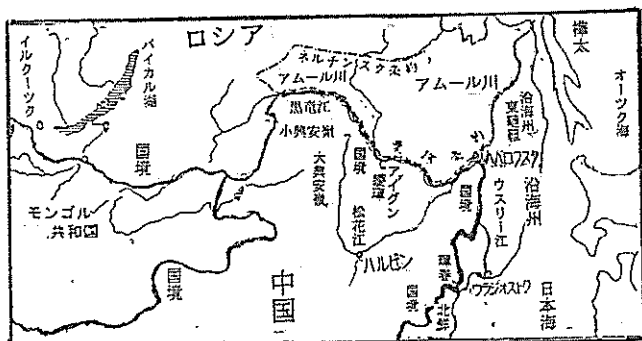
一方、南の広西省では仏人宣教師が殺害されたのが発端で武力衝突が起こり、1860年に英仏軍が北京を占領すると、清国は北京条約を締結して和議が成立した。上記の1857年～60年に英仏が行った対清戦争を「アロー戦争」と呼んでいる。

清国が英仏との戦争に苦しんでいる時に乗じて調停の労をとり、和議を成立させたのがロシアであった。ロシアは調停の代償としてウスリー江以東の地域を割譲させ、共有地であった同地域を完全にロシア領とさせた。これが「璦琿条約」である。

（璦琿は北朝鮮との国境線）

沿海州を含めた膨大なシベリアをロシア領とした経緯は上記の通りである。アイグン条約や北京条約によって中国領をロシア領としたのは、それほど遠いことではない。今から130数年前に過ぎないのである。

東部シベリアの地域は昔から「肅真」、あるいは「渤海」、または「契丹」と呼ばれ、金、元、清の時代には明瞭に中国領であった。我が国の北方4島の不法占領を考える時、中国の「二の舞」を演じないように、ロシアの侵略の歴史を吟味すべきである。



ロシアの（株）インツーリストによる 樺太の概要

ロシアの観光業社であるインツーリスト発行のパンフレットには、極く簡単な樺太の歴史しか掲載されていない。それだけ確固としたものがないようで、曖昧模糊に書かれている。以下、書き写しておく。

サハリン州（千島を含む59の島嶼からなる）の中で最大の島サハリン（樺太）は、面積は78000km²、長さは南北約948km、歴史は地理的位置に密接な関係をもっている。

この島には大昔からアイヌ、オロチ（オロッコのことだろう）、ニブヒ（ギリヤークのこと）といった少数民族が住んでいたが、1640年にコザック（12頁参照）たちがアムール河の河口近くに一つの島があることを、ロシア政府に報告した。

その後、間もなくこの事実は公に確認され、多くの探検家がこの土地に派遣された結果、この島はロシア帝国に所属することになった。（?）

サハリン州の島々の地名の中、250ほどは探検に携わった人々の名前とか、探検と開発にともなう歴史的な出来事にちなんだものである。

19世紀になるとサハリン島は悪評を取るようになった。その理由は帝政政府が島を流刑囚の監獄にしまい、全ロシアから囚人たちがこの島に送られて来たからである。

1904年～1905年の日露戦争の結果、サハリン島の南半分と幾つかの島は日本の主権下に移り、樺太と呼ばれるようになった。

1945年に全樺太島は改めてロシアの領地になり、1905～1945年（日本領時代）までの生活を物語る史跡は、今でも残されている。樺太県の知事官舎は現在のユジノサハリンスク（豊原）の市立博物館になっている。（?）

以上ように歴史になっていないような歴史が書かれているが、参考になるものは全く無いと言わなければならない。

歴史の真実と嘘を考えてみると、歴史は必ずしも本当のことが語られているとは限らないようである。時代が変遷すれば人の見方も変わり、価値観の基準も変わるからであろうか。

歴史の内容もその歴史が語られる時代によって変わる。だから歴史を読む人は沢山の歴史資料の中から、どれが本当で、どれが嘘かを見極めなければならない。

歴史の基本となるのは記憶であり、追憶である。たとえ語る人達はその時代に生きて起こった出来事を直接みたり、聞いたとしても、本当は見人によって異なって記憶されているから、必ずしも同じというわけでもない。

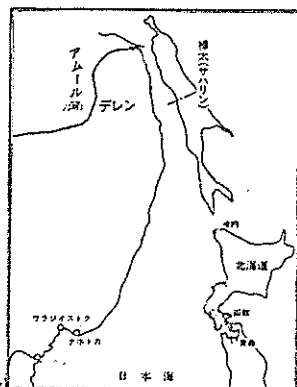
人間の記憶や追憶は極めて怪しいものもあり、信用できるものと出来ないものを、我々は判断しなければならない。まして老獪な侵略国の歴史ほど、真相の究明が困難なように思えてならない。

日本からみた樺太の歴史の概要

日本領時代の樺太の名は、「^{ウラジ}唐人」（支那人）がなまった言葉だと言われ、古い時代では「唐太」とも書いていた。これは樺太の北部が清国の影響が強かったからであろう。

サハリンという名称の由来は判明しないが、サハリンの別名を「黒い河の断崖」とか、「宝の島」というから、きびしい自然や豊富な資源にちなんだ呼び名のように思われる。

この島の本来の住民（先住民）は、北部ではニブヒ（ギリヤーク）族とウイルタ（オロッコ）族、南部ではアイヌ族であった。



- ①アイヌは「人」の意で、古くは日本本土の東半に分布し、蝦夷（エゾ、エミシ、エビス）の別称と言われているが異説も多い。現在は北海道、千島、樺太アイヌの三つに区分される。
- ②ギリヤークはシベリア東部、黒竜江下流地域、樺太に住む人種で、狩猟と漁撈を生業とし、1926年当時で約4000人であった。
- ③オロッコは樺太中部以北に住み、狩猟と漁撈を生業とし、1940年代で約450人であった。

樺太は早くから大陸との関係が深く、山丹人（沿海州の中国人、12頁参照）が北樺太に來島して中国の産物をもたらしていたが、やがてこの島の住民たち自身も、アムール河下流の清国の仮政府に朝貢交易に赴くようになった。

18世紀中葉以降はアイヌの有力者たちも仮政府から、ハラタ（部族長）、カーシタ（郷長）の称号を与えられていたことが知られている。

日本の歴史では1458年、酋長の銅雀台が瓦硯を蠣崎信広（蝦夷松前藩士）に献上したことが歴史に初見される。

1635年には松前藩から最初の日本人が樺太に上陸し、1644年と1700年には、この島を自藩の領域とみなした御国絵図と郷帳を幕府に提出している。

樺太南部に常設的な漁場を開いたのは18世紀末で、それ以来、漁場の労働力として雇用されたアイヌたちは、日本人の経済的な従属となっていった。

北辺防備問題が騒がしくなると、幕府も1785年、山口鉄五郎らを蝦夷地（北海道）に派遣した。その中の西蝦夷地担当の庵原弥六が同年、幕吏として初めて樺太に足跡を印した。

それ以降、幕府は引き続き最上徳内（1792）、中村小市郎と高橋次太夫（1801）を派遣して、この地の踏査を行わせ、1807年以降は蝦夷地とともに、樺太南部をも幕府の直接支配の下においた。

その頃から松前藩士や幕吏たちによる樺太の調査記録がまとめられ、かなり正確な地図も作成されている。間宮林蔵が中国（清国）の仮政府のデレンを訪れたのも1809年のことである。（前記の通り）

一方ロシア人も17世紀中葉のアムール河下流地域遠征の際に、樺太にも到来したことがあるようだ。しかし間もなく清国によってこの地方から排除され、1689年

のネルチンスク条約以降は中国貿易の中止を恐れて、ロシアはアムール河口や樺太への接近を避けていた。

1806～07年、露米会社の船が樺太南端の日本漁場を襲撃する事件が起こったが、ロシアが樺太の占領に着手したのは19世紀の中葉のことである。

1853年（嘉永6）ロシア政府は幕府に樺太及び千島の国境画定を要望し、その結果、1855年2月7日（安政1年12月21日）の日露和親条約では、樺太は両国の間で「界を分たず」と規定された。

幕府は1821年以来、松前藩領に復していたこの島を、55年に再び直轄して漁場を北緯49°付近まで拡大し、またロシア側は少数の兵士を久春内（5頁地図参照）地峡に定住させるなど、日露両国の樺太進出が積極化した。

特に1867年（慶応3）の樺太島仮規則以降は、ロシアは1ヶ大隊の兵力を派遣し、日本側も多数の農工民を送ったので、南樺太全域で日露両国民の雑居が行われ、紛争が絶えなかった。

その後、1875年の樺太千島交換条約でロシアは樺太全島を獲得し、行政庁を置いて1906まで流刑植民地としていた。囚人労働による石炭採掘を除けば産業の発展は全くみられなかった。

1905年、日露戦争の結果として北緯50°以南が日本に割譲され、日本は豊原に樺太庁をおいて南樺太の開発に着手した。人口が希薄で不毛の地に鉄道や道路を建設し、漁業、林業、製紙、パルプ工業、石炭鉱業の振興に貢献した。領有当初の明治39年の人口は12、361人である。

移民としては北海道、東北、北陸から行われ、1941年末の人口は約40万を超えていた。このころから強制徴用による朝鮮半島からの労働者が急増し、終戦時の朝鮮人の人口は約4万と推定されている。

この間、ロシア革命の1920年、日本は尼港（アムール河口の町）事件を理由に北樺太を保障占領したのち、1925年の日ソ基本条約によって、この地方の石油、石炭の採掘に対する45年間の利権を獲得した。

〔尼港事件とは、日本がシベリア出兵中の1920年、パルチザンとの衝突により、尼港の700名余の日本軍守備隊及び居留民が殺害された事件で、日本は事件解決まで北樺太を占領した〕

1945年、ソ連の対日参戦で南樺太は再びソ連に併合され、主要都市と産業は殆ど日本時代のまま引き継がれている。人口の過半数は全面積の5分の1にも満たない南端地方に居住し、83%が都市部に集中している。

人口の大部分は第2次大戦後にソ連本土から移住したもので、民族の構成も多様である。そのうち主なものはロシア人約80%、ウクライナ人約6%、朝鮮人約6%、白ロシア人約2%、タタール人約2%、ギリヤーク人、オロッコ人などの先住民は約3000人と言われている。

かつて樺太の主要民族であったアイヌ系住民（終戦時には約2000人と推定）は、戦後どれほどが北海道に移り、また現地に留まったかは不明である。

以上、間宮林蔵の探検記の概要、中国史からみた歴史の概要、ロシアのインツーストの記事、日本からみた歴史の概要を記述した。次いで「戦後、朝鮮人はなぜ残されたか」、「終戦時の日本軍の状況」の二点の概要を記しておく。

戦後、樺太の朝鮮人はなぜ残されたか

ソ連・ロシアは第2次大戦で2000万人以上の犠牲者を出し、国の経済は疲弊しきっていた。樺太の捕虜や抑留民間人は満州の日本軍と同様に、戦後の再建のための貴重な労働力として、一人でも多く確保しておきたいというのが、終戦時のソ連の状況であった。

終戦後の樺太におけるソ連軍当局の政策は、このことを如実に示している。

ソ連軍は1945年8月24日に豊原（現ユジノサハリンスク）に進駐して軍政を開始した。8月27日の最高指揮官の命令以来、あらゆる命令や布告で戦場への復帰と生産の向上、とくに出炭の増加を命じている。ソ連全体が労働力不足に喘いでいる中で、樺太の労働力事情が好転する筈もなかったのである。

ソ連本土からやってきた労働者や農民漁民は、十分な技術を持たない者や勤労意欲の低い者が多く、日本人や朝鮮人の労働者、農民に比べて生産性が低かった。そこでソ連当局は日本人や朝鮮人の労務、徴用まで実施して、食糧、炭坑、漁業の各分野で生産の確保に努力したのであった。

サハリンからの引き揚げは1949年7月まで行われ、約29万3000人の日本人が帰還したが、朝鮮人は引き揚げの対象にされなかった。

なぜ朝鮮人だけがサハリンに取り残されたのであろうか。当時から半世紀近い歳月が流れた今日、それに対する完全な解答を出すことは困難である。

終戦時の海外の日本軍や民間人は約800万人と言われ、その大量の引き揚げは連合国の責任の下に遂行された。連合国の指令は超憲法的な効力をもって日本政府を拘束し、日本政府はそれに関与することは出来なかった。

即ち、樺太からの引き揚げはGHQとソ連との協定に従って実施されたのである。

当時の日本は連合国軍の占領下であり、ソ連と公式に接触する立場になかった。その上、日本の敗戦とともに朝鮮人は日本国籍を離れることになった。

然し乍ら米、英、中国などが引き揚げに関与した南方や中国大陆では、日本政府にかかわりなく朝鮮人や台湾人の引き揚げが行われ、日本経由で放歸に送還された。

戦後の厳しい米ソ対立の中でサハリンを統治したソ連は、朝鮮半島における唯一の合法政権として北朝鮮（朝鮮民主主義人民共和国）を承認し、大韓民国の存在を認めなかった。そしてサハリン在住の朝鮮人の大部分は南朝鮮出身者であった。

このためサハリン当局は朝鮮人の法的地位を決めるにあたり、ソ連国籍か北朝鮮国籍を取るように勧めた。北朝鮮もまた北朝鮮国籍を取らせるよう、ナホトカの総領事館を通じて猛烈に働きかけた。

こうした有形無形の圧力のために、少しずつソ連か北朝鮮の国籍をとる者が出た。しかし、そうすると韓国に帰れなくなると考えた多くの人は拒み続けた。止むを得ず、ソ連政府はこれらの者を無国籍者として扱った。

こうした無国籍者は出国はおろか、国内の移動の自由も大きな制約を受け、子供に高等教育を受けさせることも出来なかった。更に無国籍を通そうとする者には、反共国家の韓国や日本帝国主義に親しみをもち、社会主義建設への忠誠を欠く者として圧力を加えた。

北朝鮮当局もサハリン残留朝鮮人の大多数が南鮮出身であるため、朝鮮人の帰還は北朝鮮への帰還でなければならないと主張し、韓国への帰還に徹底的な反対の姿勢をとり続けた。

ソ連にとっても韓国は反ソ反共の独裁国家に過ぎず、サハリン残留の朝鮮人の韓国帰還を認めることは、韓国の存在を認めることになり、帰還問題には否定的な態度をとり続けた。

サハリン残留朝鮮人の帰還問題は、以上のように日本とソ連と韓国と北朝鮮が複雑に絡み合った問題で、根本的な解決は誰が考えても難しい問題であった。

東西冷戦期のサハリン残留朝鮮人問題は、即ちソ連と北朝鮮の問題である。日本が声を大にして叫んでも、日本が係わる問題でないと言うのが、ソ連と北朝鮮の公式の態度であった。

ソ連は1988年のソウル・オリンピックの参加以来、明らかに韓国との関係改善に動き出し、国交樹立の90年9月以前のサハリン残留朝鮮人の韓国訪問を、正式に認めた。比較的に問題が少なかった一時再会に比べ、永住帰国にはまだまだ問題を抱えているようだ。

一時帰国もかなわず、帰国できずに死亡してサハリンの地に眠る人々は、日本のことをどう思って死んで行っただろうか。日本を憎み呪っていたことを想うと慚愧に堪えない。

45年という歳月は余りにも長すぎた。韓国への帰還を望んでいた朝鮮人も生活の基盤を築き、子供や孫もできた現在、帰還という選択肢はそう簡単に選ぶことが出来ない。あくまで故郷に帰りたいという一世と、サハリンに残ると主張する二世三世との間で、争いが絶えない家庭もあるらしい。

これらの問題には抑圧的なソ連の体制、それに朝鮮半島の分断、それを囲む諸国の複雑な国際政治情勢が大きく影を落としている。

ソ連の考え方の根本は、「憤怒を抑える方法として最もよい方法は、時間を延ばすことである」というのが、私の見方である。日本の北方四島の返還問題も、政府はその術中に陥らないよう注意すべきだ。

終戦時の日本軍の状況

戦前の日本にとって樺太はソ連と国境を接した軍事上の要衝の一つで、同時に石炭、製紙などの基幹産業の盛んな土地であった。また樺太には約30万人の日本人と、炭坑や鉄道敷設に従事していた四万数千人の朝鮮人が居住していた。

これらの権益や居留民を保護するため、昭和15年に満州から凱旋した札幌歩兵第25連隊（私の出身連隊）は、樺太混成旅団の指揮下に入り、同年11月15日に樺太・上敷香に移動を完了し、国境警備の任務についた。（次頁地図参照）

大東亜戦争が酣となった昭和18年6月、札幌で編成された歩兵第125連隊が樺太に移動すると、19年4月、25連隊は国境警備の任務を解かれて主力は樺太南部に移動、国境警備は125連隊の担当となった。（次頁地図参照）

(306連隊の基幹要員は25連隊と125連隊から転出し、樺太島内で隊員数千名が招集された)

当時の樺太は未だ戦争の惨禍を受けておらず、比較的食糧にも恵まれ、日本国内では最も平和な郷であった。

日本政府から連合国との和平の仲介を依頼されたソ連が、これを知って宣戦を布告したことは、許し難い行為と言わなければならない。

国境警備の125連隊の正面では8月9日、少数の敵が越境して我が国境警察隊と交戦した。8月10日、我が陣地に砲撃を開始したが大部隊の進攻はなく、少部隊の夜襲は撃退した。

(私と同期の木下義一君は大隊長として奮戦し、16日の古屯付近の戦闘で戦死)

一方、豊原を中心に真縫～久春内（上図参照）以南を警備していた25連隊が、ソ連軍の侵攻を迎えた時、ソ連軍の主攻撃正面は真岡付近と判断して、配備変更のために移動中であった。連隊本部も小沼から逢坂に移動したのは8月12日である。

ソ連軍は早くも8月9日から真岡に空襲を開始したが、広地域に分散配置していた各部隊の移動は遅れ、配備について水際陣地の構築に着手しないうちに、8月15日の終戦日を迎えた。



8月15日正午、ラジオ放送による天皇陛下の御聖断が下った。各軍は別命があるまで現任務を遂行せよ。但し積極的な行動を中止して軍紀を守り、治安の動揺防止に努めよ、という主旨の命令が下達された。

続いて全軍に対する戦闘行動の停止に関する大命が下った。しかし停戦成立に至る間、敵の来攻に当っては止むを得ない自衛のための戦闘行動は妨げない。諸隊は宿営、給養等の便を考えて適宜の地域に集結し、後の行動を準備せよとの命令であった。

真岡地区の25連隊では国境方面(125連隊)とは違い、殆どの将兵は8月15日の終戦を、ラジオ放送を聴いて知っていた。

しかし、将兵は今日まで日本が負けるとは思わず、そのような教育も受けておらず、戦争終結の報によって張り詰めていた空気が失われ、何が何だかわからない状態であった。

戦争終結にともない山沢歩兵25連隊長は師団命令に基づき、「現態勢のまま後命を待つべし」と各部隊に伝達した。翌朝、終戦に関する師団命令が下り、陣地を棄てて要地に集合、武装解除、機密書類の焼却、軍旗処理に関する指令を出し、これらを涙のうちに実行した。

真岡地区担当の25連隊第1大隊は、指揮下にあった真岡警察署などの指揮を解き、住民とのトラブルや、ソ連軍が上陸した際の不慮の戦闘惹起を避けるため、真岡市街地にあった部隊を荒貝沢(市街東方2km)に移動し、天幕露営に入った。

17、18日の両日には古年次兵の約1割の召集解除を実施した。部隊の中核であるこれらの兵員の除隊により、部隊の機能は大幅に後退し、ある中隊では人員が80名ぐらいに減少した。(定員は200名程度)

〔軍旗奉焼〕

8月17日、師団より連隊に「軍旗を奉焼せよ」との命令が下達された。翌18日、山沢歩兵第25連隊長は、逢坂部落の連隊本部のあった逢坂神社に所在部隊を集め、軍旗を奉焼したのである。

この軍旗は明治33年に親授以来、日露戦争では203高地、シベリア出兵では鉄嶺や尼港、満州事変では熱河、支那事変では徐州会戦、ノモンハンの戦闘など、数々の戦功を遺している。将兵は胸は張り裂ける思いだったと推察する。

終戦時、日本陸軍の軍旗の数は440旗で、総ての歩兵連隊は軍旗奉焼によつて長い歴史を閉じた。しかし歩兵第25連隊だけは歴史を閉じることは出来なかった。終戦から、連隊の歴史の中で最も悲惨な出来事が始まったのである。

軍旗奉焼が終わった直後の昼ごろ、「25連隊は8月20日に現在の集結地を出発し、21日午後2時までに小沼付近に集結すべし」という師団命令を受領した。

これは国境方面のソ軍の戦車群が、意外に速く南進中であることを知り、引き揚げ未完の敷香付近住民を、敵の乱入から援護するためであった。

8月19日夜、日本海軍より「ソ連軍輸送船団北上中」との連絡が入った。しかし「終戦後でもあり、恐らく平和進駐のため軍使が来るのであろう」、「まさか上陸作戦などは先ず無いだろう」、と判断した。

8月20日の真岡の朝は濃い霧であった。出漁中の漁民から「真岡港の沖合にソ連の軍艦数隻を発見」という報告があり、真岡東方台地の監視兵もまた午前5時40分、霧の中に大型軍艦3隻を発見し、さらに沖合に戦艦らしいもの7隻を確認した。

真岡正面担当の25連隊第1大隊長は、この状況を連隊長に報告し、ソ連軍は平和裡に進駐するものと判断していたが、突然不意に猛烈な艦砲射撃を開始した。真岡市街は炎上して黒煙が立ち昇り、町民に多数の死傷者が続出した。

我が軍の戦闘配置についたのは、ソ連海軍の艦砲射撃が開始されてからである。第1大隊長は残存部隊を荒貝沢及び敵と反対斜面陣地に配置し、避難民には集積してある食糧や被服を交付して、豊原方面へ誘導した。(下図参照)

〔軍使派遣〕

逢坂にあった山沢連隊長は第1大隊長に対し、直ちに従前からの指示に基づき、速やかに軍使を派遣することを命じた。

第1大隊長仲川少佐は、軍使に命じた大隊副官村田中尉以下を本部前に集め、次のように訓示した。

①諸君は樺太の兵団将兵と住民の命を双肩にない、この難局に対し平和裡に、事態を收拾しようとする使命を帯びている。

②ソ軍は諸君の承知しているとおり、なんら抵抗しない我が軍に対して一方的に艦砲射撃を加え、上陸を強行して放火、略奪を恣にしている。

③我々は刀折れ矢つきで戦闘を中止したのではない。天皇陛下の命令により戦うことなく矛をおさめ、自主的に戦闘を中止した日本陸軍の精鋭である。

どうか、日本軍人として終始立派な態度と行動をとり、この大任を無事に果たしてくれるよう切望する。

この間、大隊長の目にはギラギラと光るものが流れ、副官の命令がない限り射撃してはならない、と注意を加えた。

これに対し大隊副官村田中尉は、「只今の訓示と注意事項を守り、日本陸軍の軍使として正々堂々と、その任務を果たして参ります」と力強く答えた。

村田中尉が言葉を述べたあと、別れの水盃を交わしたが、17名の軍使(軍犬一匹)は緊張と興奮のあまり、みんな無言であった。

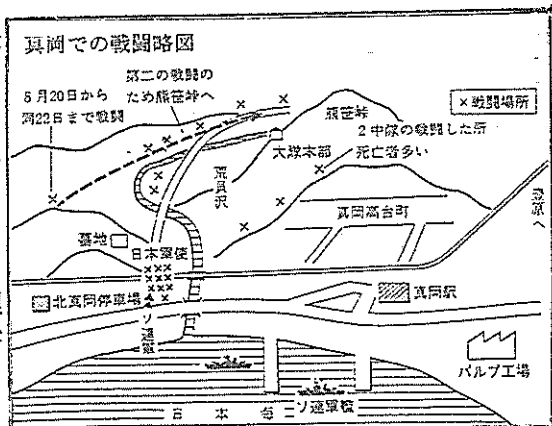
大隊長は第一線陣地の位置まで見送り、村田中尉の差しのべた手を「しっかり頼むぞ」と、固く握り締めて別れた。

先頭に敷布大の白旗をかかげた軍使は整然と隊伍を組み、霧の中に消えていった。時は午前8時やや前である。

午前9時少し過ぎ突如として静けさが破られ、自動小銃の銃声が漸続して3~4回、荒貝沢の方向から聞こえてきた。伝令から何の知らせもなく、軍犬も帰ってこない。濃霧もまだ晴れず視界は200m程度であった。

午前10時前、軍使の中の1兵が血に染まった顔をして大隊本部に帰還し、「村田中尉殿がやられました」とだけ報告し、後は高ぶった感情から声をあげて泣くばかりであった。(上図参照)

軍使一行が鉄道の踏切に差し掛かった時、突然、丘の上のソ連兵が現われ、一行に



停止を求めながら近寄ってきた。村田中尉は通訳を通じて指揮官に会見を求めたが、ソ連兵は軍使一行を取り囲み、「銃を置け、軍犬を電柱に縛れ」と要求した。一行は指図の通りの行動をしたのであった。

ソ連兵は村田中尉に対して射撃姿勢をとると、中尉は胸元の銃口を手で払い除け、通訳は懸命に通訳を続けた。突然この時、ソ連兵は村田中尉に向かって銃を発射すると同時に、自動小銃をかまえたソ連兵は一斉に一行を撃ち始めた。

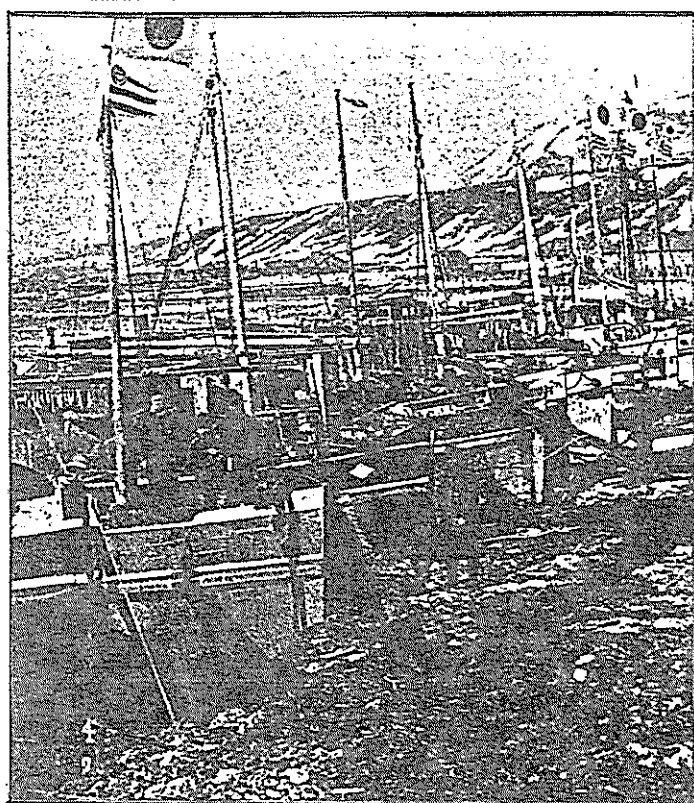
この状況を一部始終を見ていた住民がいたのである。村田中尉は負傷にもめげず立上り、乱射するソ連兵を決死の勢いで軍刀を薙ぎながら踏切まで行くと、バタッと倒れたと述べている。軍使一行17名中で生還した者は3名のみであった。

ソ連軍の艦砲射撃は真岡市街を容赦なく撃ちこみ、町民は雪崩をうって日本軍のいる荒貝沢に避難したが、ソ連軍は大兵力を上陸させ、山手に向かって破竹の勢いで進撃した。(前頁地図参照)

各地の戦闘状況や住民の苦難な行動は、訪れる各地の項で記載する。しかし日ソ不可侵条約を一片の紙切れのように打ち破り、8月15日の停戦さえも蹂躪したソ連の行為は、正気の沙汰とも思えない。

生き血をすすするような冷血非情で理不尽なソ連の行動を、我々は忘却の彼方へ消え失せさせてはならないと、戦闘状況の一部を記述したわけである。

下の写真は豊原の李世鎮氏から寄贈されたもので、タラバガニ・タラ・カレイの水揚げが盛んであった小型漁船の繋留する戦前の真岡港



7月30日

(金) 曇り～晴

稚内へ

大安の7月30日、小松空港を定刻より1時間遅れの、小雨模様の中を12時40分に千歳空港へと飛翔した。「吉凶は人によりて日によらず」、吉日とか悪日とかは一人一人の心掛けに左右されることが多く、すべての人に共通な日による吉凶はないと、台風6号の影響をうけた空を眺めていた。

「弁を以て知を飾る」と皮肉りたいような総選挙も終わり、自民・非自民の煩わしい世相を忘れて、機窓から男鹿半島的美観を見惚れていると、瞬く間に晴れ間は消えて津軽海峡は雲の下に隠れていた。

縦に長い日本列島の気象を観測するように飛ぶこと1時間20分、機は雨に濡れて緑が目にしむような中を滑走し、1年ぶりに北海道の土に足跡した。

数日前から真夏日の続いていた北陸とは打って変わって気温は14℃、日本も何と広いものかと思ひながら、快速電車に乗車して札幌駅に向かった。

駅では同火同食の刎頸の友・斉藤貞二氏夫妻の出迎えをうけ、いつまでも変わらない耐久の朋の友情に感謝しながら、喫茶店のテーブルを囲んで懇談をつづけた。

私の出身連隊である札幌歩兵第25連隊が、昭和15年に満州・チチハルから帰還し、同年樺太に移駐してからの配置図や、終戦直後の「烈風枯葉を掃う」ような無謀な戦闘を強いてきたソ連軍との戦闘経過図は、同氏から昨日速達便で送られていた。

その御礼を述べながら図を拡げ、連隊の編成表を眺め、老いを知らない精力と情熱を傾けながら、往時を回顧すること約1時間、同夫妻に見送られて16時20分発の稚内行に乗車した。

膝の痛みに耐えなければならない6時間の列車の旅は、東京～博多間の新幹線よりも長く、うんざりしながら名寄で日没を迎え、漆黒の平野を突っ走って漸く22時すぎに、曾遊の地・稚内に到着した。

潮の香りが感じられる空気を胸一杯に吸いながら、サン・ホテルに旅装を解いた。昨年訪れた利尻、礼文島が懐かしく想い出され、稚内公園に立つ真岡郵便局の「みなさん、これが最後です。さようなら、さようなら」の言葉を残し、青酸カリで集団自決した「9人の乙女の碑」が偲ばれた。

明治初期までの稚内地区の表舞台は宗谷であった。アイヌの世界であったこの土地に松前藩が交易場・宗谷場所を開設し、後に北方の要衝として幕府直轄番所が置かれるようになった。

一時は津軽、会津、秋田の藩士が越冬駐屯し、その間に最上徳内や間宮林蔵などが訪れており、昔から樺太とは密接な関係を持った地である。

明治に入りニシンの北上につれて移住者が増え、村の中心は現在の稚内港に移ったが、稚内港が最も脚光を浴びるようになったのは、樺太が日本領となった日露戦争の後である。

樺太への玄関口として大繁栄した稚内も、樺太を失った戦後は活気を無くしたが、引き揚げ者を吸収したことで逆に立ち直り、日本最北端の経済文化の中心地として再生しているようだ。

本当にすべてが万事塞翁ケ馬だと思いながら深い眠りに就いた。

7月31日

(土) 小雨

稚内～大泊 (コルサコフ)

昨夜は12時に就寝したが今朝は4時半に目覚めてしまった。今日の行程は船旅だから船中で寝ればよいと夜明けを待っていた。ひんやりした朝の空気を吸いながら、早朝の稚内の街の散策に出掛け、人気のない通りを駅に向かった。

駅の構外に行儀よく並んだ寝袋の一群が目にとまった。気温13°Cの厳しさに堪えた若者たちが一夜を明かしたのである。露営をして戦った時のあの若さが欲しいと羨みながらホテルに戻った。

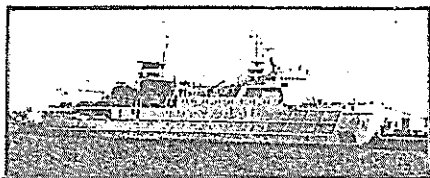
テレビの画面は6時のニュースを放映し、野に下った自民党の総裁には河野氏が選ばれていた。新旧交替期を迎えた世界の例にならない、21世紀に向かった活力ある政治には若い人の力が必要であろう。

宗谷海峡の天気予報は波浪は高く、最高気温は18°Cと報道し、樺太は雲に覆われていた。樺太の寒さを思い遣りながら早速冬物の下着を取り出し、入念に膝の治療に取り掛かった。

9時に集合場所の稚内総合文化センターに赴くと、館内には類を以て集まった100人以上の人が群をなしていた。樺太に縁故のある人ばかりであろうか、或いは格好の漁場に向かう釣りファン、珍しい渡り鳥の生息地を訪れる野鳥ファン、それとも私のように観光であろうか、と予想外の樺太人気に驚いた。

添乗員の説明が終わってパスポートを受け取り、バスに乗車して埠頭へと進んだ。

埠頭は旧稚泊航路の南側の棧橋で、そこには4、575トンの「ユーリー・トリフォノフ号」が接岸していた。(収容人員120名) (右写真)



思えば日露戦争で南樺太が日本領となり、大正12年に鉄道省(現運輸省)が稚内と樺太の大泊との間に開設した167km、約9時間の鉄道連絡船の航路である。

宗谷海峡の濃霧、結氷、流氷など、悪戦苦闘を繰り返しながら284万人もの乗客を運んだ歴史を持っている。

10年前にもなるだろうか。稚内公園の丘に立つ真岡郵便局交換手の最後の自決の詩を眺め、機会があれば何時の日か訪れてみたいと思っていた夢が現実となった。

生きているうちに樺太に行けるとは夢想だにしないだけに、感無量としか表現できない。

一行120人は数班に分かれ、班ごとに次々と狭い階段のタラップを昇った。幕末の人はロシア人を赤蝦夷と呼んでいたが、大男のロシア船員には赤ら顔が多いようだ。しかし部屋に案内するサービス・ガールは色白で背が高く、口紅をべったり塗った美人ばかりであった。

ゆったりとした4人部屋のキャビンに落ち着くと、出航は1時間延となって12時10分だとアナウンスされた。過去2回ソ連を訪れたが遅延はお国柄で、突然の計画変更も驚くことではない。

甲板にのぼると船員は私を操舵室に案内して写真撮影も許可してくれた。窓越しに延長427m、柱70本のギリシア建築を想わせる、ドーム型の北埠頭が見えていた。

その中にC55型蒸気機関車の姿も微かに映っている。

戦前はこのドームの中に線路が敷かれ、宗谷本線の樺太連絡急行列車も乗り入れていた。

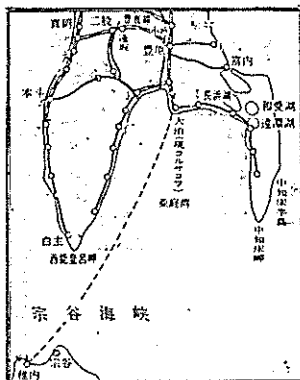


しかしこの世は「有為の奥山」で、激しく移り変わって少しも止まるものではない、と眺めていた。（上は稚内港のドーム型栈橋）

いよいよ出航となった。人生は航海だと謂れているが、私のように旅を楽しめば、人生は極楽ではないかと自慰していた。すると一方では、去る7月4日、鬼籍に入った実兄の死が思い出された。

生き身は死に身で、いつ死が訪れるか判らないからこそ、私は旅を楽しみながら自己満足しているのかも知れない。

この樺太観光を企画した（株）ジューロ札幌支店観光部長の杉山基氏は、乗船するとまもなく私の部屋を訪れ、今回の参加の御礼を述べた。運輸省に勤めている愚息が宮本社長と昵懇な関係にあるからであろう。



船はノシャップ岬を通過して一衣帯水の宗谷海峡に差し掛かると、滄海の一粟のような船は左右に揺れ始め、小さな船窓に大きくうねる波が映ってきた。

昼食のアナウンスが船内に流れた。しかし他の3人は船酔して食事どころの状態ではない。老人の私一人だけが健啖で、木の葉のように揺れる船内を、手摺りを頼ってサロンに辿り着いた。

お客の大部分は船酔しているのか食堂は閑散としていた。しかし提供された食事は不味いスープに固い黒パンだけである。これから訪れる樺太の食事が思い遣られた。

今から約200年前に樺太探検に出掛けた間宮林蔵の、精神的肉体的な労苦を偲びながら、私の樺太への好奇心が刺激されていると、眠りは神が与えてくれた特権だと眠ってしまった。

眠りが覚めても若い他の3人は未だグロッキーの状態であった。海が波を揚げず平穏であれば、蟹が鉄を突き出したように細長く、左舷に西能登呂半島、東に中知床半島が見える筈であったが、今日は見えない。（上の地図参照）

オーツク海（オーツク海）の海鳴りまでも伝わってくるような暗黒の亜庭湾（アテミ湾）を航行し、図上では稚内と指呼の間の大泊港に、6時間を経過して漸く接岸した。ロシア時間は7月30日24時であった。（時差3時間）

大泊～豊原 (ユジノサハリンスク)

唐人^{たうじん}がなまって樺太と呼ばれた、旧北蝦夷の地サハリンに初めて足跡を印した。戦前、約40万人の同胞が住んでいたと思うと、見知らぬ土地にも日本人の血の臭いがするように、懐かしい思いがする。

日本の旧植民地であった台湾や朝鮮半島には戦前、戦後を通じて何回か訪れ、敗戦後、連合国に領有されて、返還された沖縄諸島や小笠原にも脚を運んだ私にとって、樺太は唯一の残された地であった。遙かな過去の時代を旅する意義は大きいものと言えるだろう。

真っ黒く明かりの少ない大泊港の埠頭を離れ、涼風に旅心を誘われながらバスに乗り、薄汚い税関の建物の中に運ばれた。気温は北陸の3月下旬並みでロシア人はオーバーを着用し、深い濃霧は凡ての物音を奪ったような静けさであった。

小さな税関の建物に寿司詰めになった一行は、観光先別に分けられた班ごとに通関検査を受けた。円といわずドルといわず、全ての有り金をさらけ出させる検査は私も初体験であった。過去のソ連本土でも経験したことはない。それだけ日本人は信用されないのであろうか、嫌がらせだろうか。

「積悪の家には余殃あり」という言葉を、検査を受けながら思い出していた。悪事を重ねると必ず報いがあるという意味だが、ロシアは日本に対し悪事を働いたことを自覚し、その報復を恐れているように思えるのだ。

ソ連は恐ろしい国だ。日本にとって最大の軍事的脅威の国であった。そして砲弾や魚雷ばかりでなく、核廃棄物まで海洋に投棄してきた。軍備拡張だけに死金を使って国民を苦しめ、正直者が馬鹿をみる世界を作ったのは一体誰であったのか。

彼等の為政者に対しては「宋襄の仁」というか、無益な情けや詰まらない哀れみをかける積りはないが、我々に応接している人達には憐憫の情を覚えるのであった。

税関通過に2時間もかかった。ホテル列車で南サハリンを巡る我々一行30名は、(株)ジューロ社長の宮本敬氏がサハリン観光局に寄贈した、日本製の新しいバスに乗り、サハリン州の首都・ユジノサハリンスク(豊原)へと向かった。

人口4万7千の樺太第3の都市・大泊の街は灯が消えたように暗く、霧に覆われた簡易舗装の街道を北に進むと、通訳は旧拓殖銀行大泊支店の建物だと説明していたが、大樹の影で見えない。見えるものは凹凸の激しい路面だけである。

先頭の座席に座った私の横にロシア人が座っていた。杉山氏はそのロシア人に私を紹介すると、彼は握手を求めてきた。多分、息子が運輸省の高級官僚だと紹介したのであろう。

走行する街道を眺めていると、終戦直後の悲惨な街道風景が浮かんできた。ソ連軍の戦禍を避けるため、着のみ着のまま逃げてきた非難民が、大泊港にむかつて列を作って歩いたのだ。想像するだけでも怒りを感じ息が詰まる思いがする。

夏の夜気が肌にしみこむ中を走りながら深い感慨を抱き、飛行場を通過するとアパート群の灯が見え出した。バスのライトは白樺の並木を照らして突っ走り、豊原まで35kmの道程を40分もかかり、漸くユーロシア・ホテルに到着した。時刻は翌日となった8月1日の午前2時である。(現地時間)

直ちに食堂に入って遅い夕食となった。齒の悪い私には固い黒パンは処置なしだ。その上、ウォーターとウオッカーの発音を聞き間違えたサービス・ガールは、胃の悪い私にウオッカーを注ぎ、びっくり仰天させられた。英語の全く通じない大国が今頃あるだろうか。サハリンは随分と文化が遅れている。

料理は鶏肉と馬鈴薯で、馬鈴薯は北海道並みの味がした。寒い土地の馬鈴薯は何処でも美味しいのであろうか。それよりも私には、テーブルに飾った白と紫の桔梗の花の方が、印象に残っている。

食事が終わると私には個室が提供され、深夜の午前4時に床に就き、第1日目を終えたのであった。ここに（株）ジューロの好意に深く感謝を申し上げる。

豊原の概要（ユジノサハリンスク）

ロシア共和国サハリン州（樺太と千島）の州都で、人口18万の州第1の都市である。標高1000mの東樺太山脈と西樺太山脈の間に位置し、樺太南部を流れる鈴谷川流域に広がる平野の中心に在る。

ロシアの発表によると1881年（明治14）、ロシアの流刑移民集落「ウラジミロフカ」として開拓したと記されている。

1808年、我が国の間宮林蔵の樺太探検時には豊原を通過していない。彼の記録によると、樺太南部はアイヌの勢力範囲となっており、我が国の文献にはロシアによる開拓は記載されていないようだ。

1905年（明治38）、日露戦争の講和条約（ポーツマス条約）によって南樺太は日本領となり、この地を南樺太開拓の本拠地として選り、北海道の札幌を模して整然とした新都市「豊原」を建設した。平原に広がる文字通りの豊かな街であった。

1908年（明治41）、樺太庁が設置されると行政、文化の諸機関が集中し、樺太鉄道東海岸線と豊真線（豊原～真岡）の分岐点として急速に発展した。

1937年（昭和12）、樺太最初の市制都市となり、1941年（昭和16）当時の人口は3万7000人を数えた。

第2次大戦後、樺太がソ連領となってから、ユジノサハリンスクと改称された。「ユジノ」とは南の意で、「スク」は市の意である。

戦前からあった鉄道やパルプ、製紙工場のほか、機械、車両修理工場や建築、家具などのコンビナートもできている。

科学アカデミー・サハリン総合研究所や教育大学もあり、旧樺太庁博物館もそのまま郷土博物館として利用されている。

豊原駅前から南北に真っ直に伸びる共産主義通り（旧神社通り）には、州執行委員会等の中核機関が集り、東西に走るレーニン通りは商店街となっている。

細部に就いてはその都度、記述する。

8月1日

(日) 晴

朝の散策

旅の疲れから熟睡してモーニングコールにも目が覚めず、添乗員に叩き起こされた。早速、朝風呂に入って眠気を一扫し、窓を開けて冷ややかな空気を吸い込みながら、眼下に広がる日本時代の豊原機関区を眺めた。

かつては樺太最大のSL基地であり、働く人は変わったが、鉄道は日本最大の遺物として今も活用されていた。狭軌の鉄道では設計・開発費が膨大な額になるため、日本製を採用した方がコスト安になり、日本製の機関車、客車、寝台車が多いようである。(上の写真はSL「RETRO」号)

戦後、ソ連への賠償物資としてD51型SL30輛、寝台車5輛、客車10輛、貨車310輛を新造して輸出したと聞いているが、ソ連本土は広軌のために狭軌の日本に依存しているのだ。

食事前の一時、ホテルの前を目的もなく徘徊すると、昨夜の暗闇では目に映らなかった大広場が展開した。そこには行き先によって色分けされたバスが発着し、通勤客は列をなして待機していた。

ホテルの横に並んでいるサハリン駅の構内に入っていると、先ず第一に朝鮮人の姿が目にとまった。そして切符を買うための長い行列は、ロシアの風物のように見えていた。

構内に飾った不細工な木箱に植えたゴムの木は、樺太第1の表玄関には釣り合わず、美的な鑑賞をする習慣がないのかと思ひながら構内を廻った。

(右上の写真は、左は駅舎、右はホテル)

(右下の写真は、切符を買う客の列)

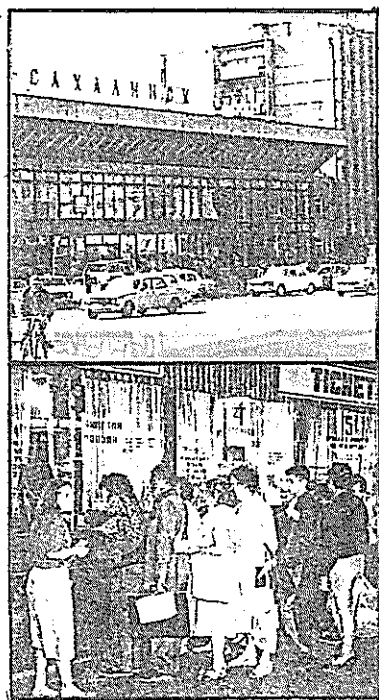
列車の発車時間表を覗いてみると、本数が非常に少ないのに驚いた。鉄道の主体は貨物輸送であろうか。輸送の重点は鉄道か、それとも自動車だろうか。

構内にはまた傾いた一坪ほどの薄汚い数軒の売店が並んでいたが、何を売っているのだろうか。朝が早いせいかな人影は見えていなかった。

構外に出ると、駅の並びの右端に赤煉瓦の倉庫らしい建物が見えてきた。これは恐らく日本時代の遺物である。その前の一隅に日本のSLが威風堂々と展示されていたが、鉄道に関しては日本製が優秀だと評価し、流石のロシアも兜を脱いでいた。

駅前広場の正面には今日では珍しく、陳腐化してしまったレーニン像が立っていて、ナナカマドの美しい街路樹が十字字になった道路に伸びていた。

其処に立ち止まってレーニン像を眺めていると、終戦後に駅を中心にした驚天動地のソ連機の爆撃が、想い出されるのであった。(次頁の写真はレーニン像)



ソ連は国際信義を守らずに日ソ中立条約を破棄し、国境を越えて侵攻してきた。豊原は首都だから、北から命からがら逃げてきた人、海を渡って北海道に行こうとする人で、駅周辺は戦争以上の騒ぎとなり、ごった返していた。

ソ連軍の進撃が速くて樺太島民は逃げる事ができず、闇鬱な日々が続いていた。絶望、恐怖、不安、悲しみが充満する群衆に対し、冷酷無謀なソ連機は爆撃を繰り返し、豊原駅周辺は焼野原になってしまった。

時は停戦成立後の昭和20年8月22日午後のことであった。朝からソ連の偵察機が3、4回にわたって飛来したが、豊原では役所から警察、病院、学校を始め、市民の各家には白旗を掲げ、安心していたのである。

ソ連機の爆撃目標は、豊原駅周辺に蟄集した日本人の疎開行動の阻止であった。人命を虫けらのようにしか思わないソ連機、テウ2型6機と、ヤーカー9型3機は、2次にわたって爆弾と焼夷弾を投下し、街は灰燼と化してしまった。

無事の民の死者は100人以上と言われているが詳細は不明である。火災は燃えるにまかせた勢いで、家並みがなくなるまで燃え続け、市内の4分の1は焼失した。

日本人が開拓した街を静かに散策していると、広場の周りから日本人の血の臭いが漂ってくるような錯覚に陥り、悲しい紅涙に誘われるような感じでホテルに戻った。



ホテル列車の旅

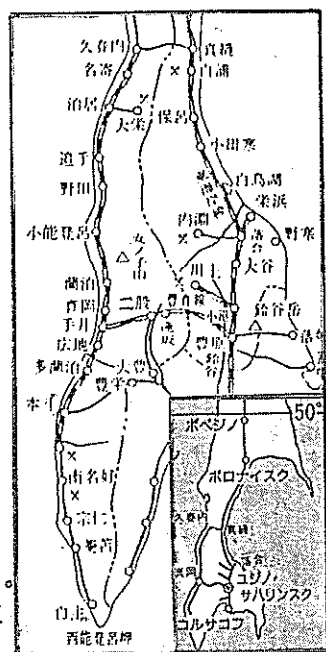
サハリン州では観光好きな日本人向けに、北のリゾートの開発に力を注いでいるが、ホテル不足と道路整備の遅れが観光振興の泣きどころであった。

サハリン鉄道局ではデラックス寝台車を使った鉄道ツアーを企画し、走るホテルの「ホテル列車」を使えばホテルの解消は勿論、夜行という空間は長距離旅行を可能にし、凹凸の道にも悩まされないと考えた。

そこで1990年夏からホテル列車の旅を実現させ、鉄道の長所を生かしたのであった。

ホテル列車の旅に参加した一行30名が宿泊したユーラシア・ホテルは、駅に隣接した6階建の高層建築で、1991年5月にオープンしたサハリン初の日ソ合併ホテルである。この会社がホテル列車に力を注いでいる関係から、ホテルの裏側から直ぐ列車に乗車できるようになっている。

一行は8時10分にロビーに集合すると直ぐ列車に乗車した。生きているうちに樺太に渡り、寝台列車で旅をするなどとは思ってもみなかったことで、それが現実となった未知の世界への旅立ちは、表現できない格別な感激であった。〔上の図はホテル列車の停車した駅で（黄色箇所）出発時には停車駅は不明、所謂ミステリー列車であった〕



日本時代の最大の遺物であるサハリン鉄道、1906年以来40年間にわたって開拓してきた数々のSLや貨客車、それらに囲まれた誇り高き豊原駅を後にして、我々を乗せた列車は他を睥睨するように発車した。

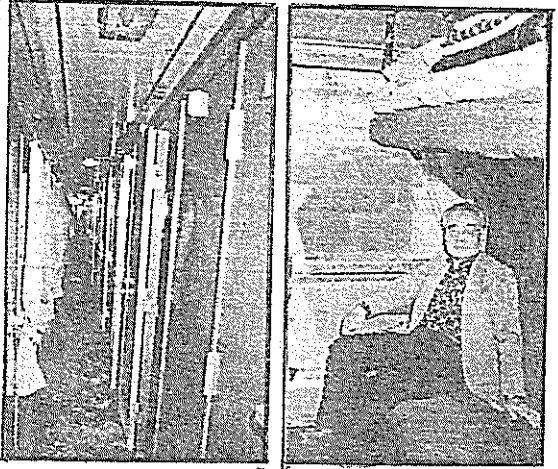
日本から無償提供され日本を彷彿させる車輛が視界から消えると、鮮やかな緑が映える古い道路が、太古のままの山や谷の間に伸びていた。同胞の歴史を秘めた景観を眺めながら、列車は西カラフト山脈の山間を走り、先ず真岡に向かった。

ホテル列車の寝台車には2人用の個室が1輛に10室あり、夜は2段ベッド、昼間はゆったりとしたソファーとして利用できるようになっている。

一行の乗車した臨時に編成したホテル列車は、寝台車6輛と食堂車1輛からなっていた。

特別に優遇された我々には一人に1室が提供され、実に快適な居心地で一段と旅心を魅了させてくれた。

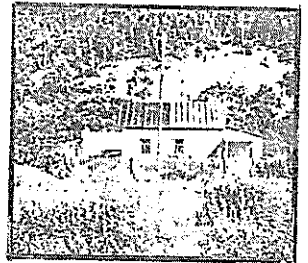
〔右の写真の左側は寝台車の廊下、右側は2段ベッドの個室（日本製車輛）〕



穏やかな涼しい夏の朝は樺太では一年中で最もよい季節だ。日本のような真夏日はなく、肌に春の余韻を感じながら車窓を眺めていると、間もなく列車は静かに停車した。

列車の高い踏み段を危ない足どりで降りると、そこはプラットホームもない線路上であった。

添乗員に停車場を尋ねたが、看板もなく判る筈がない。高く盛り上がった線路の下には一軒の荒れ果てた廃屋がぽつんと見えていた。（右の写真）



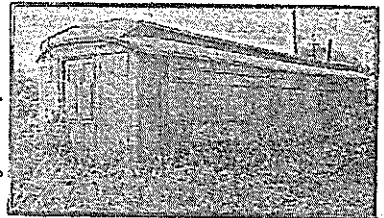
私の予備知識で図上判断すると、恐らく「逢坂」（前頁の地図参照）付近である。逢坂は終戦後に真岡正面で戦闘した札幌25連隊本部の所在地で、軍旗を奉焼した涙ぐましい場所である。西樺太山脈の山間にある逢坂の部落は高地にあると思われ、見えている一軒の荒屋は駅舎だろうか。

豊原と真岡を結ぶ83、9kmの豊真線は、1921年（大正10）に開通した。しかしサハリンの鉄道は貨物輸送が重点だから、旅客列車よりも貨物列車の方が多い。駅とは名前だけのようで、説明のないのも樺太旅行の特徴の一つであった。

蝦夷松やトド松、ナナカマドやカエデなどの広葉樹と針葉樹が混生し、自然だけが話掛けてくる浮き世離れした山間に、停車すること15分、列車は発車の合図もなく静かに動き出した。

西樺太山脈を東西に横断して走る豊真線の景観は、我々が日本に生を享けた大正時代の原始の姿を再現し、久しぶりに清らかな浄福感に包まれていた。

20分ばかり走ったかと思うと再び列車は停車した。スピードを争い、時間短縮を競う鉄道に慣らされた我



々は、今でもこのような超鈍行の列車があるのかと思いつつ、空と草木だけで出来ている世界に降り立った。

廃駅となったレールの上に1輛の廃車が目に映った。日本時代及び戦後に輸出された日本製の客車や貨車の廃車が、今なお後生大事に各駅の構内に保存され、詰所か倉庫の代用として老後を過ごしていた。(前頁の下の写真)

レールと廃車しか見えない停車した場所は一体どこであろうか。図上では逢坂を過ぎれば「二俣」の部落しかない筈だ。

昭和20年8月20日早朝、ソ連軍は艦砲射撃と空軍の援護のもとに真岡に上陸した。戦火に脅えた市民や避難民は戦々恐々として山道を避難し、その逃げ場となった山間が二俣だと想うと、胸がえぐられるような思いがする。

暫く蒼天を仰いで茫々とした山野を見詰めながら、喪家の狗のように心身ともに疲れはて、算を乱して逃避した邦人の無残な姿を想像していた。しかし過去は過去として、若いロシアの列車乗務員を冷酷非情な眼で睨むようなことはしなかった。

静かに二俣の駅を離れた列車はいよいよ山岳の中に入り、急勾配や急カーブが連続した難所に差し掛かった。

トンネルの中は真っ暗闇であった。日本のように点々とした灯が見えず、事故発生の時の危険を考えると寒気が襲ってくる。

日本領の時のSL時代そのままの何の進歩もなく、50年にもなろうとしている現在も、戦利品に頼っている状態だ。

列車はトンネルを通過した直後に停車した。ここにもホームはなく、目に映るものは鉄橋と監視所らしい一軒の荒屋だけであった。(上が鉄橋と荒屋)

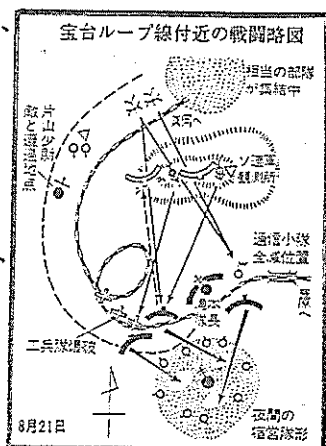
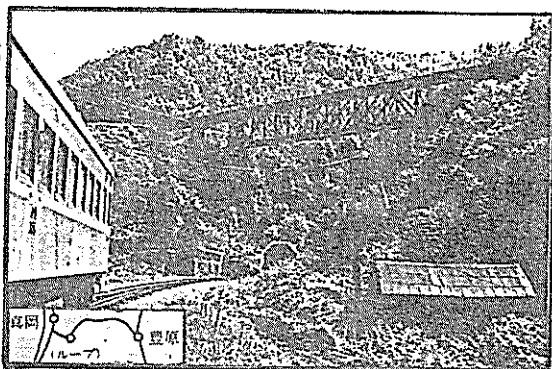
添乗員は宝台のループ線(輪)とだけ説明した。樺太唯一のループ線で、難工事が続いた山岳路線の開通によって東西が結ばれ、農業の振興や森林資源の開発、冬期の内陸部への足が確保され、その経済的効果は計り知れないものがあつた事だろう。

今では観光用に走る列車の鉄道名所の一つに過ぎないが、私にとっては別な意味をもっていた。

私の同期の藤田幸夫君が25連隊の大隊長として部隊を指揮し、真岡に上陸した敵と宝台ループ線付近で激戦を展開して、左肩に貫通銃創をうけた古戦場であった。

8月21日午前3時頃、藤田大隊長は1ヶ中隊を宝台付近に急派し、ループ線北方に砲兵を有する敵600と遭遇、藤田大隊長も第一線に進出し、相互にループ鉄橋の争奪戦を展開した。(右は戦闘要図)

数次にわたる敵の総攻撃を必死に応戦して撃退し、激しい白兵戦が夕刻まで続いた。ソ連軍は戦車と飛行機を繰り出し、焼夷弾まで打ち込まれては、戦線を縮小しなければならなかった。(宝台付近の戦闘の犠牲者は、戦死者35名、負傷者33名であった)



この宝台付近の戦闘のソ連軍の目的は、我が軍の兵力増強を阻止することで、我々が見詰めているループ線の鉄橋は、ソ連兵の手で爆破された。

実戦を経験したことのない藤田君の緒戦はループ線であったが、千軍万馬の私にも緒戦の時があった。責任観の重圧から、身が縮むような不安と恐怖にかられた緒戦の心境が、改めて想い出されていた。

出発時間が切迫すると目を皿のようにしてループ線の鉄橋を凝視した。そして軍人の最大の道徳は責任観と義務観だったと悲愁をこめて回顧し、真岡へと進んでいった。

直ぐ左手に陽を浴びて銀色に輝いている潮水が揺がり、天国の泉のように見えていた。

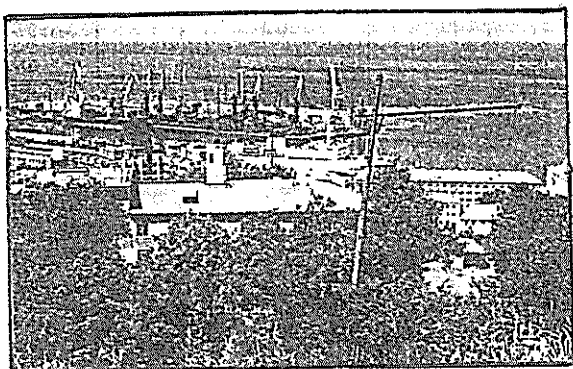
これは真岡にある旧王子製紙の水源湖で、昔のままの姿で我々を歓迎しているように思えるのであった。（上が水源湖）

豊原を8時10分に発車して83、9kmの真岡線を、なんと4時間もかかって漸く真岡港が見える所に到着した。実にのんびりした列車の旅である。

真岡の高台の線路上に停車した車窓から、眼下に浮かぶように見える港を眺めると、見るに耐えない戦乱の光景が想像されてきた。

万斛の涙に誘われて懊悩しなければならないような胸中である。

真岡に就いては先ず概要を記載し、次いでソ連軍が上陸した当時の市街の状況と、日本軍の戦闘状況を記述し、最後に観光の記事を掲載する。（上は真岡港の景観）



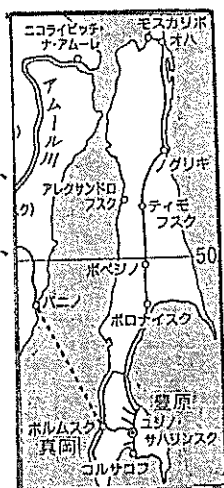
真 岡（ホルムスク）

「真岡の概要」

18世紀末、松前藩によって樺太西海岸の主要漁場として開かれ、幕末には樺太経営の一拠点となった。日露戦争のポーツマス条約後（1905）、真岡支庁の所在地となり、漁業や水産加工業の他、樺太工業の製紙工場（後の王子製紙）も進出し、急速に発展した。

又、近代的な築港や樺太鉄道西海線、豊真線の分岐点として交通の要所となり、人口は1万9000人（1941）を数えた。

樺太最大の港町真岡は現在ホルムスクと呼ばれ、樺太の陸と海の玄関である（不凍港）。モスクワからのシベリア鉄道は、ハバロフスクで分岐して沿海州のハニノ（右図参照）港に達し、ハニノから



間宮海峡（タタール海峡）を斜めに横断して海上260km、所要時間9～12時間で真岡に着く。

船は8000トンクラスの外洋船で冬期の砕氷能力を有し、ボギー貨車23輛を積載し、広軌1524mmゲージの収納線が3線敷かれている。

港には可動橋があり、広軌一狭軌（樺太は日本の在来線と同じ1067mm）への台車交換工場もあり、1時間に20輛の作業能力を有している。

樺太は資源が豊富で石油・パルプ・木材・水産など、第1次産品の輸送は鉄道が主導権を握り、貨物の大陸本土への直通は経済面でメリットが大きい。本土からは食糧・雑貨などの生活必需品を搬入し、真岡は大陸との接合点である。

「ソ連軍上陸時の悲惨な真岡市街の状況」

ポッドダム宣言を受諾した日本政府は8月15日の「終戦の詔勅」をもって、戦争終結を宣言した。

樺太庁は8月9日のソ連の対日宣戦布告から、北緯50度の国境線を突破したソ連軍の動きに対し、急拠在留邦人の本土への緊急疎開を決め、大泊、真岡、本斗の3港を邦人輸送港に指定した。

それ以来、あらゆる船を動員して65歳以上の老人、

14歳以下の児童、幼児と婦女子の引き揚げを開始した。（上は真岡市街地図）

8月20日早朝の真岡は冷たい霧が町を覆い、普段と変わらない駅や港には各地から集まった避難民でごった返していた。

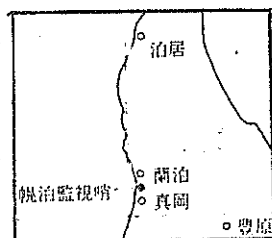
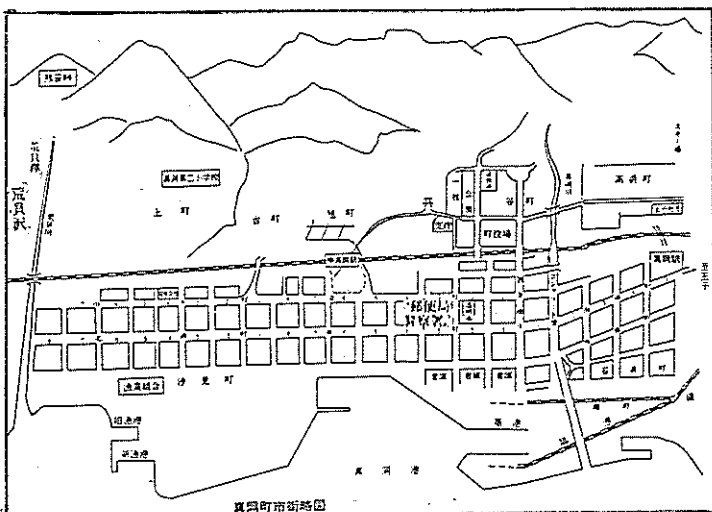
真岡港には北部から避難してきた漁船やハシケ船が岸壁に幾重にも係留され、どの船も船底からデッキまで人と荷物で寿司詰めの状態であった。寝返りすらできない場所で、婦人や子供たちが身を寄せ合って眠っていた。

真岡駅も無蓋車や有蓋車を仕立てた列車がホームに停車し、そこで一夜を明かした難民で溢れ返っていた。リックや風呂敷包を抱えた婦女子や子供たちは、不安と疲れで生気を奪われ、口を開く者さえいなかった。

20日午前5時40分、「ソ連軍艦4、5隻が幌泊（真岡北方8km、右図参照）沖で進路を変え、真岡方面に向かった」という緊急連絡が入った。

日本政府は8月15日をもって戦争終結を宣言したが、樺太に駐留していた第8師団の戦闘態勢は解除しておらず、真岡市街後方の山岳地帯には、25連隊の第1大隊が駐屯していた。

それはソ連軍の上陸に際して、平和進駐の交渉のための防衛態勢であった。



突如としてソ連軍は艦砲射撃の援護のもとに上陸を開始した。時刻はソ連戦史によると午前6時37分である。

砲弾は船待ちをしていた避難民や町民の上に炸裂し、安眠中の早朝のことだから服を着る暇もなく、阿鼻叫喚の中を着のみ着のまま素足のままで、慌てふためきながら丘の上に登った。

ソ連軍は17隻の艦艇と5隻の輸送船、及び80機の空軍からなる第113狙撃旅団と、海軍混成大隊が合流した3200人の大兵力であった。

上記した通り日本軍は8月15日、すでに連合国に降伏していたが、寝耳に水のようにソ連軍は停戦を無視し、一方的に戦闘を開始したのである。

その時、第88師団（司令部は豊原）は全軍に戦闘中止命令を下達していた。しかし第25連隊長の山沢大佐は自衛のための応戦態勢は崩さなかった。

連隊長は逢坂の八幡神社で軍旗を奉焼し、ソ連軍の攻撃に際しては玉砕を覚悟で戦闘を決意し、一方では、ソ連軍に降伏の軍使を派遣して停戦交渉も決断した。

前記したように我が軍使はソ連兵に殺害され、最後の望みをかけた平和交渉も失敗に終わると、否応無く応戦するしかない状況に陥った。

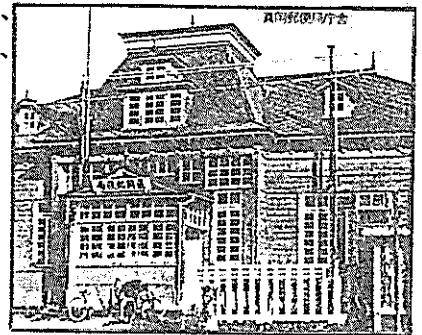
軍の戦闘状況は別記するが、悲惨極まるソ連軍の真岡上陸で特記すべきことは〔真岡郵便局の電話交換手「9人の乙女」の集団自決〕である。

終戦までの日本では、戦場は国のために死ぬ場所だと教えられていた。電話交換手たちも業務の使命観に燃え、家庭や自己の問題より戦場の業務を優先させていた。

いずれ樺太の邦人を守り無事に引揚げさせた後は、軍の通信隊に業務を引き継ぐことになっていたから、それまでの通信業務を遵守することが彼女たちの任務であった。（右は当時の真岡郵便局）

彼女ら交換手は時々刻々と緊迫する状況は戦務から明らかで、霧が引いた水平線上のソ連の軍艦からの発砲で、更に決意を新たにした。

一瞬のうちに真岡の町は戦火に包まれて壮絶な戦場と化し、断続的に発射する砲弾が局舎内にも飛び込んできた。



柱や壁を貫通する金属音に彼女らは身を縮め、耳を手で押さえてうずくまりながら非常体制に入り、従容として活躍を続けていた。

第一線に立った将兵でさえも緒戦の恐怖は言語に尽くすことはできず、まして若い彼女等の心境は察するに余りあるものがある。

危ないと絶叫しながら、自分はこれで死ぬんだと感じても戦場を離れず、最後まで電話の戦場で死ねば本望だと意を決したのではないだろうか。

戦場を放棄することは兵士の敵前逃亡に等しいと教えられ、交換手に誇りを抱いて業務に命を投げ打った気概は、現代の女性には理解できないかも知れない。戦前は「国の為に死ぬことは悔いはない」という教育が徹底していたのである。

艦砲射撃の凄まじい炸裂音と地響きの続く騒然とした中で、戦場を守っていた彼女等は死を覚悟して交換台を死守していた。責任観の強い班長は「もうこれまで」と青酸カリ飲んだと聞いている。その心境は指揮官を体験した者には理解できる。

野蛮なソ連兵が上陸してきたら身を凌辱されると、当時の日本女性は誰でも危惧していた。20歳前後のうら若い彼女らは日本女性の誇りを守り、戦場で潔く命を断つよう教育されていたのであろう。

次々と青酸カリを服毒する中で、最後まで交信を続けていた一人が泊居郵便局の交換手に対し、「もうみんな死んでしまい、私は乙女のまま潔く死にます。皆さん、これが最後です。さようなら」と別れの言葉を繰り返したと言う。

戦務に「殉職」した「9人の乙女の碑」は、旧樺太島民の慰霊碑「氷雪の門」とともに、稚内公園に設立され、毎年8月20日を命日として慰霊祭が行われている。

(右は稚内公園に立つ「9人の乙女の碑」)

10年前に稚内公園を訪れた私は乙女の碑の前に立ち、夢多き若い命を断った彼女らの冥福を祈り、平和を祈願しながら慰霊した。いま真岡の地を踏むと更に私の胸を刺すものがあった。



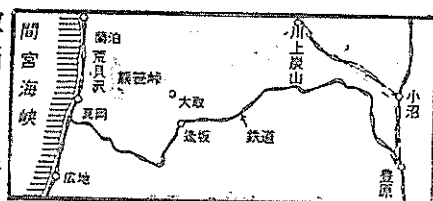
[当時の郵便局には郵政と電信を合わせた機能があった。青酸カリはメッキ用のもので、局に保管されていたらしい]

ソ連軍の侵攻に遭った真岡市街は大部分が焼失し、犠牲者は死者418人、行方不明者59人の合計477人で、未届け分を合わせると2倍以上と推定される。(勿論、軍の損害は含まない)

「日本軍の戦闘状況」

8月20日早朝からソ連軍の艦砲が住民に容赦なく砲撃を開始すると、突然の砲声に町民は雪崩をうって、軍のいる山間の荒貝沢に避難した。

海上からの砲火は物凄く、艦砲は山の向う側の荒貝沢の陣地を丸坊主にするほど射ち込み、飛行機の機銃は真岡市街の坂道を掃射した。



ソ連軍はどしどし兵力を上陸させ、自動小銃を乱射しながら海岸から山手に向って進出した。市街は砲撃によって火災が発生して黒煙が上り、風下には火の粉が降るように落ちてきた。(上の要図参照)

最後の時が近づいたような恐怖感から、町民や避難民は山を這うように尾根を越え、豊原に通じる豊真山道、鉄道の豊真線、その他の沢の避難道を群がるように逃避した。避難民は道路ばかりでなく、荒貝沢の両側の急斜面を攀じ登って逃げた。

台上に現われたソ連兵は機関銃で無差別に猛射し、町民や避難民は餌食になって沢に転げ落ちていった。

この言語に絶する悲惨な光景を見かねた各隊は、堪忍袋の緒を切って援護射撃を開始した。これに端を発して思いもかけない真岡付近の戦闘が開始された。

逃げることもできず、防空壕にひそんでいた街の人々は手投弾を投げ込まれ、自動小銃の掃射を浴びて射殺され、その中で集団自決したのが「9人の乙女」であった。

あり、準備不足のまま優勢な敵に包囲され、暗澹とした心境の中で責任観だけで戦ったことは、誠に同情に堪えないものがある。自然に私が体験したビルマの白骨の死闘戦場を想起したのであった。

荒貝沢付近の戦闘の犠牲者は、戦死将校3名、下士官兵30名、負傷者将校1名、下士官兵24名である。

「熊笹峠の戦闘」(下図参照)

ソ連軍が真岡に上陸を開始した後、逢坂の25連隊長は、真岡住民の豊原への避難を容易にするため、部隊主力を速やかに熊笹峠に集中する処置を講じた。

しかし連隊主力といっても第2大隊は、稚内要塞司令官の指揮下において西能登呂半島に在り、第3大隊主力は終戦により小沼(34頁地図参照)に終結の命令を受けて移動中であった。

第1大隊も荒貝沢の戦闘で損害が続出し、また広域に分散配置しているために兵力はなく、残るのは歩兵砲大隊があるのみであった。(歩兵砲大隊とは旧式山砲8門を有するのみで、一般歩兵中隊はない)

山沢連隊長は歩兵砲大隊長菅原少佐に第3大隊の第9中隊と、後退中の第1大隊の各隊を併せ指揮し、熊笹峠の死守を命じた。

8月21日正午ごろに峠に着いた菅原大隊長は、離散して後退してくる第1大隊の兵を追い返ししながら掌握し、「我々は樺太島民のために熊笹峠を死守する。敵を一步も入れてはならない。住民が北海道に渡るまで死守するのだ」と訓示した。

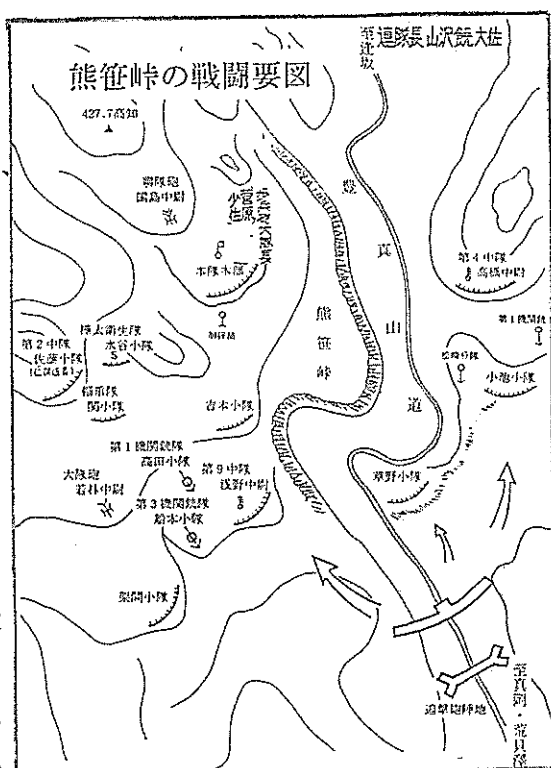
敵は熊笹峠へ後退する各隊に追尾するように前進した。荒貝沢と熊笹峠の山間に激しい銃声が湧き起こると、艦砲射撃と迫撃砲は峠に集中砲火を浴びせた。特に駆逐艦3隻の艦砲射撃は凄まじいものであった。

午後4時前後まで集中射撃は熾烈をきわめ、峠付近の山容は一本の草木もないまでに変貌し、次第に犠牲者が続出した。

急拠、各隊が各地から駆けつけて防禦配備に就いたものの、別に構築した陣地があるわけではなく、隊によっては各個掩体(壕)すら掘られていなかった。

熊笹峠は熊笹が生い茂り、行動は極めて困難で見通しが悪く、戦線を掌握することも至難であった。しかし各隊は命じられた防禦陣地を確保した。

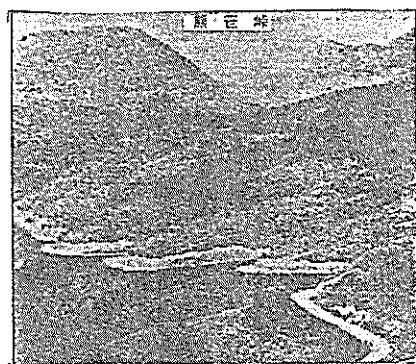
猛烈な敵の艦砲と迫撃砲の砲撃にかかわらず陣地を守備できたのは、峠の地形と熊笹の群生のためであった。しかし一方では、前線の隊が壊滅状態に陥っても、援助できる状況ではなかった。



ソ連軍は徹底した砲撃で陣地を破壊したあと、熊笹の茂みを逐次前進し、21日の夜に入ると我が陣地の間隙をぬって浸透してきた。

我が軍は急襲の転進で^{ソ連}円匙（軍隊用スコップ）なども携行せず、兵士は鉄帽と手で壕を掘り、交通壕のない第一線は極めて不利であった。陣地のない熊笹峠の戦闘は遭遇戦の様相であつたと考えられる。

その夜のソ連軍は30分射撃し、10分間休止するという砲撃を繰返し、壮烈な炸裂音と火柱が一晩中つづいた。（右は熊笹峠の遠景）



8月22日午前4時を期してソ連軍は総攻撃を開始した。艦砲射撃と迫撃砲に加えて、28回にも及ぶ空爆の援護のもとに、我が陣地に接近してきた。

陣地を死守する各隊は肉薄する敵に手投弾をなげ、連隊砲も反撃の砲弾を打ち込み、逆襲を敢行して熾烈な戦闘を展開し、死力を尽くして陣地の確保に力戦した。

敵の猛砲撃の前に将兵は次々と倒れる戦況下で、我が軍の猛反撃によって午前11時頃には敵は一時後退した。しかし態勢を整えた敵は再び攻勢に転じ、手投弾の応酬と肉弾相撃つ様相を呈した。

このような戦況を判断した菅原大隊長は午後2時、同一地点を長く固守する不利を避けるため、標高427、7高地（前頁地図左上）を中心とする線に戦線を縮小するに決した。そして連隊砲を始め各種重火器に対し、敵の前進を阻止する後退援護射撃を命じた。

大隊本部は午後6時頃に427、7高地に移動したが、熊笹に覆われた峠の各台地では激しい白兵戦がつづき、死力を尽くした攻防戦が繰り返された。

ソ連軍は熊笹峠を突破すると、大隊が最後の抵抗のために集結した427、7高地に目もくれず、豊真山道（前頁地図参照）を逢坂（連隊本部所在地）に向かった。

菅原大隊長は逢坂方面に前進するソ連軍の大部隊に対し、総力を挙げて攻撃する決心をした。しかし23日午前0時、連隊本部の連絡将校が「戦闘を避けて逢坂に帰還すべし」との命令を、大隊長に伝えた。

大隊長は連隊命令に基き、連隊に合流するため427、7高地を下り、山中を夜行軍して大取（34頁地図参照）に集結し、負傷者の手当を命じた。

その前日の22日、連隊長の派遣した軍使5名もまたソ連軍に射殺され、その後、連隊長自らの交渉で漸く停戦が締結した。このことは菅原大隊長は初めて知ったことである。

菅原大隊長と私は北支那（中国）の黄河流域の戦線に於て、同連隊の将校として共に戦った戦友である。特別志願将校の菅原氏と私は出身は異なるが、剣道は連隊では有数の将校だったと記憶している。

菅原氏が25連隊の大隊長として、終戦後の有名な熊笹峠の戦闘を指揮したことは、今回のサハリン紀行で初めて知ったことである。氏と部下将兵の奮戦を偲ぶあまり、紀行文には珍しく戦闘経過を記載した。

熊笹峠付近の戦闘の犠牲者は、戦死将校6名、下士官兵40名、負傷将校6名、下士官兵34名である。

「真岡の観光」

真岡のホームに降りて昔の姿をとどめた旧王子製紙の工場を眺めると、数本ある煙突の中で1本だけが黒煙を吹き上げていた。

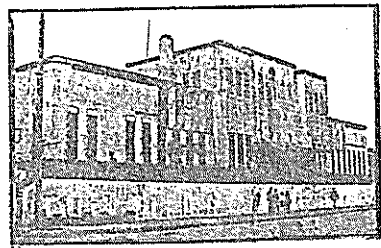
駅構内の片隅には赤く錆ついた車輪を積んだ貨車が繋がれ、山手には今もなお日本時代の貨車が倉庫代用として使われている。(右は倉庫代用の貨車)



この光景が戦後50年近くも過ぎた樺太第2の都市、戦勝国の本当の姿であった。敗戦国日本の津々浦々をさがしても、このような無残な光景は見ることはいない。

停戦後、ソ連が侵入してくるまでは平和そのものであった真岡が、粗暴で残酷な彼等によって容赦なく打ち砕かれ、その無残な爪跡が歴然として見えている。

添乗員はホームの前に散乱しているコンクリートの欠けらを指差して、ここが日本時代の真岡駅だったと説明した。(右の写真は同行の阪本氏から贈られた2年に撮影した真岡駅)

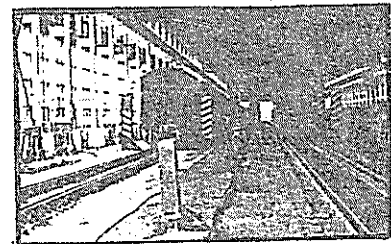


これは上野駅をミニサイズしたようなイメージで、上野駅をモデルにした小樽の駅舎を真似た建物であった。残念ながら今は見るに忍びない残骸となっていた。

我々の乗車する貸切バスは一向に姿を見せない。添乗員は観光時間を気にしたのか、徒歩で台車交換工場に誘導した。

本土と樺太との軌間(1524mmと1067mm)が異なるため、面倒なことに該工場で車輪の幅を修正しなければならない。

これがサハリン名物として観光に役かっているとは、時代錯誤のようにしか思えず、なんと未開発の国だろうか。(右は台車交換工場の内部)



見たくもない見学が終って駅舎の跡まで引き返すと、駅裏の高台にあった旧高浜町(33頁地図参照)の王子製紙杜宅の跡に、ロシア式の四角いレンガ造りのアパートが見えていた。

ここがソ連軍が上陸した最初の地点である。砲爆撃によって街の様相が暗黒の世界に一変し、建物は吹っ飛んで荒寥とした死の街と化したのだ。

「座頭を川中に剥ぐ」というように、無抵抗の市民に対する残虐な行動を想像すると、鬼哭啾啾として私の脳中は混乱し、眉をひそめるキナ臭い想いに陥るのであった。

一方、駅下の右前方にあった真岡郵便局の跡は確認できないが、最後まで戦場を守って自決した「9人の乙女」の墓場だと思うと、時計の針が逆廻りしたように過去の惨状が思い出され、蟬の鳴き声だけが哀愁を帯びていた。

漸くバスに乗車した。左に鉛色の間宮海峡を眺め、櫛の歯が抜けたような市街を進くと、右手に赤提灯を吊るした小さな店が見えてきた。これが真岡唯一の日本料理店である「くしろ」であった。

「人間至る所に青山あり」と引き揚げなかったのでしょうか。その心境を尋ねてみたいと期待していたが、無念にもバスは素通りしてしまった。

真岡の小さな街はすぐ通り過ぎた。車は右折して谷間に入ると、其処は前記した荒貝沢の戦闘があった血染めの場所であった。

白旗を掲げた無抵抗の軍使村田中尉らが射殺され、25連隊第2中隊が優勢な火力を誇るソ連軍に対し、名状し難い虚しい状況で苦戦をつづけた古戦場でもあった。

虫けらのようにしか考えていなかったソ連兵によって、極限状態に陥れられた市民たちが、絶望感の迫ってくる中を逃避した丘も見えていた。(上は荒貝沢の景観)

肌を粟を生じ怒髪冠を衝く思いで荒貝沢を登ると、更に深い谷が迫ってきた。いよいよ熊笹峠に差し掛かったのか両側は蝦夷松の林となり、羊腸のような山道を照らす太陽は、すでに天頂に達していた。

(右の写真は熊笹峠に通じる山道風景)

古戦場の哀史を秘める草深い道を進むと、バスは遮るものもなく四周が展望できる丘の上で停車した。その頂上には写真で見たソ連の戦勝記念碑が立ち、碑の天辺には東方を向いた砲が据えられていた。(下の写真)

日本人にとっては敗戦記念碑だ。断腸の血潮が騒ぐ暗澹として懊悩しなければならない胸中は、ただ茫然自失するよりほかに術を知らずといった心境である。

私の中国戦線での戦友であった菅原大隊長が、疲憊の極に達した将兵を叱咤激励、更に人間として堪え得る限度を超えた克難敢闘を要求し、遂に衆寡敵せず戦線を縮小した戦況が、私の熱くなった両頬に浮かんでいた。

戦車はない、重砲もない、飛行機もない、日露戦争当時の数門の古呆けた旧式山砲のみの装備で、陣地を構える余裕もなく、肉弾だけの精神力では、駐るも死、進むも死であったと同情する。

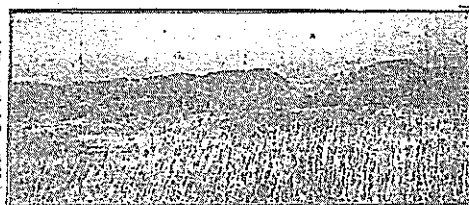
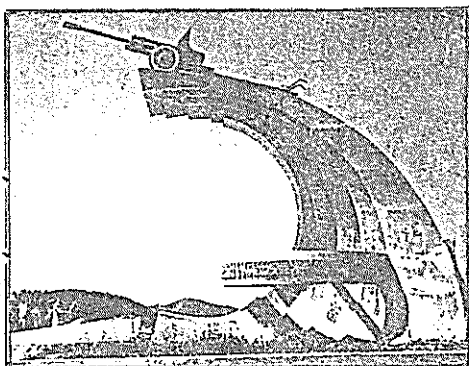
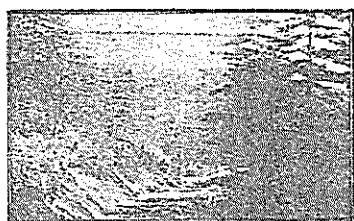
人間性を無視する戦闘の本質から、戦場は今日の我々の常識や人情とは隔離した世界である。このことは死生戦場に立って死生観に直面した人でなければ、これが是非を論じる資格はないだろう。

「夏草やつわものどもの夢の跡」となってしまった427、7高地は、1尺ばかり伸びた雑草が生い茂って熊笹は見えず、ここでも蟬の声だけが戦闘と関係なく聞こえていた。

快晴の夏空の下に空気が重くよどんでいる感じを受けながら、戦跡の高地を逍遙した。艦砲射撃を打ち込んだ海岸線に目をやると、各隊が必死になって固守した峰々から、さらさらと熊笹の音が響いてくるような気がする。

(右は記念碑の立つ427、7高地から海岸線を望んだ稜線)

訪れる人もない血潮で染まった戦場も、今では風化の彼方へ追いやられた丘となっ



て仕舞った。25連隊に在籍した一員として熊笹峠を心に銘じ骨に鏤め、鎮魂の祈りを込めて心の中で合掌したのである。

嘆息しながら出発時間を待っていると、今なお硝煙の臭いが鼻粘膜を刺激するような錯覚に陥り、乗車したバスは坂道を下って駅舎の消えた真岡駅へと向かった。

海に臨んで魚や塩に恵まれた魚塩の地・真岡の高台で停車した。そこは町民の信仰の中心となっていた真岡神社の跡であった。(33頁地図参照)

ホルムスクとは岡の上の町という意味である。岡の上にあった神社の跡には、こんもりとした樹木だけが遺っていて、「国破れて山河あり」の言葉の通りであった。

約2時間ばかりの真岡観光も終って寝台列車に乗車した。

そこで感想はと聞かれれば何と応えれば良いだろうか。すると胸に浮かんできたのは「日月曲がれる穴を照らさず」という言葉であった。即ち、「天道は不正に組しない」ということである。

国際信義にもとって日ソ中立条約を一方的に破棄し、停戦日の8月15日を過ぎた冷酷無謀な攻撃は、天道の名に於て絶対に許されないからだ。

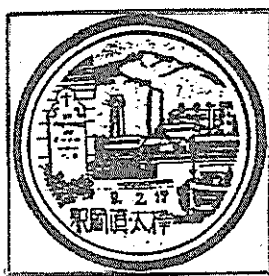
他の一つは、晴天の霞霞というべき終戦後に戦闘したのは、大日本帝国陸軍の中で、私の出身連隊である札幌歩兵第25連隊が唯一の連隊であり、その激突した戦場を訪れて感慨無量であったことである。

3つ目は、過去の戦争では戦争が終結すれば平和が訪れた。しかし第2次大戦後は強大国の指導者の間に不信感が強まり、平和でなく冷戦が開始された。これは連合国の最大の誤算である。

この冷戦構造の中で我が国は世界の経済大国に発展した。武力戦争では一敗地に塗れたが、長期的総合的な戦争では我々が勝利を取めたことであった。

列車では待ち構えていたように食堂車に案内され、テーブルに並べられた料理は鱈料理であった。さすが魚の町・真岡でその味覚は忘れられず、一行は舌鼓を打って堪能していた。

(右は思い出の多い戦前の真岡駅の記念スタンプで、製紙工業と漁業の隆盛が窺われる)



列車が発車して北上する車窓から海洋を眺めていると、思い出されたのは間宮林蔵の樺太探検であった。

彼は第2回目の探検の時この真岡に立ち寄り、案内人のアイヌを雇い入れるのに苦労したことが、脳裏に浮かんできたのである。

当時、この辺りまではアイヌが住み着いていたが、これから北はギリヤーク人やオロッコ人が多く住み、その上、沿海州からやってくる気性の粗い山丹人を怖れたアイヌたちは、同行を拒否していた。

幸い林蔵は、松前奉行所から乙名(役人)の位置を与えられていた老いた、アイヌの助力によって、6人のアイヌを雇い入れることができた。

これが間宮海峡探索の成功の鍵となったのである。

野 田 (チェーホフ)

北に進む列車の車窓から見渡す限り延々と続いた海岸段丘が見えていた。その単調な海岸の砂浜には夏を楽しむ子供が三々五々と戯れ、一帯は一つの部落も見えない寒村の海岸線がつづいていた。

午後の太陽の日差しがまぶしく車窓を照らし、カーテンの隙間から無人の浜辺に打ち寄せる白波を見詰めていると、山勢が迫った荒涼とした中に列車は停車した。

まるで別な惑星に降りたような感じで眺めていると、ここが野田だと告げられ、午後5時まで自由行動となった。(上の図は野田の位置図)

野田は真岡北方約50kmの田舎町で、小さな駅舎の前には、灰色の地肌をさらけ出した道路が海岸まで延びている。

駅前の一角に町に似合わないロシアの文豪「チェーホフ」の胸像が立っていた。

ガイドブックによると、チェーホフは樺太に旅したことはなく、野田はチェーホフと縁のある町ではない。戦後ソ連領となって偶然に付けられた町名に過ぎないという。(右は駅前のチェーホフ像)

しかし「モスクワ10日共同」によると、彼が日本人の売春婦と情事を楽しんでいたことが、彼自身が友人に出した手紙で明らかになった。彼のイメージを傷つけることを嫌って、旧共産党中央委員会が、この手紙の非公開を決めていたとしている。

手紙は彼が30歳だった1890年に友人の新聞社社長・スボーリン氏にあてたもので、「日本女性の性交渉の技術には驚くべきものがある」などと、赤裸々な自らの体験を綴っている。

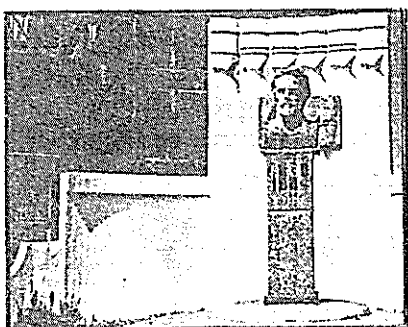
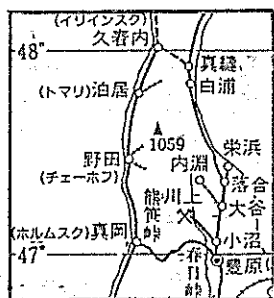
チェーホフはこの手紙の書かれた90年にサハリン旅行しており、サハリン島内での体験だった可能性もあると書いていた。

町役場と農家が隣接し、役場の玄関で鶏が遊んでいる寂れた田舎町も、将来は偉大な町名に負けない町造りを夢めているのだろうか。

暑気が増してきた灰色の道に陽炎が立ち、行く目当ても無く歩いていると右手に商店らしい建物があつた。

好奇心にかられて中を覗くと食料品の配給所のようで、2人のロシア婦人が買い物をしていたが、薄暗くて品物まで薄汚く見えていた。

一人の女店員の横に例の大きなソロバンとレジがあつて、台計りで目方を計り、棚には瓶詰や詰詰が並んでいる。樺太はハバロフスクやイルクツクに比べて物は豊富で、賃金も本土より4～5割



高いらしい。(前頁の下の写真は配給所の内部)

配給所を右に折れて何気なく歩いた。人一人も犬一匹も通らないような寂しい建物の軒下で、野菜を入れる木箱の上に、花とキュウリを並べた二人の女性が目に止まった。

彼女らは韓国人である。戦後の樺太残留韓国人の苦労は書物で読み、テレビ放送などで認識していたが、いま目の前に立って顔を合わせると目頭が熱くなって、話しかける言葉も知らない胸中であつた。(右は二人の韓国女性)

無意識にライターとボールペンにチューインガムを各人に手渡した。それは哀れみからではない。

1910年から朝鮮半島を植民地として統治した日本が戦いに敗れ、戦後の帰還問題では、日本にその権限が無かつたことは事実だが、道義的な責任を私なりに感じたからである。

彼女ら二人は苦難の歳月を刻んだ顔の皺をほころばせて立上り、10本ほどのキュウリをビニール袋に入れ、花もそっくり私の手に握らせた。

今から列車に乗って旅を続けるからと断ると、キュウリはそのまま喰ればよい、花は寝台車に飾ったらどうかと、握った手を離さなかつた。それも訛のない流暢な日本語である。

数奇な人生を歩いてきた彼女らの素朴な心に感激した私は、好意を無にすることもできず、忘我の心で有難く頂戴して御礼を述べた。

昨日も韓国から墓参団が野田を訪れたと話してくれた。「越鳥南枝に巣くい胡馬北風に嘶く」の通り、人間は故郷を懐かしく想い、異国に眠る肉親の墓参は当然であり、よかったねと答えて彼女等を見詰めた。

今度は私の方から、オリンピック後の韓国の素晴らしい発展ぶりを話すと、今では韓国から直接サハリンに来ることができるし、故郷の人も何人か見えているから、韓国のことは良く承知していると語った。

あなた達のことは日本のテレビでも放送されたが、韓国に帰って生活したいと思わないかと尋ねると、故国に帰っても生活の問題があり、ここに残っていると躊躇せずに即答した。やはり人生は到る所に青山ありで、住めば都であるようだ。

続いて南北の朝鮮人の間に軋轢があると聞いていると尋ねると、昔はよく争いがあったことは事実で、今では同じ民族として仲良くやっているという。漸く同胞としての歴史の歯車が滑らかに回転したようである。

さらに残留韓国人の4人に1人はロシア国籍や北朝鮮国籍をとらず、無国籍の人が居ると聞いていると話すと、今では諦めてロシア国籍をとっていると語っていた。

お互いに旧知のように眼を輝かせ、話しに相槌を打ちながら対談できたこしは旅の成果である。旅こそ友であると感じながら、彼女らに仕合わせな人生を送ってほしいと別れの言葉を送り、贈られたキュウリと花を手にして別れた。

日本の敗戦から無告の民となった彼女等は、遣る瀬ない懷郷の念から自暴自棄になったこともあつただろう。ひもじい思いをしたことだろうと、興奮しながら終戦時を思いだし、別な道を通って駅に向かつた。



その通りには数え切れない有蓋貨車が放置されていた。住居にしているのだろうか、それとも倉庫にだろうか。（右は錆びた貨車の群れ）

無惨な一角を見ると憐憫の情を感じないわけにはいかなかった。

錆ついた貨車を眺めている時、終戦直後の野田で、朝鮮人を冷凍庫に押し込んで殺し、海に流すという計画があったという記事が想い出された。勿論、事実無根である。

北樺太には朝鮮半島から沿海州に移住した北朝鮮人が、住み着いていたことは歴史的に明らかである。そして侵入してきたソ連軍の中に朝鮮人兵士が存在していたことも事実である。

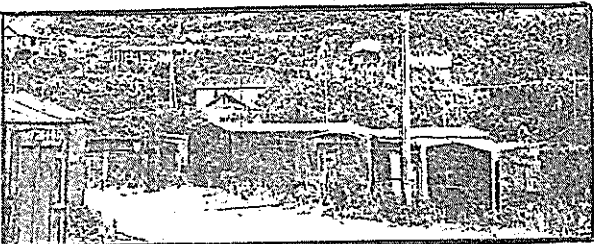
そのことが疑心暗鬼を生じて朝鮮人がソ連軍を誘導し、朝鮮人はスパイだというデマが飛び、デマがデマを生み、冷凍庫の話にまで発展したようだ。

野田は漁業のコルホーズがあり、トロール船団の遠洋漁業が行われていたと聞いていたが、今はそれらしい姿も眼に映らず、見るべき所も見当らずに列車に戻った。

中国には「婦女能頂半边天」という言葉がある。女性は天の半分を支えることが出来ると言う意味だが、ロシアでも列車乗務員の半数以上は女性が占めていた。

早速、韓国人から貰ったキュウリと花を女車掌に提供すると、良く張り出した乳房が揺れるように狂気乱舞して喜んでくれた。ロシア人は畑を耕さないから野菜は貴重品かも知れない。

まもなく発車した車窓に、地盤の隆起運動によって出来た海岸段丘が見え出した。単調な海岸線には良港が乏しいと眺めていると、女車掌は先ほど渡した花を花瓶に入れて、私の部屋のテーブルの上に飾ってくれた。何という微笑しいことだと、自然にハラショーと叫んだ。



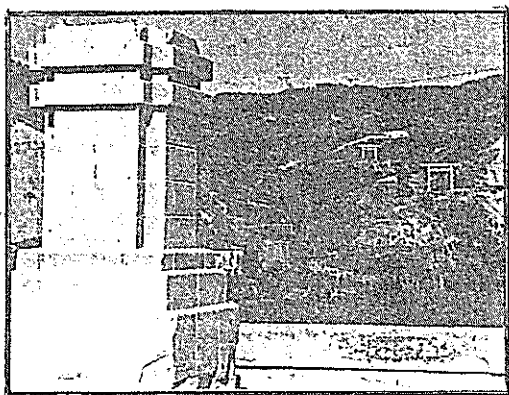
泊 居 (トマリイ) (位置は42頁参照)

列車は午後5時半に泊居に着いた。真岡北方90km（野田から40km）の泊居もまた荒涼とした灰色の中に、櫛の歯が抜けたように点々と建物が見えている。

1時間の自由時間が告げられた。すると添乗員と数名の若者達は健脚を誇るように、舗装されていない肌色の道を急いでいた。

予備知識として神社の跡に残っている鳥居だけが頭にあり、彼らの目標は鳥居だと膝の痛みをこらえて後に続いた。

速度の遅い私だけが離されて距離が開くばかりであった。駑馬に鞭打って小さくなった彼等の影を追いながら右折し、100



0 mほど歩いて漸く川に突き当たった。

川にかかった橋が大正8年に建造された泊居大橋である。橋の欄干の「泊居大橋」の文字は、日本時代の貴重な遺物として保存されていると聞いていたが、今は無残にも削り取られて見るも哀れな姿をしていた。

胸が詰まる思いで川上の方に視線を向けると、山の中腹に2つの鳥居が目にとまった。しかし神社の影はなく、山の方から哀調切ない歌が聞こえてくるようで、千秋遺恨と言わなければならなかった。(前頁の写真は泊居大橋と2つの鳥居)

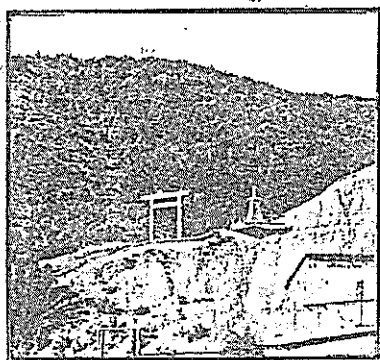
泊居には旧王子製紙工場(休止)があり、樺太では有数のビール製造工場もあったというから、神社は邦人たちの敬神崇祖の象徴として建立したものであろう。しかし我々は悲運にむせびながら、鳥居だけを拝まなければならなかった。

財宝が何だ。金銭が何であろう。この世にあるものは凡て過ぎ去ってゆき、この世は凡て空だと己に言い聞かせながら、川の上流へと進んで行った。

今は寂しく落ちぶれた街に情が移ったように川辺を見詰めていると、小さな花が西に傾きかけた陽を浴びて咲いていた。

川の向う側にある鳥居は大きく見えてきた。その横に1基の石燈籠が荘厳に立っており、崖下の河原にはビール工場の跡らしい建物も目に映っていた。

(右の写真は鳥居と石燈籠、右下はビール工場跡)

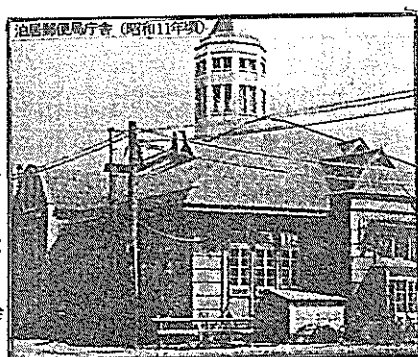


私の脳味噌の一番深いところに注視した光景を刻み込み、日出てでは働き、日入りては憩うというように見える、ロシア的な素朴な通りを歩き続けていると、泊居郵便局のことが思い出されてきた。

昭和20年8月20日、真岡郵便局の交換手から泊居の交換手に、「もうみんな死んでいます。私も乙女のまま潔く死にます。みなさん、さようなら」と、余韻を残すように別れの言葉を繰り返した。

その泊居郵便局は今はないが、この言葉は永遠にこの地に遺っている。(右は戦前の泊居我卯郵便局)

「もうみんな倒れて苦しんでいます。私も眠くなってきました。皆さん長らく御世話になりました。さようなら」と聞いた時、泊居の局員4人はみんな大声で泣いたそうである。



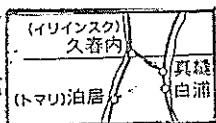
泊居の局長は、「もし泊居の局が真岡の局と同じような局面を迎えても、決して死なないで下さい。必ず生き延びることを考えて、絶対に殉職などはしないで下さい」と、諭したと伝えられている。

そのような記事を読んだ記憶を想起しながら、身を斬り胸がつまる思いで追々と歩き出したのであった。

久春内 (イリンスク)

対馬海流の影響で冬期でも凍結しない泊居を発ち、午後8時に久春内に到着し、2時間の自由行動となった。(日没は10時半)

真岡北方125kmの久春内は、樺太を東西に最短距離で結ぶ「北部横断線」(久春内～真縫間の29.1km、右図参照)の西端で、鉄道では要衝の地であろう。

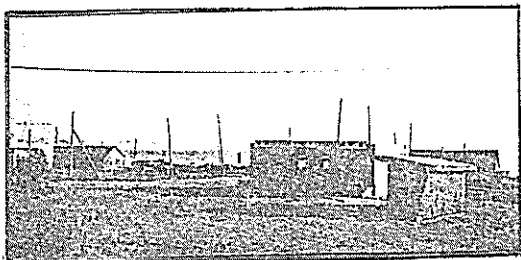


鉄道の図上では明瞭に記載されている久春内も、車窓から眺める光景は数軒の荒屋と、渺茫とした群青の大海原に、原始に近い草原の海岸だけで、別世界に足を踏み込んだような感じであった。

ホームもない所に降りたものの、無味乾燥した一帯には我々を引き付ける何物も存在しない。

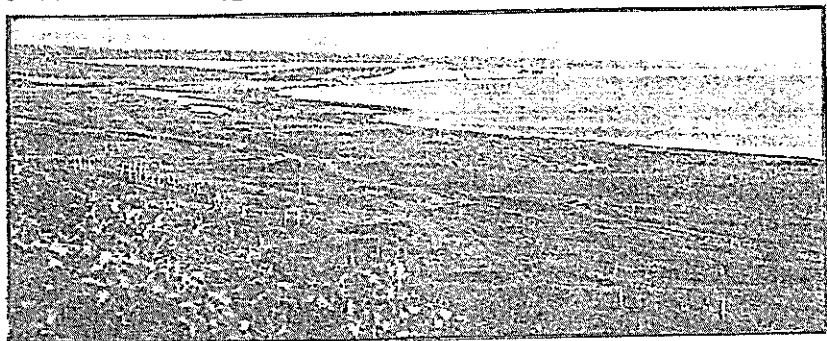
一行の人達も徒然のままに海岸線に向かって歩き出し、後塵を拝する格好で私も後につづいた。

(右は浜辺に建つ数軒の住居の景観)



海岸段丘となった砂の上に腰を下ろすと、辺りには陶然とさすようにハマナスの赤い花が、草原の中に咲いていた。しかし其処には夕の粧いを凝らして、三々五々と寄り添う男女の姿もなく、ハマナスの花は可哀想に見えていた。

大きく弧を描いた海岸線は穏やかな湾をつくり、所々に湖も見えていた。



ロシア人は耕作をせず、漁獵が主だと言われているが、舟らしいものは見えず、久春内の住民は鉄道の従業員ばかりであろうか。

(上の写真は大きく弧を描いた海岸線と点々と見える湖、左下はハマナスの花)

冥想するように目を半ば閉じて眺めていると、間宮林蔵の探検記が脳裏に閃いた。

林蔵は樺太の東海岸から島の北端を回る計画を中止して、真縫から陸地を横断した。久春内に向かった林蔵の舟は、6月5日に河口にあった久春内の岸辺に着いた。

そのとき久春内の海岸にはニシンが押し寄せ、海は泡立って色も変わっていた。ニシンの大群で海水がかき廻されているため、それに酔ったカレイ、タラ、カスベなどの魚が、口を開けたり閉じたりして、岸に打ち上げられていた。

林蔵や同行のアイヌたちは、その魚を手づかみで食べたという。残念ながら、今はそのような光景を見ることは出来なかった。

林蔵は真縫から山越えて傷んだ小舟を修理させ、2日後の6月7日に北に向かった。

海にはニシンの群が重なり合うようにひしめいていた。ニシンを押し分けて進むような感じで、彼らは隙間もなく海面を覆うニシンに呆気にとられて見つめていた。

舟は北へ進み、夕刻には岸に上がって野宿することを繰り返し、アイヌの家がある土地を選んで舟を寄せたが、海岸は砂浜つづきで荒涼としていたという。

段丘の上から穏やかな海を眺めながら、何回も手づかみで食べた光景を想像していたが、暴虎馮河の剃刀の刃を渡るような危険な探検を考えると、強靱な体力と精神力に感服するばかりであった。

林蔵の探検記には、糠蚊という小さな蚊の大群に襲われて閉口したと書かれていた。しかし斜陽の時刻を迎えた今頃、蚊の来襲を見ないのは、樺太の衛生状態が進歩したのであろうか。

夕風の浜風が吹きわたる間宮海峡の彼方に、次第に沈む太陽が異様に赫く映る光景を眺めながら、未だ薄紅色の明るさが僅かに残る草原を列車に向かった。この悠然とした暮色は私の最も好きな眺望で、振り返り、振り返り、静かに歩いた。

すると、何もない夕闇が迫った薄暗がりの草原で、数人の子供たちが戯れていた。恵まれない土地に生きなければならない子供たちに、朝のこない夜はない、希望を抱けと心の中で叫んでいた。

漁火の一つも見えない寂しい海、炊煙の一条も昇らない久春内の小さな村に別れを告げ、漆黒の静かな夜空の中を列車は出発した。時刻は午後10時28分である。

8月2日

(月) 晴

真 縫 (アルセンチェフカ)

陽が沈んで闇の中を発った久春内で、本夜は名もないところで停車して一夜を過ごすと言われた。

天も眠り、大地も眠り、人も眠る静寂な夜はどこまでも静かで、列車が停ったことも知らずに深い眠りに就いていた。

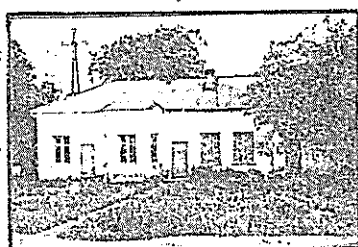
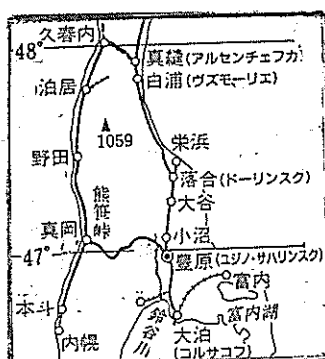
旅の疲れから重なり合った瞼は開くことを忘れ、ロシア人の女車掌の甲高い笑い声で目を覚ましたのは午前8時半である。

赫い朝の光が車窓から斜めに射し込んでいた。外は切ないほど静寂で広い空だけがどこのでも青く、2000年前も同じだったような草原が取り巻いていた。(上は真縫の位置図)

冬期には命まで削られそうなツンドラ地帯の一隅に、お粗末で小さな1軒の荒屋が建っていた。添乗員に場所を質ねたところ真縫であった。

真縫は北部横断線の東の起点でありながら、無人の駅舎があるだけで部落らしい影は何処にも見えず、久春内よりも一段と寂れていた。(右は真縫の無人駅舎)

9時半の朝食の時、私の隣の席に韓国人の通訳が座り、流暢な日本語で話しかけてきた。終戦のとき8歳だった彼は今では55歳の熟年である。



彼の父は戦時中、共和会の豊原の会長を務め、日本に協力したということで投獄され、遂に獄死したとう。母は85歳で今も健在だと話していたが、無告の民の韓国人は、日本人の我々に話すだけでも気が安まるのだろう。首肯して話を聞いてやるのが、せめてもの気休めだと耳を傾けて清聴をつづけた。

彼はハバロフスクの交通大学を卒業したインテリであった。昔は学資が無料だった大学も、経済状態が悪化した現在ではロシア人、朝鮮人の区別なく有料だという。

日本については、世界第一の経済大国に発展していると全国民は認識しており、彼等の訪問したい第一の国は日本だと言っていた。彼は仕事の関係で札幌を訪れたが、実に素晴らしいと連発して褒めていた。

韓国人の帰国問題では、北朝鮮の妨害工作によって帰国できなかったことを、漸く理解したというから、我々日本人としても安堵するところである。

樺太に居残ってしまった今日では樺太も住めば都、韓国の親戚知人とも疎遠になり、現在では帰国する意思は全くないと述べていた。そして韓国からの墓参団も時々見えるが、その費用は日本の赤十字が主体となって負担しているという。

彼と食事を共にして残留韓国人の胸中の一端を知り、樺太旅行の思わぬ成果となったことは何よりで、強く胸に響くものを感じたのである。

食事が終わった一行はレールの上に降りて、朝の清々しい大気を吸いながら無聊を慰めていた。

我々の乗車した列車も亦、行き交う列車があるわけではなく、朝日を浴びながら退屈そうに長い車体を持て余していた。(右はホテル列車)



そのとき、私に特別な好意を寄せてくれる副支配人は、笑顔で近づきながら言葉を掛けてきた。ロシア語の解らない私は彼の態度で判断するしかなく、多分、朝の挨拶であったのであろう。

早速、彼を私の部屋に招いて持参したカップラーメンと焼きそばを進呈すると、初めて日本語で「有難う」と御礼を述べた。その嬉しそうな顔は今でも私の脳裏に刻まれている。

「超のんびり列車の旅」の退屈にも飽きることなく、しかも誰一人として不平や文句を言う者はいない。そのような雰囲気の中を昆虫が飛ぶだけの不毛の地、真縫を出発したのは午前10時55分であった。

白 浦 (ブズモーリィ、位置は47頁地図参照)

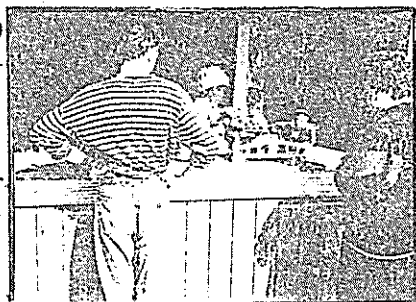
列車は発車して20分後の11時15分に停車した。白浦であった。2、3十輦の廃車が地上に並び、これが鉄道従業員の宿舎となっていた。絶対に日本では見ることの出来ない哀れというか、同情すべき光景である。

1時間半の自由行動となり、一行は足の向くまま彷徨より術がない。むき出しになっている灰色の道路に、珍しく砂塵を巻き上げながらポンコツのトラックが走って行った。

人家も少なく閑散とした寒村を回る旅も、樺太の実情を知る上では又とない体験だと駅前に出た。そこには白い毛糸の帽子をかぶった韓国人の女性が、堀っ立て小屋で店を開いていた。

店には赤大根や小粒の馬鈴薯、ニンニク、キムチを並べ、計りに掛けながらロシア人を相手に、細々とした商いをしていた。

(右は白い帽子をかぶって商売をする韓国人女性)



暫く立ち止まって見ていると、ロシア人女性が乳母車を押してきて店の前で停った。野菜を買いにきたのかと思っていると、乳母車の中から1ℓ入り牛乳瓶を取り出し、次々と韓国人の店の棚に並べ出した。牛乳の委託販売である。

野菜は韓国人、酪農はロシア人の分業社会が形成され、互いに仲のよい持ちつ持たれつの商売をしており、白人も黄色人種も溶け込んだ生活環境を作っていた。

昼食前のためか次から次と客足がつづき、韓国の婆さんに声をかける暇もない繁盛ぶりである。しかし日本円で1円2円の小商いは、日本人の我々には気の毒というより言葉はなく、頑張っていて欲しいと思いながら立ち去った。

暫く歩いて少々家の建っている道に出た。すると、一行の中で残留日本人を訪問する数名が、借りてきたガタガタ車を運転して走って行った。

私のような物見遊山の旅ではなく、目的があって訪れている人が居たことを初めて知り、頭がさがる行為だと敬意を表しながら、車の残っていた砂塵を見送っていた。

白っぽい2階建のアパートが草深い街の外れに立っていた。何気なしに裏側の玄関に向かったところ、そこに居合わせたロシア人の中年夫婦たちは、初めてと思われる日本人の私に、好意を含んだ視線を放ってきた。

絶好の機会だと看破した私はロシア人の生活を見たい魂胆から、二人にそれぞれライターとガムを握らせて家の中を指差した。

物が口ほど言ったのか、優しい眼差しで扉を開けて家の中に案内してくれた。

外観よりも数段も汚い建物の中は、1階が乱雑とした倉庫となっていて、2階は3ルームとなっていた。(右はキッチン)



階段を上ったところがダイニングで冷蔵庫

があり、隣のチッキンには直径20cmほどの煙突が立ち、ガスコンロが置いてある。

ただ寒冷地のため部屋が密閉している性が非常に暗く、電燈も小さいようであった。

居間兼ベッドルームには2つの寝台が両側にあり、暖房目的の絨毯が床に敷かれ壁を覆い、テレビと民芸品が飾られている。2人の生活の場としては、ゆったりとしていると言えるだろう。

この夫婦はインテリであろうか。大きな本棚にはぎっしりと書籍がつまり、私が棚を指差すと笑顔が返ってきた。

カメラを取り出すと夫人は先に立って案内し、彼女は笑いながらカメラの前に立った。するとお茶のサービスをするのだろうか、コンロに点火したのである。

人間味があれば、ただの水でも美味しく、手を横に振って遠慮の意を表しながら、三拝九拝して階段を降りた。

(右の写真の上はダイニング、下はベッドルームである)

見知らぬ土地で見知らぬ者が突然訪問し、人種の垣根を越えて善意に満ちた温かい心で、応接してくれたことに感謝したい。日本人とロシア人との間には、一部の者を除いて憎悪も怨恨も存在しないのであった。

アパートを出てぶらぶら歩いていると、時間を持て余していた10数人の一行に出会った。日ソ貿易会社に勤務したことのある石井さん(陸士35期の御令嬢)はロシア語が堪能で、大衆食堂の看板を見付けて我々を案内した。

食堂の調理場もタイル張りの小奇麗な店で辺鄙な田舎にしては珍しく、ホテル列車のり旅に出て初めてのことであった。ミルクやコーヒはなく、オムレツとパンを食べさせる大衆食堂で、我々全員ココアを注文した。

まあまあの味のココアを飲んでいると、店員が琥珀のプレスレットを売りにきた。石井さんが値段を聞くと2万ルーブル(日本円2千円)であった。後日、ジューロのサハリン代表・李世鎮氏から、白浦や落合の炭坑から琥珀が採れると聞いたが、樺太の新知識となった。

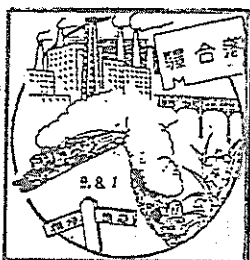
白浦には例の如く何も期待せず下車したが、犬も歩けば棒にあたるように、意外なことに出会って幸運であった。しかし彼らの生活は日本に比べれば燈心と釣鐘ではないだろうか。

列車は12時40分に白浦を静かに離れて行った。



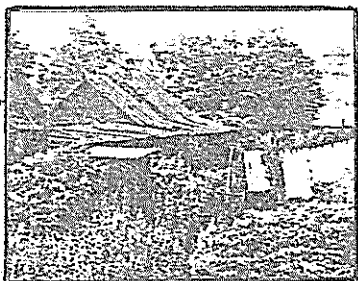
落 合 (ドリンスク、位置は49頁地図参照)

白浦を出発して昼食を摂り、午後2時に落合に到着した。戦前から落合周辺には炭坑が多く旧王子製紙の工場もあり、樺太鉄道と庁鉄道の連絡駅でもあった。(右は戦前の落合駅のスタンプ)



戦時になって一時、25連隊の大隊本部も置かれ、停戦成立後は豊原と同じく大空襲を受け、多くの犠牲者を出している。

車窓から眺める様相は貧相な荒屋と、日に干してある白い洗濯物が目に映ってきた、見窄らしい光景であであった。その一帯には母なる自然に抱かれた原生花園が広がっていたが、ここは駅裏であることが判明した。(右は駅裏の光景)

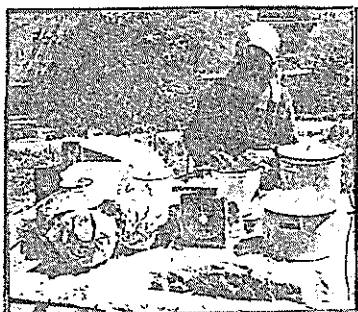


プラットホームに降りてみると、孤立した2階建の駅舎がぽつんと立っていた。

一条の駅前通りには想像もしなかった「柳絮」の大樹が天蓋のように枝を広げ、一面に白い綿のような柳絮の花が飛んでいた。

花盛りが過ぎたとはいえ柳絮の花は珍しい。ハバロフスクやイルクツクよりも開花が遅く、樺太は同緯度でも寒さが厳しいのであろう。北京や西京それに洛陽の美事な柳絮の花吹雪が懐かしく思い出される。

十字路の一角では韓国人の老婆が、フキの煮物、わらび、キャベツ、いちご、キュウリ、馬鈴薯や花を四角い板の上に並べ、露天を開いていた。



韓国の女性は働き者ばかりだ。何処へ行っても彼女等の姿が見受けられたが、頼もしい生活力である。

我々の子供時代に渡日した半島人の姿を想い浮かべながら、ライターやボールペンを渡した。真っ黒い日焼けした顔に真っ白な手拭をかぶった彼女は74歳だと述べていたが、一家は炭坑にいたのであろうか。

売れますかと声を掛けたところ、苦笑いで答える老婆の深い皺には苦難の色が刻まれていた。不幸な運命を背負った姿に心を傷めながら、何時までも元気でと手を振って別れた。(上の写真は白手拭を被った露天商の韓国の老婆)

すると六角形の風変わりな建物が見えてきた。覗いてみると切手やタバコ、缶詰、日用品の小物が並び、駅の売店の代わりのキオスクのようなものであった。

中にはロシア人の中年女性が店番をしており、ロシアの特徴を漂わせた風物の一つであった。

(右の写真は小物を売る六角形の店)



落合の部落を約30分ばかり散策して感じたことは、私が昭和15年に初めて中国の田舎を訪れた時よりも、見劣りがする経済状態で、環境整備が第一と思われる。

列車の旅は終わりに近づく (下図参照)

空に飛んでいた柳絮の花が印象を深くさせた落合、そこを出発したのは午後2時40分であった。

往時を回顧すると、落合から敷香（ポロナISK）までの24.5kmの区間は、王子製紙系の私鉄「樺太鉄道」が敷設したもので、我々が今、通ってきた線路である。開通は終戦の前年の昭和19年11月であったが、日本の歴史の縮図のような感じがする。

産業開発と軍用を兼ねたと思われる鉄道も今は往時の面影が薄くなり、静寂に包まれた中に延びるレールは白樺の林の中を走っていた。

聞くとところによると、終戦時には落合近郊に軍用飛行場も建設されていたらしく、昔の臭いが充満しているような感じさえするのであった。

大谷（右図参照）付近にくると、東西の樺太山脈の間を流れる鈴谷川を中心にした大平原が展開し、ガスタンクを思わせる6基の大サイロが見えていた。ソ連のコルホーズの遺物であろうか、ロシア人が放牧する光景も目に映り、青々とした牧草の刈り取りの真っ最中であった。

戦時中、25連隊の本部があったという「小沼」を通過すると、急に列車はスピードを上げて豊原へと快走した。一瞥した地形から判断すると防禦線の形成には至難な地形で、豊原防衛の第8師団の首脳は頭を悩ましたことだろう。

飛行機はなく戦車もない。僅かな砲兵も旧式装備で、ただ兵員の頭数だけ揃えた編成では、残された唯一の戦法は精神主義の肉弾戦だけであったと思われる。

このような精神万能思想は装備の劣勢に対する口実に過ぎない。私が死闘を続けたビルマ戦線を想起しながら、出身連隊である25連隊の苦渋に思いを馳せていた。

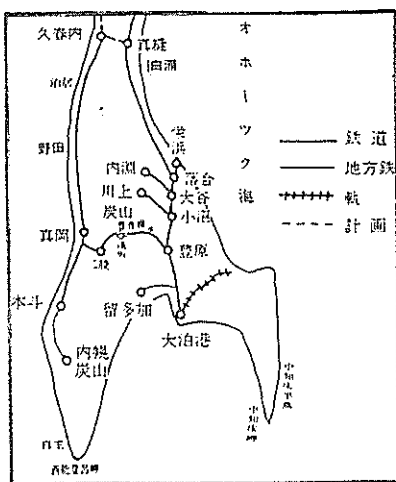
車窓から舗装された道路は見ることはなく、旧式トラックが砂塵をあげて走る光景だけが網膜を刺激し、線路に沿って生えた蝦夷松の青葉と、湿地に咲く大輪の花だけが目の保養となった。

豊原が接近したのか、次第に視界が狭まってきた。アパートが見え出し、工場の煙突や工事用のクレーンも見えた。レールの本数も増えてパルプ材の貯木場も目に入り、貨物列車も並んでいた。

左側にバザールが見えた。それは図上にある駅裏の市民の台所で、列車はすでに豊原駅構内に入っていた。期待していた列車の旅は午後3時53分に終わった。

このようなホテル列車の旅は70数年の生涯の中で初体験だ。アフリカの未開な国でも経験することは出来ない。時間を無視して走り、2日間で行き交う列車は一本もなく、駅舎にも人影はなく、ホームさえない。臭っていたのは鉄の錆だけであった。

網膜に映って脳中に残っているのは青い海に緑の草原と太陽、それに人の少ない草深い寂れた田舎である。しかし私は夢想家のような雰囲気の方が誰よりも好きだ。足を万里の流れに濯ぐような今回の旅は、本当に素晴らしかったと結論したい。



豊原市内観光 (下図参照)

不定期運行のホテル列車は予定より早く豊原に着き、計画を変更して午後5時から市内観光となった。

出発までの時間を利用して、何でも見てやろうと膝の痛みに堪えながら、意欲を燃やして駅前広場に出た。

「済世救民」、世と民を救った人が未だにレーニンだと思っているのか、と立像を素通りした。

戦前、広場の正面に建っていた、明治41年に発足の樺太庁(昭和5年建立)の庁舎は、跡形もなくなり、今はユジノサハリンスク市庁舎となっていました。名状しがたい複雑な心境で眺めなければならない。

樺太庁は一般行政のほかにも拓殖事務も管理し、長官は守備隊司令官を兼任して、文武にわたって大きな権限を持っていた。

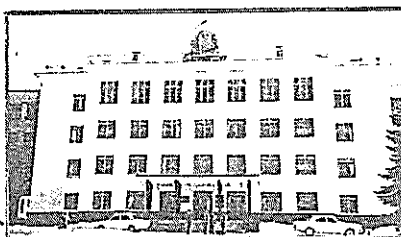
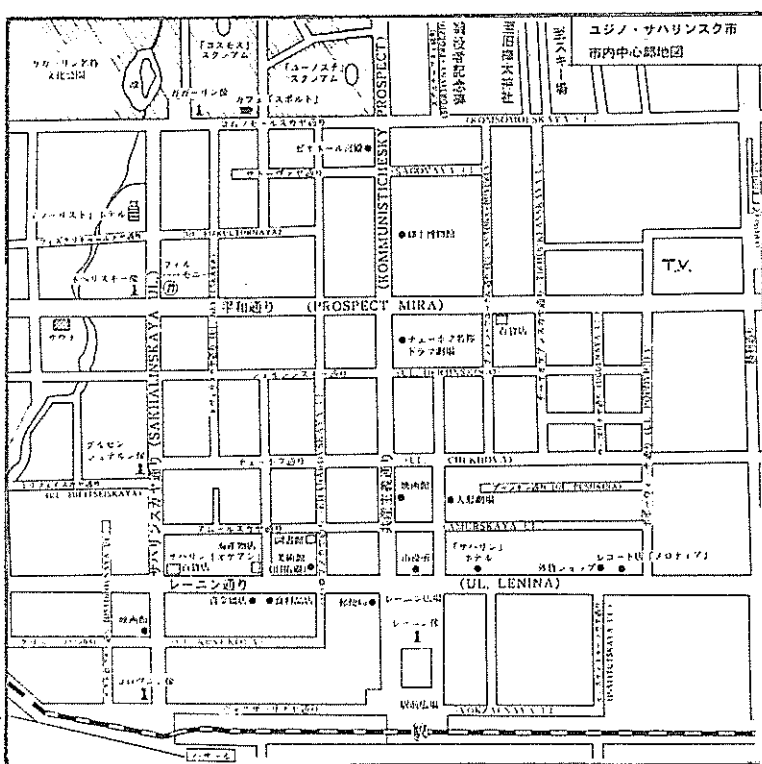
(右はユジノサハリンスク市庁舎)

豊原は樺太第一の大都市というものの自動車の数は至って少なく、信号機もない大通りを左に進んで、旧拓殖銀行豊原支店の見学に向かった。

地図には支店跡は図書館・美術館となっているが、写真で見てきた旧拓銀は図書館に向かって左に遺っていた。

まだまだ使用可能な鉄筋の立派な建物は、旧樺太庁博物館と共に日本時代を偲ばせる貴重な遺物であった。(右は旧拓銀豊原支店)

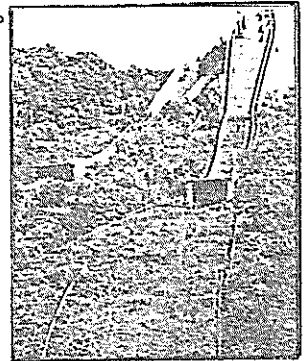
道路を挟んだ反対側の食料品百貨店を覗いて引返し、再び反骨が洋服を着たようなレーニン像を見ると、煮湯を飲まされた8月22日午後のソ連軍の空襲が思い出された。(記事は29頁に記載)



樺太の夕方の5時は未だ陽は高く、ホテルを出発したバスは東西に伸びるレーニン通りを通り、南北を貫く勝利通り（ポボーウィッチ通り）に入った。さらにテレビ局、体育館、戦勝広場、競技場を通過し、市街地を離れて北方の高台に進んだ。

曲がりくねった林道は天に届かんばかりの蝦夷松で覆われ、松の樹液の臭いがたち込めていた。その下に伸びる轍の跡が凹凸する坂道を登り、やや開けた台地でバスは停車した。

山頂に目をやると天空を透して2本のジャンプ台が見えた。この90m級と70m級のジャンプ台は世界選手権大会が開催され、日本の笠谷選手が優勝した競技場であった。しかしこれも日本の遺物ではないだろうか。（右はジャンプ台）



一方、下界の方には閑静で眺望絶佳な豊原の市街が、手に取るように展開していた。一行の中で豊原に住んでいた人達は恥を決し、懐かしさの余り首を伸ばし身を伸ばして眺めていた。

周囲の景観を陶然としながら瞰下してスキー場を去り、下って右折すると大きな広場であった。この中に戦没者記念碑があり、ソ連各地で見られるのと同じく、戦死者の氏名を刻んだ幅広いプレートが立っていた。

碑の前には銃を手にして鉄帽をかぶった兵士の像と、やや小さい2人の兵士の像が立ち、戦争を知らない国民を奮い立たすように、勇敢に戦ったと犠牲者の霊を礼賛していた。（右は兵士の像）



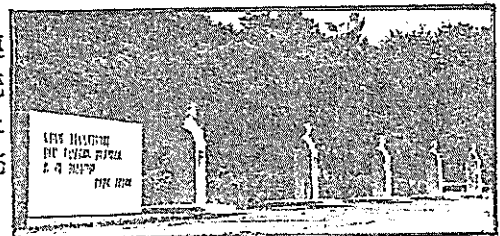
儼然としてこの前に立った私の心中は怒りで腸が煮えくり返り、「何をか言わんや」であった。ソ連の指導者たちは言語同断、呆れて言うべき言葉も知らない。

紙切れのように中立条約を一方的に破棄して8月9日に宣戦を布告し、8月15日にポツダム宣言を受諾して日本が降伏したのに拘らず、非道な戦闘を強いたばかりか、8月19日午前零時をもって在樺太日本軍は一切の戦闘行動を停止した後、ソ連軍は攻撃してきたのである。

この地に祀られたソ連の兵士たちは、冷酷無謀な樺太占領の犠牲者で同情するが、日本軍の戦死者は546名、一般国民も約2000人の犠牲を出したのである。

人民が互いに憎しみ合うように、仕向けることによって国を統治したソ連、憎しみを操って、人民を独裁者の究極的な武器に仕立てたソ連、その歴史を一般の人たちは知らないのである。

戦没者の霊を祀った記念碑の右側に、ソ連軍を指揮した5人の石像が、芳名を百世に流すように立っていた。私は怨み骨髄に徹した刺すような眼で、尊大に構えた5つの像を眺めた。（右は5人の指揮官像）



独り私は敵愾心を胸の片隅にしまい込み、^{オゾ}域内に立ち入らずにこの光景をカメラに収めた。驕る者は久からず、武威をもって国を傾けたソ連は、遂に崩壊の運命を辿ったのだと思いながら立ち去った。

バスはアントン・ブークル通りを南下して百貨店の前で停車した（前頁地図）。所謂、外貨ショップだが、狭い小さい売場は我々一行で寿司詰めの状態となり、それだけ外国人観光客が少ないのである。

店内はロシア本土の製品が多く、樺太の特産品としては琥珀だけであった。「琥珀は腐芥（くろけ）を取らず」と言われている。即ち琥珀は軽い塵は吸い付ける性質を持っているが、腐った芥は吸い付けられないのである。

腐った不正なものは吸い付けられないという意味であるから、琥珀がロシアに産出するのは甚だ疑問だ、と感じながら店外に出た。

するとオンボロ自動車を運転した青年が待ち構えていたように近づいてきた。車の中から大きな双眼鏡を買わないかと窓から出してきたが、ロシアの方が優秀だと思っているのかも知れない。おめでたい話である。

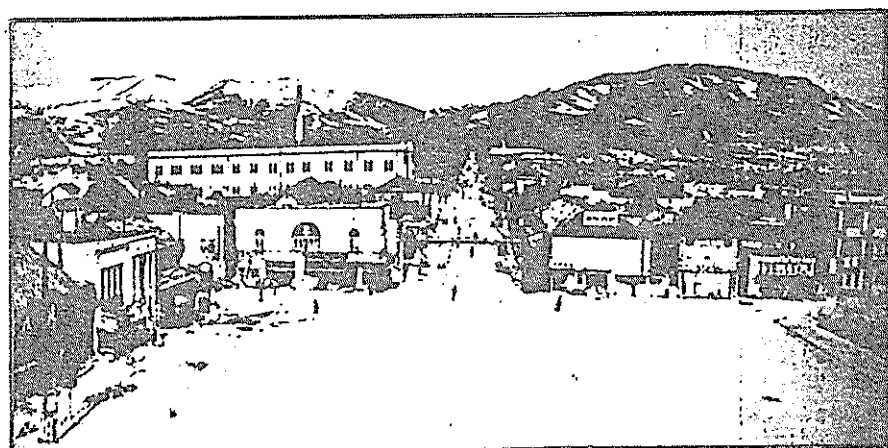
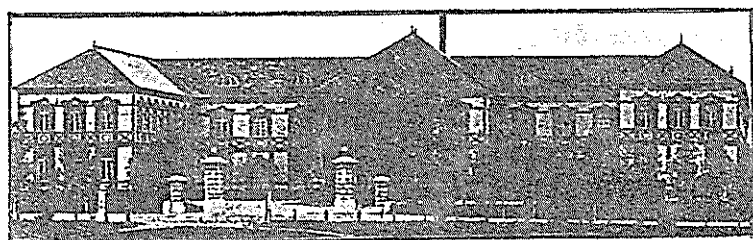
豊原に住んでいた一行の中の一人は、この百貨店のところに旧制豊原中学校が建っていたと教えてくれた。しかし私が知りたいのは豊原女学校であった。

住民を守って戦った我が札幌25連隊は一時、豊原高等女学校の校舎に収容されていた。しかしソ連軍はポツダム協定を破って将兵を故郷に帰還させるところか、逐次シベリア各地の収容所に強制連行した。そして飢えと寒さの中で強制労働に従事させ、多くの人をシベリアの土とさせたのである。

皮肉なことに豊原の市内観光は、烈風枯葉を掃うように理不尽に攻めてきた、ソ連軍の濡れ手に粟のような傷跡ばかりで、戦争と平和はコインの表裏だと誰かが言ったが、将に豊原はその通りであった。

〔下の写真は（株）ジューロ・サハリン代表・李世鎮氏から寄贈されたものである〕

（上は旧樺太庁舎、下は旧駅前広場と神社通り）



8月3日

(火) 晴

大 泊 (コルサコフ、下図参照)

6時半に起床して風呂を浴び、窓を開けると涼しい大気が流れ込んできた。気温は北陸の4月ごろの温度で10°Cぐらいだろうか。

日本の真夏日を思うと樺太は最適な避暑地で、痛い膝の治療が終わって高層の我が部屋から市街地を瞰下した。

鬱蒼として樹木の茂った広場の中央には相も変わらず、右手を腰に当てたレーニン像が立ち、それから南北に走る共産主義通り(旧神社通り)には、行政の中枢機関の石造建築が見えている。(53頁地図参照)

骨董的なバス待つ通勤客が今日も列をつくり、到着する満員バスから降りる人は列車通勤の労働者であろうか。彼らは殆ど冬装束の着崩れした格好で、鳩だけが活発に餌を探していた。

8時にホテルを発って 大泊に向かったバスは市街を通過し、半袖スタイルでは肌寒いと感じながら、霧が充満して延々と続く柳絮の並木を眺めていると、野菜を売る韓国人の姿も目に止まった。

日本の廃車であろうか、中古の車が広場一杯に展示されていたその街角で、「松島」と自己紹介した通訳が乗車した。彼の父親は1922年生まれで土建業を営み、彼の本職は時計商で細君は韓国人だという。

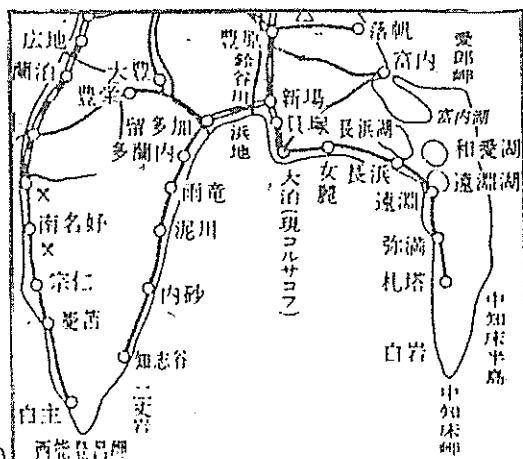
滔々と喋り出した彼は「止むこと知らず」といった能弁である。樺太には日本人会の組織はない。共産主義崩壊後は工場経営も個人商売も自由。煙の個人所有も認められた。ロシア国籍がなくとも出国は自由。野菜はイモ、キャベツしか採れず、果物は本土から輸入しているなど話は尽きない。久しぶりに日本人に接触した彼は、懐かしさのあまり日本語を喋りたかったのであろう。

韓国人に就いて質問すると、今では韓国人の反日感情は全くなく、平和主義に徹して共産主義の崩壊を喜んでいると答えたが、本当に嬉しいことであった。

大泊までの35kmの街道を退屈せずに話を聞いていると、まもなく海が見えてきた。そこは「貝塚」(サハロッカ、上図参照)という貝の採れる所で、昔はアイヌの本場だったと説明した。

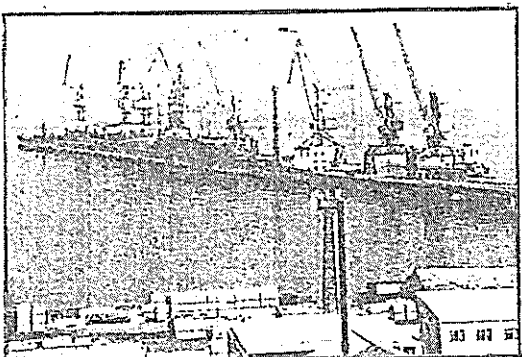
多くの日本人が生活していた証拠に日本家屋も遺っていた。付近にはウニや蟹の冷凍工場が建ち、韓国人の中には工場経営者やレストラン、その他の商売人も多く、割合に裕福な生活を営んでいると説明していた。一方のロシア人は主に工場労働者だということであった。

貝塚の海岸線の景観に見惚れていると直ぐ大泊の市街に入った。4日前に上陸した大泊は深夜のために何もわからず、今日は詳しく記憶に留めたいと、目を皿にして港の状況を凝視していた。



岸壁に数え切れないほどのクレーンが並んだ大泊港を右手にしながら、小さな駅舎の前にあるレーニン像の壁画を眺め、ロシア式のアパートが建つ高台で停車した。

特に眼につくのは日本時代の1000mもあるような大棧橋であった。昔を偲びながら一行は、朝の陽光が海面を明るく照らし出した光景に、一斉にシャッターを切った。(右は大泊港の景観)



不幸な運命を背負った邦人を乗せ、最後の緊急疎開船が出航したのは昭和20年8月23日夜で、その後はソ連海軍が海上封鎖してしまった。(それ以来、大泊は軍港となって非公開となった)

ソ連軍によって占領された樺太に残留されたのは、約30万人の日本人と約4万3000人の朝鮮人で、日本人は翌年の春から引揚げが始まった。これはGHQとソ連との間で結ばれた、ソ連地区引揚げ米ソ暫定協定によるのであった。

邦人の引揚げは昭和49年夏まで続いたが、ソ連は朝鮮人の出国を認めなかった。朝鮮戦争の勃発によって韓国は帰還問題を熱心に考慮し始めた。それは内戦で南北に126万人もの死者と、14万人の離散家族を出したからである。

1983年9月、大韓航空機がサハリン近海で撃墜され、ゴルバチョフ政権のペレストロイカ政策によって出国管理規則が改正されてから、日本政府も漸くこの問題に取り組む素地が出来たのである。

それまでは、サハリンの朝鮮人問題は日ソ間の議題ではないと言うのが、ソ連の基本的態度であった。樺太の韓国人が故国に里帰りが出来るようになったのは1989年で、ソ連は北朝鮮が反対していたから出国させられなかったのである。

〔以上、これらの歴史は大泊港にも関係するから記述した〕

雲一つない晴れ上がった大泊港を俯瞰していると、肺肝がえぐられるような悲劇が次々と想い出され、身の毛のよだつような戦慄を覚える。歴史の空間を感じるのであった。

港の手前に広がる倉庫の群に目を注いでいると、何万人も収容した倉庫は引揚船を待つ人で足の踏み場もなく、七輪で煮炊きしながら折り重なって寝たという光景が浮かんでくる。

又、帰国しようと港に集まった韓国人の倉庫を、爆破しようとしたと言うデマまで私の脳裏の中を走った。終戦直後の精神の平衡を失った民衆の恐怖と苦痛を考えると、倉庫群は伏魔殿のように見えるのであった。

歴史を遡る大泊を回顧すると、1790年、松前藩によって当時の「九春古丹」(5頁地図参照)に漁場と交易所が開かれて以来、日本の樺太経営の中心地となった。

(右は李氏に寄贈された旧拓殖銀行大泊支店)

1875年の樺太・千島交換条約後のロシア時代は、コルサコフ州政庁の所在地で、1905年のポーツマス



条約により南樺太が日本領となって大泊と改名した。まもなく樺太庁は豊原に移転したが、それまでは大泊に政治の中心が置かれていた。

現在のコルサコフの地名の由来は、1869年この地の一角（函泊）に、当時の東シベリア総督の名を冠して建設された、「コルサコフ哨所」から名付けられたという。

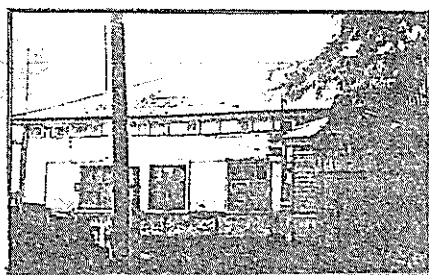
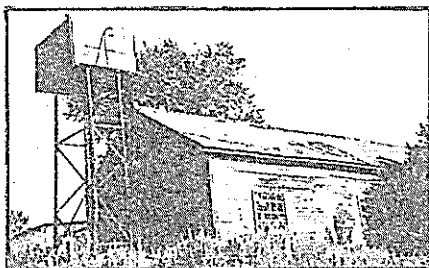
無限な悔恨の尽きない港を臨んだ高台を去ると、季節風と海流の関係から発生した霧も完全に消え、殆ど民家もない寂しい栽培畑の広がった郊外へと進んだ。

ロシア海軍の水兵の姿が見えた所でバスは停車した。そこから土堤に囲まれた中を進むと、古呆けた旧大泊小学校の建物が遺っていた。木造建築の学校は傷んでいる屋根も昔のままで、今は海軍の倉庫となっていた。

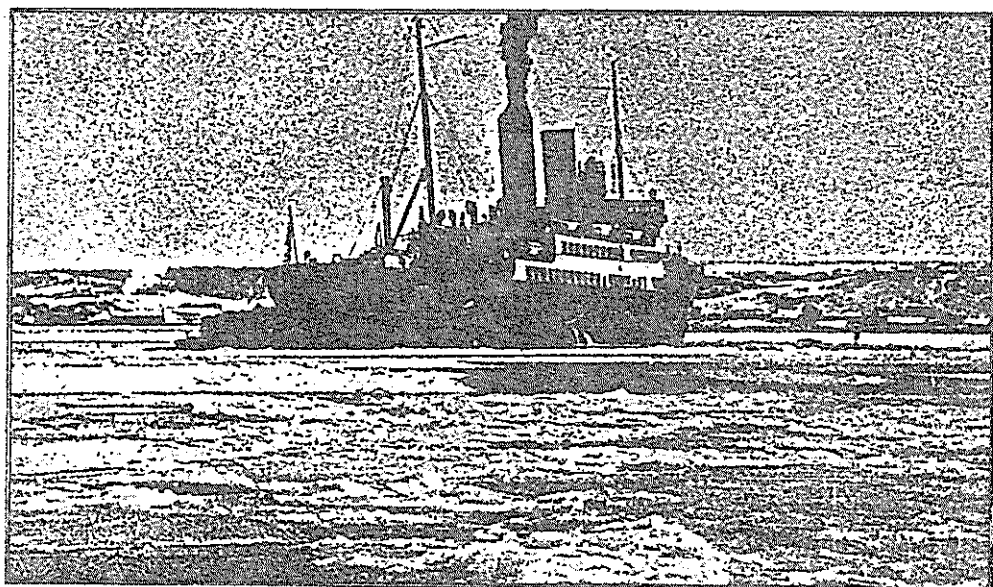
私などが学んだ時代の学校の建物は全て木造建築であったから、懐かしさのあまり端から端まで見て周った。

（右の写真の上は小学校の教室であった昔のままの校舎、下は管理棟）

大泊には旧制中学校もあり、諸官庁を始め製紙会社、冷凍会社、寒天会社、養狐会社などの子弟がこの小学校に学び、樺太開拓の優秀な人材が輩出したことだろう。



〔下の写真は、大泊港（コルサコフ）に停泊中の亜庭丸（昭和初期）である。明治42年に開港し、内地との交通の要衝として栄えたが、冬期は港内が凍結するため、沖合の氷上で荷役した〕



日露戦争樺太遠征上陸記念碑 (56頁地図参照)

大泊を後にしたバスは、亜庭湾沿岸の日を遮る樹木一本もない海岸段丘の上を疾走した。

行く手には真昼の太陽の反射に鋭くきらめく砂浜海岸がつづき、走ること約20分でバスは停車した。そこは波の微かな音が聞こえ、潮の香に包まれた海岸段丘で、磯に砕ける白波が延々と伸びていた。

通訳は小高い丘に通じる小道を先頭に立って登った。爽やかな風に吹かれ肩で息をして喘ぎながら後につづくと、丘の上にコンクリートの塊が見えた。(これは碑の台座であった)

初夏が春を連れてやってきた丘の上には、一望の草原が花の野となったように、黄色や紫色の可憐な花が咲いていた。

萌えてた名前も知らない優雅な花が咲く頂上に辿り着くと、草深い裂け目の中に転がっている碑が目止まった。

草を掻き分けてみると、大きな碑の面に「遠征上陸記念碑」と大文字で刻まれていた。その左に小文字で「陸軍中将正四位勲二等功四級・吉江〇〇書」、さらに左に「1904年・日露戦争」と彫られていた。

通訳に位置を質ねると「ダロンニの丘」だと答えた。(遠いという意味である) 恐らく56頁地図の女麗と長浜の中間だと判断される。

(上の写真は記念碑、右は台座。破壊されている)

満州で日露両軍が相対していた最中の明治38年4月(1905)、大本営は樺太奪取の方針を定めた。

当時の樺太にはロシア軍の歩兵1500名、砲24門、義勇軍5300名が大泊とアレキサンドロフ(32頁地図参照)に終結し、年頭から兵力を増強中であった。

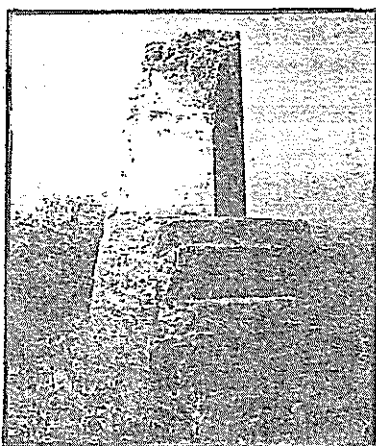
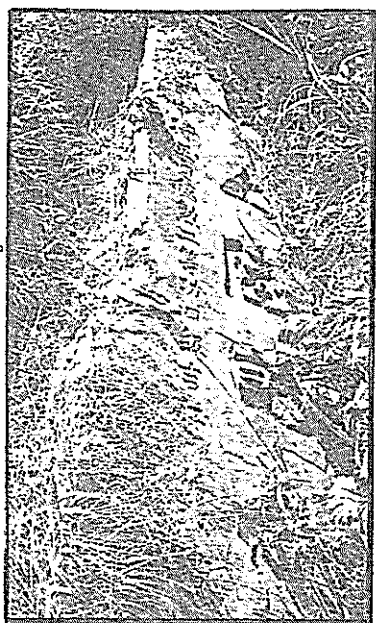
この樺太攻略に充当されたのは、越後高田で編成された独立第13師団(原口清済中将指揮の歩兵第25

・26旅団)であった。歩兵第25旅団は7月4日大泊付近に上陸、26旅団はアレキサンドロフ付近に上陸を敢行した。

両上陸軍は豊原等で抵抗するロシア軍を撃破して平定作戦を行っていた。しかし満州のロシア軍が敗退した後であり、戦意は低下し微弱な抵抗をしたのみであった。

島内は8月30日、概ね平定を完了し、樺太南部守備隊の編成が下令され、独立第13師団の山田保永少将が司令官となり、樺太守備隊司令部と称した。

この樺太守備隊は翌年の39年から、北海道の第7師団が兵力の派遣を担当するこ



とになり、大正2年の同守備隊が廃止になるまで続いた。

その後、久しい間、樺太に軍隊の姿を見ることがなかったが、昭和14年5月23日、樺太混成旅団が編成された。（ノモンハン事件当時である）それが昭和20年に第88師団に改編されることになった。

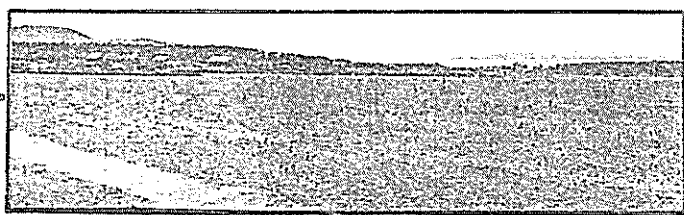
ダロンニの丘に登って初めて日露戦争時の樺太出兵を知り、改めて上陸記念碑を痛快に息をのんで見詰めた。今ここに咲く花も当時は征旅の寂しさを慰めていたのだと、女神のように美しく目に映るのであった。

一行は絶え間なく微かに響く波の音を耳にしながら、丘を下って富内湖に転進した。

富内湖（トゥナイチャ湖、56頁地図参照）

上陸記念碑から富内湖に通じる道路は悪く、バスは大打に引き返して富内湖へ進んだ。

蝦夷松の林を通り抜けると海面が盛り上がったように急に近づいてきた。



海岸線の手前に銀の雪のように輝いた湖水が拡がり、悠然とした自然は絵になる光景であった。まさに温かい溫柔郷である。（上は富内湖の景観）

二つの湖を跨いだ橋を通過した。包のように大きく半円を描いた天空は富内湖やオーツク海を覆い、渺茫とした海洋は波をくたく海岸段丘で淵どられ、時間が止まったような静けさであった。

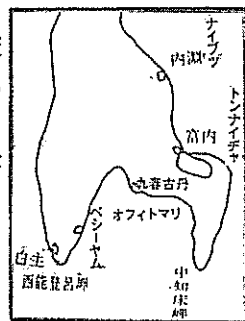
うつろな眼を沖に向けるとオーツク海に一隻の鮭の母船が浮かび、北の富内湖畔に見える牧牛は、自分の意思を持たないように草を喰んでいた。この茫洋とした眺望は優れた山河襟帯にも劣らないだろう。

オーツク海の潮風は冷たく、空気を震わせている波の音に耳を傾けていると、私は蚊の鳴く声に包まれていた。その瞬間、間宮林蔵が「聚蚊雷を成す」と書いていた樺太探検記が想い出された。

間宮林蔵は西能登呂岬から九春古丹（大泊）に着くと、中知床半島の付け根の陸地を横ぎり、東海岸に出るのがよいと教えられた。（右の地図参照）

アイヌの話では中知床半島の付け根には沼や川が多く、東海岸へ抜けるには好都合な地形だというのがあった。

林蔵は小舟を川面に進めると、アイヌの言葉の通り沼に出た。舟は沼から別の沼に入り、陸に上がると舟をひいて陸地を歩き、川岸に出た。



翌日もまた舟を川面に浮かべて北に進むと大きな湖に出た。これが富内湖である。それを更に北上し東海岸の富内部落に辿り着いた。

林蔵もアイヌも顔や手足が蚊や蛇に刺され、掻いたために化膿した。そこで林蔵は治療の効果がある酒をその部分にたらし、アイヌたちにも手当をさせたという。

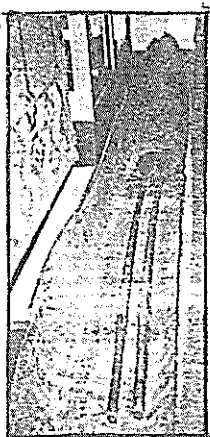
天候が悪く高波が海岸に押し寄せて舟を出すことができず、林蔵一行は富内に5日間も滞在した。これは日本人として初めて辿った富内の地である。

(右は豊原の博物館に展示されていたアイヌの小舟と櫓)

富内湖から中知床半島にかけて、私と同期の藤田幸夫君が大隊長として昭和20年5月頃まで、対米上陸の障地構築していた地域であった。(終戦近くになって急転、対ソ戦に備えて西海岸に転進)

この地勢を一瞥すると、丸裸の地形のこの線は防禦には最も困難なところで、藤田君も障地線の設定に悩んだことだろうと、我がことのように考えていた。

暫く雄大な富内湖も見納めだと名残惜しく眺めていた。これに比べて我が存在は無に等しい小さなものだと感じながら、バスに乗車すると、富内湖の景観がこよなく美しく忘れ難く見えていた。一行は一路スピードを上げて豊原に向い、午後1時30分に帰還した。



豊原市内観光 (53頁の市内地図参照)

樺太紀行はいよいよ千秋楽を迎え、午後は再び豊原市内観光となった。立ち籠めていた朝霧もすっかり消えて空には雲一つなく、温度計は汗ばむほどの28°Cを指していた。

樺太に上陸した当初の寒さに比べれば格段の温かさで、通訳の松島氏は我々一行が日本から暖かい空気を運んできてくれたと、お世辞を振りまいていた。

先ず駅裏にあるサハリン名物の一つといわれる自由市場に案内された。一見すると中国各地と同じような青空市場であった。衣料、雑貨類を売る商人はロシア人と韓国人が半々、野菜、果物類は韓国人の独占場で、売場は明瞭に区分されている。

市場に店を構えるのには権利が必要なのであるうか。深い皺だらけの韓国人の老婆たちは市場の片隅で、古汚いバケツにイチゴを山盛りに入れて立っていた。(立ち売りの闇商人)

注意しながら観察していると、白衣を着て眼鏡をかけたロシア人の女監視員は、不幸の塊のような老婆たちを追い払ってしまった。

衛生上の問題は露天市場では全部同じではないかと思っています。監視員が立ち去るや否や、一旦は離散した老婆たちは再び元の位置に戻って商売再開だ。樺太を墳墓の地と決めた彼女らと監視員は、何回も鬼ごっこのように集合離散を繰返し、賽の河原であった。(上の写真は市場の光景)



イチゴはジャムを作るのかロシア人の買手が多く、権利を笠に着た嫌がらせのようにしか思えない。この光景は共産圏の各地で見られる独特なもので、朝鮮半島の唯一の合法国家として北朝鮮を認め、韓国と分断した跡が未だに市場に残っていた。

1時間の自由市場の見学は時間を持て余し、紀行文に綴るようなものも見当らず、乗車したバスは駅前に引き返して旧神社通り（共産主義通り）を北上、山手に向かった。

天蓋のような大樹の蔭は森閑として広がり、その中を走る坂道には松の臭いが流れて、如何にも日本的な情緒が漂っていた。

丘の中腹にある小さな広場に停車すると右にスキー場が見え、左に小奇麗な建物が立っていた。

これが旧樺太神社の跡に立てられたホテルで、恐らく官庁関係の役人が使用しているのであろう。

樺太神社は明治43年に創建された日本最北の官幣大社で、大国魂命などの三神を祀り、樺太庁始政記念日の8月23日に例祭が行われていた。

（官幣とは宮内庁から神社に幣帛を捧げる意）

「国破れて山河在り」と言うべきか。敗戦の始めさを噛み締めて跡地に立つと、寂として声一つなく、私の脳細胞の全てが灰色になつたような感じであった。（上の写真の上段は旧樺太神社の参道と鳥居、下段は現在の姿）

一時を傷心しながら送り、黙々と陽光が松の大樹を直射する坂道を降りた。道に敷かれていた石段は完全に取り除かれ、実に歯痒い思いである。

丘を下った所から伸びる長い昔の参道にも大樹が茂り、歳月を感じさせていた。敗戦時の豊原市民の心境は如何ばかりであっただろうか。我々が死ぬのは仕方がないが、日本という国は一体どうなるのだ。日本民族の行方を真剣に考えたことだろう。

「社稷墟となる」、社稷（国）が滅んで祭が絶え、祭場が消滅して荒された姿を押し、深い悲しみに包まれながら参道を去ったのであった。

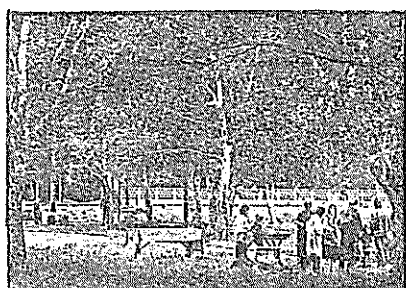
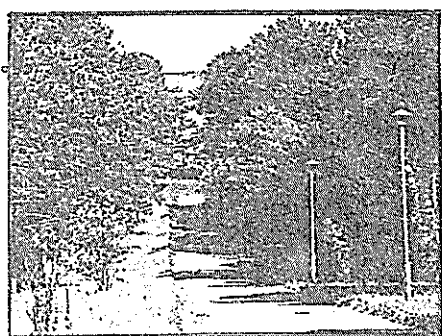
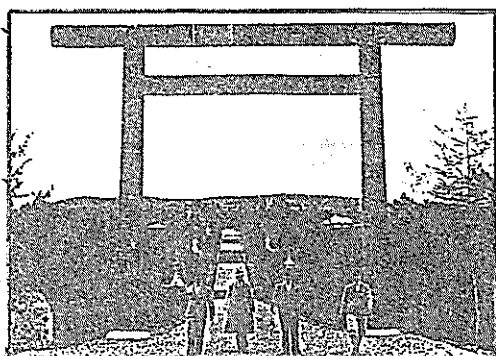
樺太神社跡からバスは戦没者記念碑の前を通り、ガガーリン文化公園へと向かった。ここは旧豊原公園で、名称は変わったが今も市民の憩いの場所であった。（右は公園内の風景）

なぜソ連はガガーリンの名を付けたのであろうか。多分、初めて宇宙衛星を打ち上げたとき、この場所に追跡基地があったのではないかと思っていると、高いアンテナが目に入ってきた。

周囲4kmもある公園には鬱蒼とした木立が蔭を落とし、私も老いては麒麟も駑馬に劣ると、重い足取りで殿を歩いた。

園内には池を中心にしてテニスコート、サッカー競技場があり、遊園地には観覧車も見えていたが運転は中止していた。NHKで報道していた子供鉄道も走っていた。これはロシア国鉄が管理し、運営はすべて鉄道学校の子供が行っている。

目の薬となるような青葉の茂みの中には、野鳥の羽ばたきの音も啼き声も聞こえず、

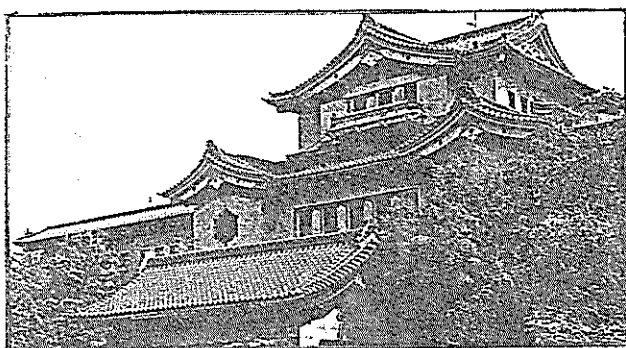


何の情趣も感じないまま出口にでると、そこにガガーリンの像が立っていた。

公園を離れたバスは旧神社通りへ右折すると、直ぐそこに日本時代を偲ばせる純日本式の城郭が聳えていた。

嘗て樺太庁博物館のこの建物も今ではサハリン州の博物館となっていた。(右は博物館)

日本が遺した威風堂々とした博物館内は、樺太の自然、歴史、産業、芸術などに分類されていた。



日本の武士の鎧を始め、アイヌが使った舟や狩猟具、生活用品から、樺太の陸地に棲息する熊、トナカイ、狐、テン、リスなどの動物、或は近海のトド、アザラシ、オットセイなどの海獣、それに鮭、鱒、蟹、ニシンは本場らしく展示されている。

特に日露戦争による日本の樺太占領から昭和20年の終戦に至るまでの、日本人の実態を知るコーナーが設けられていた。そこには珍しく日本の小学校の通信簿まで展示され、これらは殆ど日本時代から展示されていたものだろう。

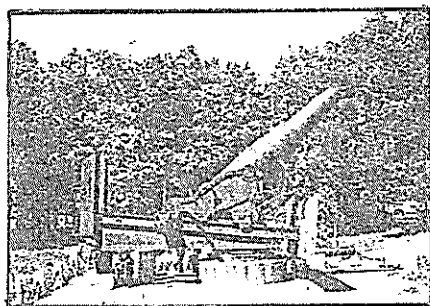
文化は魂の表現、自然が人間に乗り移ったものだと感じながら、日本の昔ながらの文化遺産に注目をつづけた。

古稀を過ぎた私が小学生に返ったように感慨深く眺めたのは、北緯50度線の日ソ国境の標石である。我々が小学生のときに使った教科書にこの標石が載っていた。その記憶が蘇ってきて実に懐かしい。(標石は2頁に掲載)

標石の日本側には菊の紋章、ロシア側はロマノフ王朝の双頭の鷹。ロシアのレリーフを見たのは初めてのことであった。

館の3階は外貨ショップの店となっていたが、昨日おとずれた百貨店と同じ商品が並んでいた。西側諸国のように店特有の品物はなく、少し中国を見習うべきではないだろうか。

階段を降りて広い日本庭園を回ってみた。すると手入れの行き届いた庭園の一角に、日本の攻城砲であった24糎榴弾砲が1基、重々しい威容を遺していた。



私には砲の詳しい歴史は判らないが、想像すると、日露戦争の勝利を記念して据えたものではないだろうか。(上は24糎榴弾砲)

一副の歴史絵巻のような城郭を見上げていると、峯木十一郎中將が第88師団長としてこの城に司令部を置き、ソ連と戦われた胸臆が察せられた。

以上で予定の観光は無事に消化し、歴史に流されながら一方では歴史をつくっている豊原市街を、銘肌鏝骨の眼で注視しながら帰館の途に着いた。

お別れ晩餐会

午後7時30分からお別れパーティが開催され、会場となった食堂に入ると見違えるように飾られていた。テーブルは白布で覆われ、花瓶にも赤、白、紫の花が生けてあり、質素な生活の樺太では最大級の持て成しである。

サハリン観光公団と（株）ジューロの共同主催の司会者として、まずジューロの杉山部長が旅行参加に対する御礼の挨拶を述べ、各出席者を紹介した。

次いで観光公団の支配人、副支配人からホテルのコック長、女子従業員の長までも、それぞれ感想や歓迎の辞を述べ始めた。

観光公団支配人はサハリン訪問に対する感謝を述べた後、我々は日本に学ばなければならないと真摯な心を披露した。更に「我々は今世紀末までには日本の水準に達する」と、自信に満ちた発言を続けたのであった。（通訳）

私は彼のスピーチを「木に餅がなる」ような甘すぎる話だと聞いていた。現実から乖離して夢想に溺れているような発言は、正に「井戸の中の蛙大海を知らず」と言わなければならない。

共産党の権力機構の従順なロボットに過ぎなかった人々が、冷戦構造が崩壊した今も時流に乗り、観光公団の幹部に出世したのではないだろうか。

次々と勇んで話すサハリン側のスピーチを聞いていると、彼等が信奉してきた共産主義は「ただで飯が食える公共食堂」だったことを、自覚しているのかと言いたいのであった。

しかし、臍で茶を沸かすような自惚れた話は別として、戦争という憎悪と殺戮の悪夢が覚めてしまった現在、敵も味方もなく、平和な雰囲気の人間性が開花したパーティには、衷心から感謝したい。

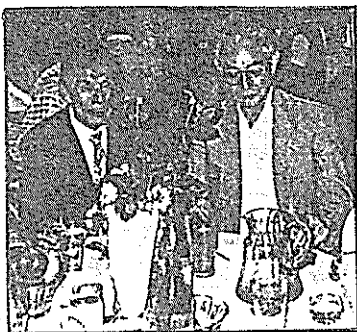
私の隣席には杉山部長が紹介した（株）ジューロ・サハリン代表「李世鎮」氏が座り、早速、名刺を交換した。日本名は「高松隆一」で旧制豊原中学校出身者である。（上は石井さんから寄贈された写真で、左は李氏、右は私）

懐かしそうに彼は中学時代の軍事教練や武道の猛訓練、上級生の鉄拳制裁などの想い出話を語っていた。そして共産主義を罵倒する言葉には真に迫るものがあり、戦後の韓国人の心中が察せられた。

私と旧知のように語り合っていると、彼は胸奥の闇に灯をともしたように歓喜して、明朝の出発時には戦前の豊原の写真を提供すると約束した。この写真が紀行文中に掲載した戦前の写真である。

突然、姉妹都市締結のために訪れた一団から、貰ってきた毛蟹の差し入れもあって甘脆の味を堪能したが、「弓は袋に太刀は鞘」となった今日、東の間の宴とはいえ、饗宴は千万言にも優る親善の実を上げ、旅の疲れを癒したと思う。

下戸の私は一足早く席を立つと、呼び止めた杉山部長は公団支配人を私に紹介した。早速名刺を交換し、「人琴の歎」の過去を忘れて手を握り合ったのである。



8月4日～5日

(水・木)

晴

帰国の途につく

通訳の松島氏が述べた言葉のように、我々一行が日本から運んできた天気は今日も続き快晴であった。

昨夕のパーティで親しくなった李氏から、約束した10枚ばかりの写真を受取り、朝食を終えてプラットフォームに足を運ぶと、観光公団の支配人、副支配人たちは笑顔で見送りにきていた。

人生は不思議な縁で結ばれているが、永遠の別れの時がきてしまった。名残惜しい。

我々一行のために公団が提供してくれたガソリンカーは、既に青い車体はホームに横付けになっていた。今もなお健在なガソリンカーは1936年、日本車輛(株)が製造した流線型で、実に57年間も現役で活躍している。

子供の頃を思い浮かべながら乗車した。頑丈だが暗い車内の座席は木製で、今では考えられない骨董的な貴重品である。これだけでも樺太の現状を知ることが出来るだろう。

世話になった人たちに手を振られながら出発すると、車体はガタガタと振動して騒音を撒き散らし、話す言葉も聞き取れない状態であった。

(上の写真は、上段はガソリンカー、下段は戦前を思い出す豊原駅のスタンプ)

車内に吹き込む涼しい風を受けながら、沿道の景観を名残惜しく眺めていると、万感こもこも胸に迫るものがある。それは敗戦のために個人が犠牲になった邦人や韓国人のことで、戦争の暗い痛手を各所で目にしたからであった。

樺太滞在中、物不足の中で、精一杯の歓待をしてくれた人々の真心は忘れられず、永遠の平和を祈りながら懸命に生きてほしいと願っていた。

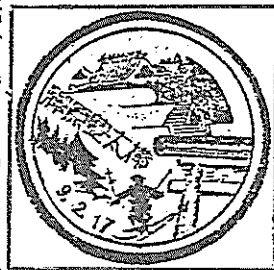
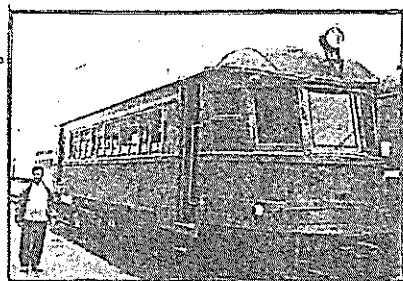
ガソリンカーは40分後に大泊駅に到着した。聞いていた噂とは正反対に税関通過は簡単で、所持金を調べただけであった。

(右は戦前を思い出す大泊駅のスタンプ)

幾多の不幸を秘めた悲しみを忘れたような大泊栈橋を渡り、11時に出発した船は円く見える滄海を滑るように走り、快適な6時間の船旅を終えて、夕刻5時に稚内港に接岸した。

嵐の高波に揺られながら出航し、輝く陽の光を浴びて帰着すると、旅で親しくなった人との別れには辛いものがある。誰かが人生は航海だと言ったが、旅はまた人生の縮図かも知れないのだ。

稚内駅近くのサン・ホテルに一泊、翌5日は7時52分発の急行「宗谷」に乗車し、札幌駅では斉藤さん夫婦の出迎えを頂き、千歳空港を飛翔した飛行機は午後5時に小松空港に到着した。



あとがき

第2次大戦中、徴発された農耕馬が中国戦線で、偶然にも昔の飼主とめぐり合ったところ、鼻面をこすりつけて喜び、どうしてもその場を動かなかった、という話を聞いたことがある。

図らずも人間の私が遠い異国となった樺太を訪れ、出身連隊の札幌歩兵第25連隊が、終戦時に冷酷非道な戦闘を強いられ、血を流した苦闘戦場の跡に立った時の心境は、農耕馬と同様だったと思っている。

膝の関節痛に心まで落ち込んでいた私は、精神的にまで悲嘆することは人生を短縮して光明まで奪われると自覚し、愚息の助言もあって樺太行を思い切って決行した。その結果は杞憂に反して竜頭蛇尾に終わらず、「四方の志」を得たのであった。

私は「諦めは心の養生」とか、「諦めが肝心」という言葉は肯定しない考えである。苦しむことは生きているからこそ経験できることで、試練に耐えてこそ人は成長し、よりよく生きられるような気がする。大事なことは心の健康である。

今次の旅は前向きに老いを求めて効率を考えず、遊びの価値観を探る旅だと思っていた。しかし胸奥にあった想像とは裏腹に、寒村貧村の僻地で錆くさい生活をする残留韓国人を見たとき、民族の悲劇だと胸が締め付けられる思いがした。

しかし私が多くの残留韓国人に積極的に接触した感じでは、彼等は今を一生懸命に生きていた。過ぎ去ったことは改めようがなく、大切なことは気持を切り替え、前向きに生きることだと反対に教えられた。

一方、骨を折らずに多くの利を得た、「田父の功」のロシア人は如何であろうか。一言でいえば「鳥なき里の蝙蝠」である。優れた人のいないところでは、取るに足りない者が威張っている。（李世鎮氏の言）

一斑を見て全豹を知ることが出来ないが、「門前羅を設くべし」という感じであった。即ち、訪れる人が少なく門のあたりに雀が群がっているから、網（網）を張って雀を捕らえることができる、という寂れた状態である。

8月28日の北国新聞の記事によると、サハリン州知事は「日本と同じ程度の生活水準になるには、50年か100年はかかるだろう」と述べている。これは「鳥の頭が白くなるまで」というか、永久という意味であろうか。

私の申したいのは、「片手で錐は搦まれぬ」ということだ。他国の援助協力がなければ絶対に発展しない状態である。「鼎の沸くが如し」のような、争い事の止まないロシアの国内状態では、発展は困難であろう。

物質的な豊さばかりか、心の豊さも見られない樺太を旅し、九牛の一毛を見てきたに過ぎないが、今回も亦、蛙鳴蟬噪の記録を残すことにした。

これからも旅が楽しみならば極楽だと、機会を求めて足で歴史を学びたい。

平成 5 年 8 月

下は李世鎮氏から寄贈された写真。

上段は空襲に備えて防火地帯を作った駅前通り、下段は第四国民学校

